Sato, Tsurukichi
Kokugo kaishakugaku
Kinsei kaishakugaku

国語 解釋学

近世 解釋学

佐藤 鶴吉

國語科學講座

— X —

國語解釋學

近世解釋學

佐藤鶴吉

株式會社
明治書院

國語科學講座

— X —

國語解釋學

近世解釋學

佐藤鶴吉

株式會社
明治書院

目次

近世解釋學

佐藤鶴吉

例言五條

一、本稿は普通の國文學史にいふ近世期の前半、即ち上方時代を主たる對象として執筆した。

一、解釋學といふものが、自分には未だよくわかつてゐない。近世文學も同樣である。今はわかつてゐるだけの知識で書くより外に仕方がなく、かなり努めたけれども、思ふやうに書けなかつた。

一、多くの內容に亙ることを短く言ふには、抽象的な原理で行くか、具體的な例で推すかである。自分はこの二途の調和に殊に苦しんだが、主としては例を以て他を推すやうに心組みながら、なほ理論になづみ過ぎたやうである。

一、引用記號のうち、『　』は書名や論文の題目を、「　」はその文句を示す方針に從つた。尤もそれらの引用が、他の字面と紛れる憂がない場合は記號は略してもある。

一、解釋學說では石山脩平氏の說に負ふ所が最も多い。その他の學者の說も引用したが、その引用には、自分の誤解や解釋の不徹底なものがあるかも知れない。讀者には、拙稿の引用を以て、それ〴〵原論者の說を批判されないやうに望む。

昭和八年十二月廿三日朝　　親王殿下御誕生のラヂオニユースを聽きつゝ擱筆

一　近世註釋研究と解釋學

近世解釋學とは、古代解釋學・中世解釋學と對立的に考へれば、近世文學を解釋するに當つて應用さるべき解釋學といふ義であること勿論と思ふが、また、近世に發達した解釋學といふ意にもとられないことはない。本講座の體系では固より前者の義に從つて起稿すればよいのであつて、特に問題はないのであるが、自分はこゝに我が近世に發達した註釋の學と、いはゆる解釋學とを比較して一言を序して見たいと思ふ。

我が近世學者の古典研究には、註釋(ちゆうさく)や講釋(こうさく)などと稱して、古典の本文の意義を說きあかすことが行はれたが、未だ解釋學といふ語が出來てゐなかつたのは勿論、解釋といふ語も餘り用ひられなかつたやうである。しかし事實に於て、例へば『萬葉集』註釋に於ける契沖・眞淵・雅澄等の業績、『古事記』研究に於ける宣長の態度と成果、『源氏物語』に對する、同じく宣長や廣道その他諸學者の研究成績、或はその學說・評論とも謂ふべきものを検討するとき、そこには方法論的に見ても尊敬すべき多くのものがあると思ふ。西暦一九〇〇年にディルタイの『解釋學の成立』が發表されて、我が國にも將來され、既に二種の譯文がある。その他、垣内松三教授の『實踐解釋學考』や山本英一氏の『解釋學的領域』(昭和八年四月刊『言語』所收)や、石山脩平氏の『解釋學と國語教育』(昭和八年四月刊『最近の心理學と國語教育の問題』所收)などが管見に及んだもので、後に言ふ如く、自分もそれ〴〵から種々な點に於て啓發され、いろ〳〵暗示と刺戟とを受けて、大いに感謝はしてゐるが、さてそれら諸學者から飜譯され紹介され講述されてゐる各種の原理を、實際の文學作品の本文に應用して見ることは、決してなまやさしいことではない。さう思ひ

ながら、再び前述したやうな我が近世諸學者の古典研究の成績なり方法なり學說なりを見返すと、やはり、自分などが依つて以て直ちに範と仰ぎ、我が前に置かれた近世文學に對する解釋にも、取つて以て應用すべき態度と手段とを示してくれるものは、すなはち眞淵であり、宣長であり、廣道であると感ぜざるを得ない。固より百五十年も前の、以上我が國の諸學者に比すれば、三十年前のディルタイその他の西歐學者の方に、學として方法論的に優れてゐるものがあるのは當然であつて、それらに對して學問上排外的思想を抱くべきではないが、吾々としては、先づ二十年、三十年、殆ど全生涯を捧げて眞劍に古典研究に精進した我が近世國學者の所說に、第一に傾聽すべきものが無い筈はないといふことを忘れてはならぬと思ふのである。

賀茂眞淵の解釋學說とも謂ふべきは、例へばその著『萬葉解』の總論に據つて一端を窺ふことが出來る。（萬葉集の解釋そのものは、古代解釋學の範圍に屬するが故に自分は立入らない。今、こゝには單に解釋學的手法そのものを一瞥するのみである。以下、宣長、廣道等について言ふ所も、同じ主意からである）その要を摘むと「萬葉を讀まんには今の點本を以て意をば求めずして五たびよむべし。その時大概訓例も語例も前後に相照されておのづから覺ゆべし。さて後に意を大かた吟味する事一たびして、その後活本に今本を以て字の異を傍書し置きて無點にて讀むべし。極めて讀まれぬ所々をば又點本を見るべし。かくする事數篇に及んで後、古事記以下和名抄までの古書を何となく見るべし。その古事記・日本紀・祝詞・宣命の文などを見て、又萬葉の無點本を取りて見ば獨り大半明かなるべし。疑ありとも意におもひ得んとすればまた僻事出來るなり。千萬の疑を心に記し置く時は、書は勿論、今時の諸國の方言俗語までも見る度聞くごとに得ることあり。さて後ぞ案をめぐらすにおもひの外に定說を得るものなり」と言つてゐる。

卽ち、第一に訓點をたよつて、意味を求めることなしに反復讀誦すること、第二に意味の大體を吟味すること、第三に文字の異同を校合して無訓點で讀み、讀めない所々は再び訓點本に依ること、第四に以上の手續を數篇（數卷の意か）試みたならば、古事記以下の古典を何となく見ること……といふ順序になる。そして最後に、各種の疑問が出來ても、強ひてこれを解からうとすると却て僻說に陷る故に、疑問は疑問として常に心に存しおいて後考の機會を待てば、案外なところで定說が得られるといふのである。古典殊に訓讀そのものが研究對象となる萬葉の如きものに對しての解釋學說が、總べて直ちに近世文學に應用されるといふわけではないが、以上數箇條の手續は、近世解釋學の上にも好箇の參考となる。その內殊に「古書を何となく見るべし」といふ如きは、その本文と同時代の文獻を出來るだけ讀めといふのであつて、これは當然必須の條件であり、眞淵以外また萬葉以外の、古典學者及び古典學が實際よく試みてゐる事であるが、この事はまた近世文學の解釋にも當然必須の條件である。近世文學の解釋のみならず、あらゆる時代の文學解釋に必須な條件である。時代を知る、社會を知る、環境を知る、前後を知る。その爲に「古書を何となく見るべし」である。眞淵以前に新井白石が「古今の言に相通じなんには先づ其世を論ずべき」（東雅總論）を說いてゐるのは餘りに有名である。言とは必ずしも言語に限らない、既に古學者の言つてゐるやうに、こと（言）は事であると見てよいのである。次に「疑ありとも意におもひ得んとすれば僻事出來るなり云々」と說いてゐるのは、性急な作爲がましい解釋に、とかく牽強附會な說の生ずることを戒めたものである。これは解釋に經驗を重ね苦心を積んだ者の何人も首肯するところで、流石に眞淵の言葉であると思はれる。その「方言俗語までも見る度聞くごとに得ることあり」と言つてゐる如きは、今日近世文學の解釋に於て僅かに學者が氣づいて實行しつゝあることを、疾くの昔に敎へてゐた

わけである。

眞淵は更に進んで「凡そ後世の人古書を見んには後世の習を忘れて心を空しくしてみるべし。さて大寶の令律を學びて千年以來行はれたる法制を知るべし……次に古事記を見て神代以來語り傳へたる事を知り、……和語の源を極め、萬葉に相照し見るべし」とも說いてゐる。卽ち法制の知識と傳說の硏究と語原の探求とが解釋に必要であることを示したもので、例の「貧窮問答」の長歌の解釋には、大寶令の戶令の條文を引用して當時難訓とされた字句を訓み得てゐる。法制・禮式・慣習等の知識が、語原解や傳說と共に必要なことは、獨り萬葉集の解釋に當つてのみではない。

これら眞淵の解釋學說は、また**本居宣長**によつて屢〻祖述されよく實行されてゐる。例へば『古事記傳』の一頁でも二頁でも繙いて見れば、それはすぐ納得がゆく。理論的にはともかく、古事記傳のやうなものを少し落ちついて讀めば、西歐學者の說いてゐる如き解釋學說の內、今自分が理會してゐる程度の原理のあらましは、旣に獨自にそこに實行されてゐはしまいかと思はれる。語學的に文獻學的に、當時のあらゆる文獻に當り、あらゆる類書に照し、歷史として傳說として文學として、如何なる事柄が如何なる目的で如何なる調子で書かれてゐるか等の問題に亙つても、實によく闡明されてゐて、今日の新學問を以てしても根本的にこれを動かすなどいふことは到底出來まい。宣長が三十五年の間、その生命を打込んで從事したこの大事業の副產物として、なほ他に多くの著書があげられるが、勿論特に解釋學として見らるべき纏つたものはない。しかし『玉勝間』には「神典のときざま」(卷二)、「萬葉集をよむこころばへ」(卷十一)、「皇國の學者のあやしき癖」(同卷)、「物をときさとすこと」(卷十)、「もろこしぶみをもよむべきこと」(卷一)、「がくもん」「からごゝろ」(同卷)などの諸條は主として古典の解釋に關する隨筆であり、その他の條に

も貴い體驗から出た敬ふべき解釋學上の教訓は斷片的ながら多く見出されるであらう。『玉の小櫛』は源氏物語の註釋書と稱されてゐるが、その內容はこれ又實に立派な解釋學として銘を打つてもよいものであらう。殊にその「物のあはれ」論の抽き出される一・二の卷は、卓拔な鑑賞論であり批評論でもあること今更言ふまでもない。その批評論にしても、今日の解釋學にいはゆる內在的批評にもなつてゐれば、或は超越批評にも亙つてゐる。又その二の卷の末に「物語にうとき人は、其世の有りさまを、くはしく知らざる故に、知らぬ世界の心地せられて、物遠くおぼゆるふし多きを、此物語をよくよみて、そのかみの世の中のありさまに、心のなれぬれば、古き歌はさらにもいはず、一くだり二くだりよむ詞書も、今の世のおのが里の事を、見聞きたらむやうに、近く親しくおぼえて、物のあはれも、今一きはまさるわざぞかし」と言つてゐるのは、即ち解釋學を定義的に說明する者が、「解釋は解釋者の天分と、解釋者と被解釋者との生命の親近とに依存することが大である。この解釋を容易ならしめるための解釋の方法・原則を研究する學を解釋學といふ」(『大百科事典』鬼頭氏說)如く說く言葉と比較して甚だ興味がある。宣長は時間的に空間的に物遠いものを、今のことにし、身邊近いものとして見る、上にいはゆる「生命の親近」について實例を舉げて教へてゐるのである。

更に宣長の說を受けて、解釋學的に見て殊に優れた成績を示した一人が萩原廣道である。その著『源氏物語評釋』の首卷は、總論として上下に分ち、「源氏物語の題號の事」から、「をり〱のけしきをかける所の事」まで、すべて十七項を立てて說いてゐるが、それらは解釋學上何れも必要な研究であり、そのうち、「時世のありさまの事」の條に「この物語を讀まんには、まづその時世のありさまを、よく〱思ひわきまへ置きて讀むべし。然らざれば事のさまいた

く違ふ事ありて、後世の心にては、思ひ惑はさるゝ事のみ多くして、うまく意得ることかたかるべし」と起筆して、當時の官位・制度から家居や宮仕の事、夫婦男女の關係、さては一般の趣味好尙・學問・教養・風習などまで、すべてその世のふりを考ふべきことを說いてゐる。既に眞淵の萬葉に對する研究態度もさうであつたので、これは格段に新しい試みではないが、解釋學上の重要な條件がこゝにまた見事に實施されてゐることは注意に價するのである。その他に「此物語稱譽の事」は批評論で、「作者の用意の事」は卽ち作者の意圖を探つたもの、「物語の心ばへ并物のあはれを知るといふ事」や「一部の大事といふ事」などは、本質論に關した考察であると見られる。また「此物語に種々の法則ある事」の一條は、物語としての組織論で、いはゆる內在批評を試みたものと思はれる。固よりこの總論に言ふことが、悉く廣道の獨創ではなく、宣長その他、從來の學者の諸說を集成した點が多いが、上記の如く文に法則あることを考へ、修辭的に評釋したのは他に類例を見ず、これらの點から本書は特に解釋學上獨得の手法を示したものとされる。尙、廣道が大阪風俗を記した『あしの葉わけのまき』には「人情のおもふきを推し究めざれば何の學びもすべて空談なるべき論ひ」(藤井先生著『江戸文學研究』所引)を附錄としてゐる由で、今その委しい內容を知ることは出來ないが、この言葉のみでも解釋學上ゆかしいものがある。

要するに、我が近世の註釋事業は、動もすれば古文獻の單なる辭句の註釋に止つてゐたかの如くに見られがちであるが、以上の如き諸學者の註釋は、いはゆる訓詁を以て能事了れりとしたものではなく、すでに獨自的に、今日唱道される解釋學の域にも入つてゐるものと自分は思ふ。固より新しい解釋學說にも鑑みて、更に我が國文學にも獨得な解釋學を發達せしめねばならないのであるが、自分は先づ以上の如き國學者が、古典類に試みた方法を以て、或は古

典に對したその心組を以て、近世文學にも臨むことが最も手つとり早い方法であるのみならず、不消化な生硬な飜譯的解釋學說を以て臨むよりも、この方が却て妥當な解釋に到達する所以であると思ふのである。例へば、とかく難解であると定評されてゐる西鶴の如きも、宣長が古事記に對したやうな研究態度を以てこれに臨んだならば、その難解も必ずしも難解でなくなるであらうと考へる。これは自分が常に同好の士と語つてゐる持論である。

しかし、かう言つたのみでは甚だ漠としてゐるので、試みに、宣長その他、上に引用した眞淵・廣道等が說いてゐるところを箇條書きにして見ると、次のやうなことになるかと思ふ。

1　先づ本文を忠實に讀め。

2　一字一語をもおろそかにするな。異本との考勘をも努めよ。

3　最初の通讀でわからぬ點があつても、强ひて解をつけようとするな。

4　疑問は疑問として心に存しておけ。たゞ解決の機緣となるものを逸するな。

5　とにかく一章を繰返して讀め。

6　進んで他章をも讀め。漸次に全篇、全卷に及べ。

7　更に初めの一章に返つて讀め。

8　初めの難解の點を改めて考へよ。

9　語原をも討ねよ。

10　同時代の類書を讀め。

11　その書に對する在來の評判をも知れ。
12　類書に限らず、その本文の內容事項と關係ある各種の文獻に當つて見よ。
13　例へば、法令をも繰れ。官制をも調べよ。
14　當時の一般社會の風習・慣例などと對照せよ。
15　古來の傳說・口碑をも資とせよ。
16　作者の意圖・制作の事情を探れ。
17　全篇の構想・全卷の組織を考察せよ。
18　題號（書名）の意義を吟味せよ。
19　作者の人物・境遇を知れ。
20　その時代の精神を考へよ。
21　後世の心で讀まうとするな。特に「からごころ」を排せよ。
22　全卷に流れてゐる精神・主情を酌め。

勿論かく二十二箇條としたのは確定的なものではない。又各條は必ずしも獨立するものではなく、互に相依つて存し、或條は他の條の註釋的になつてゐる。各條の順序もいさゝか私見を加へて假に番號は打つたが、强ひて整へようとしたのではない。殊に今日の解釋學說を加味して配列したのでは尙更ないのである。箇條の數は殊更に細かくしたやうであり・從つてその內容をも、自分の考で附加したやうに見られるかも知れないが、眞淵始め以上三學者の學說

とその註釋書の實成績とを仔細に檢討すれば、事實はこれ以上の精しい箇條・內容となるであらうと自分は思ふ。

ともあれ以上は近世古典學者が古典の解釋に當つて取つた手法であり手續であり用意であり態度である。この一々の條項に近世文學解釋上の色を附け、肉をつけ、具體的に參考資料をあげ、實習的に解釋の例を示すことが、本講座に於ける自分としての使命であり、それが拙稿の本論に於ける任務であると考へる。しかしながら、その本論に入るに先立つて、今少しく今日のいはゆる解釋學に對する自分の理會——片鱗的理會に過ぎないものであるが、それを一言して、上の我が國近世學者の解釋學說と對照して考へ、なほその足らざる點を、彼此補註して見ることは強ちに徒爾でないと思ふ。

昭和五年十月刊行の土田杏村氏編『國文學研究』に、ディルタイの『解釋學の成立』が栗林茂氏によつて譯出された。解釋學といふ名稱は可なりに自分の興味を惹いたので、當時相當に努力して讀んだ。「我々の行動は他人の理解を何時も假定する。人間の幸福の大部分は他人の精神狀態の追感から生ずる」など言ふ語に先づ打たれた。その「人間の幸福」とは、舊式な言ひ方によると、つまり「讀書の樂み」の一つに歸することであるが、うまい言ひ方をしたものと思つたのである。惜しいかな、その譯は途中までであつた(その後、完譯となつたか否か、自分は知らない)。然るに昭和七年九月に、同論文は岩波書店の哲學叢書の一篇として池島重信氏によつて全譯されて出た。自分は更めて通讀した。既に耳にしてゐた語で、そして一寸理會しにくいと思つてゐた例の「解釋學的操作の究極目標は、著者を彼が自ら理解した以上に理解するといふことである」と言ふ語を、最後に近い一節で發見した。「著者を著者自らが理解してゐる以上に理解する」とは、次の如き諸事項を前提として考へる時に尤もだと思はれる。曰く、人間の言語が第一不完全

である。西田幾多郎博士は「誠といふものは言語に表し得べきものでない。言語にあらはし得べきものは凡て淺薄である、虚僞である」(藤岡作太郎著『國文學史講話』序)と言つてゐられるが、これは心理學・言語學から見ても勿論のことである。曰く、人は誰でも自分の全貌を自ら見きはめることは出來ない。曰く、何れの時代でも何れの場處でも、それ〲の特色は、後から、他所から、眺める方が明かになる。曰く、部分は全體を知らなくてはよくわからない。等等。ともあれ、ディルタイのこの一語は、上に自分が掲げた二十二箇條のうち、殊に9條以下のかれこれの條の意義を根本的に註釋してゐるとも見られる。

尙、垣内松三敎授の『國語の力』は刊行當時に興味深く讀んだが、今はセンテンスメソッドの說と、それの心理的分析に關するヴントの比喩―「暗室で或畫に向つてゐる時、突然一方から光がさしこんだら、先づ初めに畫の全體の形が現はれて、次第に部分々々が明かに見えて來るやうに、先づ文の形が見えて來る」といふ話とが、頭に殘つてゐるのみである。そのセンテンスメソッドとはやゝ趣を異にしてゐるが、例の眞淵が說いてゐる萬葉の訓讀に慣れる方法(既出)を、これに比較すると興味がないではない。又、最近の同敎授著『實踐解釋學考』には、解釋學上の諸原理が盛り澤山に說かれてゐるが、これを或作品に實踐應用して見ることは決して自分などの能くすることではない。唯斷片的には同感共鳴し得る點があり、又、その暗示によつて思ひ當る所はある。例へば「どうすればわかるといふことを確保し得ることになるかといふことの研究を解釋學と呼ぶ云々」(五頁八行)とある。そして、その「わかる」とは卽ち、「理會」といふ作用であるとの事であるが、自分はこれについて、「わからない」といふこと、卽ち「わかる」の反對を考へて見ることの興味と必要とを感ずる。我々は如何なる場合に「わからない」といふか。(1)文字が讀めない。(2)語義が

解けない。(3)文字や語句はわかつたが、作者が何をねらつて書いたかがわからない。(4)どんな氣持で書いたものかわからない。(5)部分的にはわかるが全體の精神がつかめない。(6)全篇のどこが面白いのかわからない。(7)全體の主意も精神もわかつたが、それが見方によつて果してどれほどの價値があることかわからない。……などといふ疑問が起る。これらが「わからない」の内容で、これらを解決すれば「わかつた」の域に入つたわけであると思ふ。それで普通に「わからない」といふのは、(1)(2)の場合が多い。殊に我が國は、今日に於ては既に支那に於けるが如く文字に支配されてゐる國ではないが、それでも猶泰西諸國と比べると、文字（漢字及び假名）に即して、或は文字が原因となつて「わからない」ことが多いと思ふ。漢文で物を記錄した時代、萬葉假名で國語を記した時代は勿論、和漢混淆文の時代（現代も、純粹の國語で、假名ばかりで書かない以上は、廣義に言つて和漢混淆文の時代と謂はれないことはない）に入つても、その文獻の「わからない」といふのは、先づ字義が訓讀できないことである。平安朝以來發達した假名文の物語でも、その假名文字がしば〳〵本文研究の問題とされる。中世を經て近世に入り、多くの文獻が板本として出たが、その板本が今日の活字でのみ教育された者にはもはや容易には讀めない。この事は今日の飜刻本に誤りが多いのでもわかるし、その飜刻本のみで讀んでゐる者に、板本を讀ませて見ればすぐにわかる。とにかく近世の一般文獻にはまだ漢文が幅を利かせてゐるし、一種特別な候文が書翰文以外にも用ひられてゐる。文學書を繙く者にはそんなものは用はないとは言つてゐられない。それらの影響は直接間接に文學書にも及んでゐるのみならず、文學書にも、鎌倉室町期以來の和漢混淆文と形式上では擇ぶ所がないものが多い。假名の形態も今日のやうに定つてはゐない。それやこれやの事情から考へて、字の形態・意義がわからないといふことは、我が國文學では特に重大な問題である。殊に尾

上八郎博士が『假名と國文學』（大正十四年四月廿六日、ラヂオ講演）との關係について、古來兩者が同じやうな有様で變化してゐたことを說き、德川時代の西鶴・芭蕉等の文學に至つても、それらと、それらを記した文字殊に假名とは、大體から見て一致した趣があることを述べ、文學を見る人は文字を見、文字を見る人は文學を見るべきことを論じてゐられるのを思うても、文字を思想の形體に過ぎないなどゝ輕視するのは、それこそ西洋學說にのみとらはれた考と謂はねばならない。近世文學研究に志す者は、入門の便宜上今日の活字本で讀むにしても、根本的には板本に溯つて檢討する用意としても、字形・字義輕視の念を取去らねばならない。字形並びに字義・語義を輕視した爲に、とんでもない內容批評を試みてゐる例については、後に觸れる機會があるであらう。

さて(1)(2)に揭げた字義をわからせるといふことは、(3)以下に揭げた問題をわからせる爲めの基礎であること言ふまでもない。その問題とは要するに文字・語句に盛られた事實であり精神であり、作者の心持であり感情である。それらが作者と同じ程度に、或はディルタイによれば、作者より以上によくわかつた時に、解釋は極致に達したのだといふ。前に引用した宣長のいはゆる「今の世のおのが里の事を見聞きたらむやうに」感ずるのは、作者と同程度にわかつたといふ所であらう。こゝに、思ひ起すのは屋代弘賢の言葉である。「知るといふことに淺さ深さあり。虎に追はれし物語を聞きて、それはさぞおそろしかりつらめといひし人は、虎を知ることの淺きなり。目くるめきて息絕えし人は、虎を知ることの深きなり」とは、もろこしの程子の敎なり」（無窮會神習文庫、輪池叢書、弘賢自筆の無題の文—『歷史と國文學』—（八ノ二）森銑三氏の『屋代弘賢』所引）といふのである。この「知る」と言ふ意義は上來說く所の「わかる」と同義に見てよからう。たゞこの話には、或は少し誇張があるやうに思ふが、とにかく「さぞおそろしかりつらめ」と言つたのみで濟ま

してゐる人は、解釋學的に考へれば一通り字義のわかつた程度の人である。「目くるめきて息絶えし人」は、その經驗者卽ち物語る人、文章ならば著者と同程度以上に、「おそろしさ」の心持、恐怖の感情に打たれた人である。もし感情のみを巧みに濃厚に盛つた文章ならば、まさにこの程度に「知る」「わかる」の方が解釋の極致であるに相違ない。しかし、それとても先づ「虎」「とら」の字義・語義がわかつてゐてのことである。極端な場合、例へば全くわからない外國語では、いくらおそろしい物語でも固より何の感應もない筈である。更に、「知るといふことに淺さ深さあり」といふについて思ふことは、「理會」の種類と型とに關する垣內教授の紹介であるが、その十數種の「何々的理會」といふの一つにも、「例へば」がないやうである。これは、やはりその一々について、原理と同時にどんなに簡單な例でも示して戴くことが出來れば、それこそ自分などにも、今少し「わかる」の域に到達し得られると思ふ。

『解釋學的領域』(既出、山本英一氏の論)に於ては、「說話はそれを語る個人の、環境により國家により時代により制約されてゐる生活の一の契機であり、從つて說話の了解には、語る者の生活の全體が既に了解されてゐなければならない」といふ言葉が自分の注意を惹いた。この言葉の前半は、說話者の生活がその說話者の環境と國家と時代とに制約されてゐることを說いてゐる點に於て、前揭二十二條の10乃至21の諸條の裏書をしてゐるとも見るべく、又その後半は、說話の了解に既に說話者の全生活の了解が必要であると說いてゐる點に於て、次に引用する循環論と相俟つて、解釋學上の重要な事實に觸れてゐると見られる。卽ち「解釋が解釋さるべきものを豫め了解せなければならぬと云ふ循環論は……解釋學の缺陷を示すものでなく、却てその認識の根源性を示すもの」であるといふハイデッガーの說を、論者は紹介してゐられるのである。曾て外國旅行から歸來した友は、「耳慣れない外國語を聽きとるには、先づ何か話

し出されるかを豫め想像してかゝることが必要だ」と語つてゐた。日本人同志の會話にしても、餘りに話題が唐突ではまごつかざるを得ない。外國語での會話は尙更さうであらう。この「豫め了解」するといふ意味を、こんな風に受取つては淺薄であるかも知れないが、文章の解釋に限らず、すべて物を理會するためには、俗にいふ豫備知識・豫備觀念が必要である。しかしその豫めの了解は抑もどうして得られるか。又たとひ豫め了解されたとしても、その了解は譬へば色眼鏡のやうに、時に正しい色を見まちがひはせぬか、そのために却て眞の解釋をゆがませはせぬか。こんな疑問が起らないでもないが、とにかく、單語と全文、個人と社會、一作者の思想とその時代全般の精神、特殊型と類型、瞬間と永久、部分と全體、これらそれぞれの一方を理會するに、他方の理會を豫め必要とする時、いつでも循環論に逢着せざるを得ない。從來の註釋研究に於ては、全文よりも單語を、全體よりも部分を第一とする傾向があつたことは爭はれないが、今日の解釋學ではその反對に、部分を粗にして全體に通じ、單語の意味を次にして全文の精神を先づ得ようとする傾向が强いかと思ふ。併しこれは何れか一方に傾くべきでなく、兩者の間の循環は解釋學上の必然の事實、不可避的の現象として考ふべきであつて、部分の中に全體を見、全體の中に部分を見、單語を通して全文を研め、全文を通して單語を研めることに依つて、はじめて眞の解釋に到達することが出來るであらう。循環論は解釋學の缺陷ではなくて、却て認識の根源性を示すといふ意義は、こゝに存するのではないかと自分は思ふ。然らば、賀茂眞淵が、その本文を讀んでは、他の類書を讀み、然る後に更にその本文を讀むべき事を說いてゐるのは、また泰西學者の說に先んじて既に解釋學の理法を敎へてゐるものと見られよう。

なほ、この循環論については、石山脩平氏の論『解釋學と國語敎育』（既出）が大いに自分の參考となつた。殊にその

「理會及び解釋の可能根據と妥當性」の一節は、前段に記した「豫めの了解」に關する自分の疑問をいみじくも解決してくれたやうに思ふ。氏はそこに含蓄ある泰西學者の言葉を引用してゐられる。「すべてのものの中にすべてのものの分前が存在する。」「人は何等かの姿に於て一切である。」「すべてはすべての中に」などいふのである。これらに流石に解釋學上の格言として服膺すべき價値の存することを思はしめる。一體に石山氏の解釋學書は、以上管見に及んだ諸家の說のうち、自分をして、最もよく要領を得たものといふ感じを抱かしめた。例へば、解釋學の定義からして、「文獻の理會を特に解釋といひ、それを方法的に行ふ仕事を解釋學といふ」とある。更にディルタイによつて、「文獻的に固定せる生活表現の技術的理會を吾々は解釋と名づける」ことを紹介し、進んで、その「技術的理會とは、解釋が單なる獨斷や偶然の思ひ付や乃至は天才的・神秘的なる直覺によるものではなくて、一定の法則に立脚し一定の方法を辿つて行はるべき術であることを示すものであることを說いてゐられる。たゞ、その「一定の法則」とは如何、その「一定の方法」とは如何。もし、その一定の法則や方法といふものが、公式の樣に考定されてゐるならば、どんなにか便利であらうと考へられる。

その**一定の方法**とは、やはり例のセンテンスメソッドの如きものであるといふ。自分の理會が誤りでないとすれば、例へば、一篇の文については、先づその全體の概觀的把握から、その部分の吟味に入り、その部分々々の確實な理會から更に全文の綜合的解釋に達しようとするものである。思ふに、古來いはゆる「讀書百遍、義おのづから通ず」る事實は、卽ちこのセンテンスメソッドを端的に營んでゐるものである。そして、またこの方法は、前に掲げた二十二箇條を出でるものではないのである。或は一作者の精神的構造の理會に關する一定の方法といふのは、その人の個々の

生活斷片や言動事實を蒐集し、これらを一々吟味して歸納的にその人の全精神構造を探り、或は豫め、或想定を立てて、その個々の生活斷片・言動事實を結合し、かくて出來あがつたその人の精神構造の型を或觀念的類型に照らし合せて見て、その一作者の特異性を浮き出させるといふ如き試みを意味するといふ。これも、生前か或は歿後直ちに傳記が殊更に書かれてゐない人々の事を後世から解釋しようとするには、當然踐まねばならぬ手續であつて、また我が今日の學界に於ける事實の上に見ても、方法論的に意識してなされたか否か、又、それら手續の履行が完全か否かは別として、ともかくも以上のやうな手段によつて、幾人かの作家たちが解釋され、評論されてゐるのではないかと思ふ。その實例については、後節に言及する考である。

次に一定の法則とは、總べて、個別的なものに對して全體的なもの、特殊的なものに對して普遍的なもの、斷片的なものに對して統合的なもの、一時的なものに對して永久的なもの、主觀的なものに對して客觀的なもの、偶然的なものに對して必然的なもの、略式なものに對して正式なもの、末梢的なものに對して中樞的なものをいふのである。その中樞的・必然的・客觀的・永久的・統合的・普遍的・全體的なものを法則とし、前提とし、更に俗に言へば一種の道具とし、鍵として、或時により處により人によつて制約された作品の解釋を試みようとするのである。これをその時即ち作者の時代に即して言ふならば、時代精神・指導的精神・社會的思潮・一般の通念・當代の趣味・嗜好・一世の風尚などいふ如きものがそれ〴〵一の法則となり得る。處についても同樣であつて、即ち以上の如きものを特に空間的に限つて考へ、作者の身邊・環境・社會相、その生活する雰圍氣を明かにし、作者の「鄕に入つて鄕に從ふ」底の觀察を下して捕へ來つたものを法則とするものである。また作者その人については、その平生の主義や主張や、物の考へ方や感じ

方やに關するその人獨得のものと考へられたものを探求して、それを一作品の解釋學的法則に用ひるのである。更に一作品の一部分を解釋する法則は、その作全體の本領とし本質とし主情とし、特色とする精神などであらねばならぬ。

さて以上いはゆる法則の說明として煩しいまでに用ひ來つた名辭は、實は歷史或は文獻學、殊に國文學史或は國文學評論に於て、從來用ひられるものであること言ふまでもない。故に今これらの名辭に對して、近世文學の解釋上、その個々について具體的に內容を賦與するに當つても、先づ一般の近世史乃至近世國文學史に資を仰がなくてはならぬのは當然の事である。次には法制經濟史、道德敎育史、美術殊に繪畫史、世相志、風俗史等にも助を借りなければならない。

二　近世文學史と近世解釋學

普通に近世文學史の分類する所に從へば、近世の文學作品は、假名草子・浮世草子・洒落本・滑稽本・讀本・草雙紙・人情本・淨瑠璃・脚本・歌謠・狂歌及び狂文・俳諧及び雜俳といふやうになる。これらに何か共通してゐる特質があるか。即ち近世文學の、他の時代の文學に異なる特色、いはゆる解釋學上取つて以て法則とすべきものは何々であるかと考へて見るに、實にこれは大きな問題である。內容や形態上の種別が異なる上に、その產出された時代が、同じく近世期にあつても前後三百年近くの長きに亙つてゐるので、これらに通じてゐる特質といふものは簡單には言はれない。例へば近世後期の一般文化（文學に限らず）について、「江戶趣味」といふことがよく言はれるが、その本質・正體は何であるかと尋ねても　それを簡明に說いてくれる人がない。例へば洒落・滑稽・機智・穿ち・[illegible]・凄み・俠氣・通・い

き・いさみ・いなせ・きほひ・きやん・やつこ等の語彙が持つ意味と語感とから考へられても、それらはまた人々が勝手に考へてゐるものが多いと言はれてゐる。それに對して「上方趣味」も同樣である。それ〳〵何か特色はあるに相違ないが、何れ趣味といふやうなものは、例の「尋ねられなければわかつてゐるが、尋ねられるとわからなくなる」ものである。趣味に限らず、その外近世文學の近世文學たる所以のものを取り出して說くことは、一朝一夕には行かない。

しかし、この問題を手つとり早く解決するには、やはり先づ諸學者のこれまで物された近世文學史の類、江戸文學研究の諸著作を見るべきである。例へば、『國語と國文學』誌の『國語國文學本質研究』（昭和二年四月、芳賀博士追悼號）の內には、上に列記した近世文學の各種に亙つて、諸家がその本質論を試みてゐられる。久松潜一氏の『日本文學概說』（岩波講座『日本文學』の內）には、廣く日本文學の精神・形態・素材を說いてゐられる中に、近世文學のそれらにも言及してある。また藤村作博士編『日本文學聯講』第三期「近世」（上下）篇なども、特に解釋學上の法則を求める心組で讀むと得る所が多い。この他、何でもその心組で見れば、求めるものは結局多少に拘らず與へられるものである。今、思ひつくまゝに次第を構はず數へて見るならば、卽ち藤井乙男先生著の『江戸文學研究』や『江戸文學叢說』、藤村作博士著の『江戸文學と上方文學』、山口剛氏著の『江戸文學研究』、黑木勘藏氏著の『近世演劇考說』、石田元季氏著の『江戸時代文學考說』、笹川種郎博士著の『近世文藝志』、高須芳次郎氏著の『爛熟期頹廢期の江戸文學』、麻生磯次氏著の『近世生活と國文學』、三田村鳶魚翁の江戸研究の諸著述といつたやうなものがあり、なほ、この外にもいろ〳〵あらう。普通の國文學史で近世篇を修了した後に、更に確かに近世文學の概念を得ようとするには、これらに目を通すべきである。又、江戸風俗や江戸趣味に關しては『日本風俗史講座』（雄山閣）に諸家最近の說が發表されてゐる。

今、試みに、これらの文獻の教へる所を參考として、近世文學、例へば小說類に通ずる特質を言ふならば、大體に於て、個性的でなくて類型的であること、深刻でなくて輕快であること、沈思的でなくて滑稽諧謔的であること、享樂的の裡に教訓的の所があること、情念よりも道義を主としてゐること等が數へられる。但しかうは言つても、時代の前後により、作品の種類によつて、またそれぞれの特色の存することは固よりである。一般に、幕初から寶曆に至る前期のものは、粗野で奔放でおほまかである代りには、自由で生氣に滿ち獨創的なところが多く、これに比して寶曆以後幕末に至る所謂後期のものは、技巧的で軟弱纖細な所が加つて來り、創意が失はれて前人の型を學ぶといつた風が著しいと謂はれる（江戶文學叢說所收「江戶時代の小說概觀」）。

更に**假名草子**に於ては、その思想的背景が或は佛教であり、或は儒教であり、或は幕初以來說かれた心學であつたが、その主たるものは儒佛二教であつた。或は老儒佛または神儒佛の所謂三教一致の理を說くものもあつた。心學の思想は藤井先生の『江戶文學研究』（一五頁）にも言及してある通り、決して正德享保の頃に創唱されたものでなく、幕初からこれありしとすべく、西鶴の中の教訓的分子も、實はこの心學の思想であると認められる。そはともあれ、假名草子は文學とは言ふものの、その創作の目的は、要するに啓蒙にあり教訓にあり、更に娛樂的お話にあつたのである。而して、以上いふ所の思想的背景の色彩は、作その物によつて異なり、作者その人によつて相違してゐるものがあつても、その訓蒙的・お伽話的な創作態度は、およそ假名草子と稱するものに共通してゐたので、この事實は、解釋學上いはゆる豫め承知してゐなければならぬ一つの法則である。例へば『伽婢子』の「おとぎ」といふ語は、この書を模倣した後の類書にも多く冠らせられてをり、それらの創作態度を示してゐる點に於て見遁してはならぬ語である。

かくて同書の如きは、支那の怪談を飜案して日本化したもので、大體娯樂的であり、一見しては上にいふ如き教訓的色彩が濃厚ではないやうであるが、やはり作者淺井了意はその自序に「夫聖人は常を說いて道を教へ、德を施して身を整へ、理を明かにして心を修む、天下國家其風に移り、其俗を易ふる事を宗とし、總て怪力亂神を語らずと雖も、若し止むことを得ざるときは、亦述べ著して則となせり」と起筆し、「學智ある人の目を喜ばしめ、耳をすゝぐ爲にせず、只兒女の聞を驚かし、自ら心を改め、正道に赴く一つの補とせんと也、其目を貴びて耳を信ぜざるは、古人のいやしむ所也。陰陽五行天地の造化は廣大にして測りがたく、幽遠にして知りがたし、時而り見ざるを以て、今聞く所を疑ふことなかれと云爾」と結んでゐる。即ち何でも教訓として聽かせようとする態度を語るもので、殊に怪力亂神をも教訓とする如き點は、江戸末期の人情本が誨淫的に流れながら、貞操を教へることを標榜してゐるのと相比すべく、かく何かにつけて、教訓といふ意識が加つてゐることが近世文學を通じての一特色であると謂はれると思ふ。尚、島津久基氏に從へば、假名草子は、室町期のお伽草子、舞の草子と共に、「その世界が單純で、幼稚で、蕪雜で、平俗で、魯鈍で、大げさで、馬鹿げきつてゐる。同時に、これら稚蒙なもののみに惠まれた、貴い或物、雜然・混沌たるものの持つ面白味、くだらない、つまらないといふ感じに共存する一種の快さ、無意味の中に意味を讀まうとする不思議な努力の歡び、さうしたものは、この世界にひたることによつて味ふことが許される」のであり、その「無自覺・單調な能力の奥に、無意識な自己改造のあがきを潛め、新奇を求めるあどけない心を憩はせ、平凡な沈滯の裡に、變つた方向への流動・展開の兆を含んでゐる」のである(前出「國語國文學本質研究」所收「御伽・假名・舞の草子」)。更に穎原退藏氏に從へば「當時の不遇な學者たちが、假名草子の發生に深い交渉を持つた事は明かで」あつて、「彼等は自己の抱

負を支配階級の立場に於てあらはす事が出來ないので、寧ろ自ら民衆の間に伍してこれが開發誘導に當らうとしたのである。……かうして一面自分等の世に用ひられない不滿の心情を遣り、一面民衆の間にあつて彼等の生活內容を豐かにしようとした。」（岩波講座『假名草子』）といふ。假名草子の全部がさうした結果產出されたとは氏も斷じてゐられるわけではないが、今兩氏の見方を比較して考へると面白いものがあると思ふ。しかし、斯くの如く、國文學史的評論を紹介するのは、實は解釋學の本領ではない。自分は解釋學上の法則を求めようとして、思はずこゝに立入りすぎたかと思ふ。

元來解釋學の目標といはうか、狙ひどころといはうか。或作品に當つてそれが求めるところは、一つはその作品が「何の爲に書かれたか」といふ點にある。上に自分が述べて來たことは、いはゆる法則たるべきものを示してゐると同時に、また、この解釋學上の一目標をも示してゐるものである。次には「何が書かれてゐるか」これが又一つの目標である。更に「どんな氣分で書かれてゐるか」といふのが一目標とされる。つまり「何のために」、「何を」、「どんな氣分で」。この三つが常に解釋學の標語とされてゐる。そこで再び假名草子について、殘る二つの問題をあへてするならば、やはり文學史が一通りは答へてくれるのである。例へば前出穎原氏の『假名草子』の著者には、（一）に「啓蒙的なもの」として『信長記』や『太閤記』の如き歷史的事件を扱つたもの、『竹齋』や『東海道名所記』等の如き地理書的のもの、『そゞろ物語』や『あづき物語』乃至『野郎蟲』『剃野老』の如き、遊里・芝居の案內記や評判記の類、或は『尤草紙』や『犬徒草』の如き古典の俗解を內容としたもの等が擧げられてある。（二）に、「敎化的のもの」として、『可笑記』の如く、主として儒敎の精神を說いたもの、『二人比丘尼』の如く佛敎的臭味の濃厚なもの・『浮世物語』の如く處世の道を說いたもの、

或は特殊の德目に關する例話集や教訓書・隨筆的のもの等が數へられてゐる。（三）には「娛樂的のもの」として、『昨日は今日の物語』『戲言養氣集』を始として、多くの笑話類、『伽婢子』の如き怪談小說、『恨之介』の如く、純粹に小說として創作されたもの等があげられてある。つまり、「假名草子に何が書かれてゐるか」と言へば、以上のやうに廣汎に亙つて取材されてゐると答へるより外仕方がないのである。最後に「如何なる氣分によつて書かれてゐるか」といふに、上來說く如く、その本質や發生的事情が然らしめたやうに、啓蒙的・教訓的で、文藝的芳潤さに缺けてゐるので、氣分卽ち何等かの調子・律動といふほどのものは認めがたいものが多いのである。或は歷史的に地理的に、或は案內記的に評判記的に、或は說明的に說法的に淡々として筆を進めてゐる。佛教趣味を基調とした戀愛小說『恨之介』の如きは多少の氣分はあるにしても、大體擬古的で因襲的な型にはまつたものである。或は、教へよう、導かうとする、稚蒙なものに臨む一般學者の氣分が現はれてゐると言へば言はれるであらう。又、用語そのものに卽して考へるならば、俗語・世話に碎けて、俳諧がかつた、滑稽的な調子の存することは、獨り笑話の類に限られたことでないと謂はれよう。しかし、大體に於て、假名草子の氣分には張りも弛みも少ないのである。言ひかへれば、求むべきほどの氣分がなくて、混沌たるところが、特色ならぬ特色であらう。

以上假名草子のことに少し言葉を費し過ぎたと思ふが、實は、解釋學と國文學史との交涉、といふよりは、國文學史を解釋學に利用するについての愚見を述べるに當つて、先づ假名草子を一つの例に取つたのである。從來の國文學史にもいろ〳〵特色があらうが、たとひ書史的解題的であつても、記載的梗概錄的であつても、それらを解釋學に利用しようとならば、必ず利用の道はあらうと思ふ。しかしながら、既成の國文學史（國文學評論を含む）は、どこまで

も解釋學の助として利用すべきであつて、その所說に執着してとらはれてしまつてはならないこと勿論である。一應は國文學史の案内によつて實際の作品を採つて繙くのではあるが、その繙くときの心持には、とらはれた何物もあつてはならない。そこには解釋學的に落ちついた整へられた靜かな心が保たれてゐなければならない。さうした心で讀まれた作品からは、最初に案内された國文學史の言ふところとは、異なつた、時には全く正反對なやうな解釋が生まれて來るかも知れない。それと一致した解釋が得られるのは固より喜びであるが、相違した解釋が出來るのも亦結構なことで、それこそ卽ちその讀者の創見と謂ふべきものである。固よりかくの如きは近世解釋學に於てのみ謂はれることではないが、序でながら一言したのである。

次に浮世草子以下の小說類、或は淨瑠璃・脚本類、俳諧・狂歌類についても、今日はすでにそれ〲專門的に文學史的研究が出來てゐるので、こゝには、もはや假名草子について試みた程度に詳說する必要はなからうと思ふ。乃ち委しいことはそれ〲近世文學史類に讓り、こゝにはたゞ順序上、ほんの概通的に、一二種の文學について、その解釋に直接に觸れて來ることがらをば概言し、そして後に實際の作品を讀む、卽ち理會し解釋する上に留意すべき具體的事項について、愚見の及ぶ限りを記すことにしよう。

浮世草子は假名草子から發展したと說かれるが、もし「何が書かれてゐるか」といふ題材だけの問題になると、假名草子との境界に判然としないところがある。唯その「何のために」といふことになると、決して啓蒙や教訓を主としたものではないのである。その創始者であり代表作家である西鶴のものにも、固より教訓的の分別くさい口吻は到る處に洩らされてゐるが、その眼目たるや人生の眞を描くにあつたことは事實の上に證されてゐる。しかし、これを寫實

主義などと主義よばはりをするのは、漢意(からごゝろ)ならぬ西洋かぶれの見方であると自分は思ふ。西鶴は主義などを奉じて書いたものではない。唯遠慮なしに人間の色と欲と義理とについてほんたうの事を描きたかつたのであらう。「西鶴の書いた事には一つもうそはない」といふ積りで讀め――とは眞山青果氏の言であるが、それは必ずしも過言ではない。たゞ西鶴はもと俳諧師である。故にその行文措辭に俳諧がある、滑稽がある、轉業(テンゴフ)がある。しかし、その爲に上にいふ眞實性が失はれるわけのものではない。彼の文章辭樣、特にその破格放膽、奇矯難解な點も、當時の、即ち宗鑑あたりから承けついで勃興し來つてゐる談林俳諧の修辭用語を背景として見たならば、そんなに驚くに足らないものである。時に思ひきつた俗語を驅使して、自由に露骨に遊女や若衆などの描寫を試みてゐるが、それも既に現はれてゐる遊女・野郎の評判記類を見た目うつしからは、別段に奇とするに足らないのである。これについては藤井乙男先生の『西鶴の好色本と遊女評判記』(江戸文學叢説所收)など參照するがよい。東西文學比較研究といふことも意味があるが、眞に我れを研めないうちに、いきなり西洋物などと比較論を試みるのは、解釋學上から見ても甚だ危險なことである。危險といふ意味は、例へば西鶴ならば、眞の西鶴といふものがその爲に誤解されるからである。西鶴の作は普通に、好色物・町人物・武家物その他奇事異聞集といふ如くに分類されるが、事實上さう判然と區別すべからざるものがあると思ふ。唯大體に於ては、解釋學上からもやはりこの分類に從つておくのが便宜であるので、今この分類によつて話を進めることにするが、さてその取材の方面によつて、流石に彼が迫眞の筆力にも差異があつたと見られる。けれども既にその態度が假名草子と異なり、又その觀察眼が非常に鋭かつた爲に、抹香くさい戀愛小說の代りに評判記を母胎とした好色本が生み出され、勢ひその筆は性慾描寫にまで及び、又、一般處世上の敎訓談の代りには特に致

富道の具體的例話が試みられて、金をめぐる喜劇悲劇の世相が如實に描き出されるに至り、更に、儒教かたぎの抽象的說法は、多少不自然で極端な話とは見られるが、特に武家の義理や敵討の物語となつて寫されて行つたのである。

然らばこれらに通ずる本質的のものは如何と言へば、既に作者の態度が、當時の人間生活の諸相實寫にあつたが故に、そこに表現されたものも、やはり當代の精神卽ち享樂的な現世謳歌の精神であり、當時の世相卽ち伊達な華美な社會であり、殊に經濟的に自由の利いた町人を滿足せしめるやうな趣味と嗜好、乃至愛慾生活であつた。更に武家に關しては主從・朋輩間の義理であり名譽であり、或は男色關係の意地であつた。そしてそれらは可なり歪められ硬化してもゐた。つまりこれらを抽象すれば、色と慾と義理とに歸するのであるが、さうした生活の内的一面を縫ふものは、無常感といふ一筋の白い絲であつた。「櫻も散るに歎き、月は限りありて入るさ山」とは、實にその色を描いた『一代男』の起筆である。「始末大明神の御託宣にまかせ金銀を溜むべし。是二親の外に命の親なり」といひながらも、すぐに「人間長くみれば朝をしらず、短くおもへば夕におどろく」と記してゐるのは、その物慾を描いた『永代藏』の開卷一頁の言葉である。かうした言葉と共に、また毎に接するのは好色物にさへ見られる「美女は命を斷つ斧……色道に溺れ若死にの人こそ愚かなれ」(一代女卷一)の如き教訓的文句である。その町人物が致富の要訣を主とした處世訓であり、武家物が當時の武士道的教訓を含んでゐることは固より當然であるが、享樂を主とした物にも斯くの如く一脈の教訓の精神が流れてゐることを見遁してはならぬ。殊に『本朝二十不孝』の如き穩かならぬ名目の作物も、一名を『新因果物語』と呼ばれ、而も三世因果のまどろかしい話ではなく、不孝の罰が現在覿面に當つて來ることを說いてゐる點に於て、一種の教訓物ともいひたい位である。西鶴の西鶴たる本領は、創始的に色と慾とを描いた點にあるといふ

に異論はないが、唯そのために西鶴を放縦なみだらなものと思ひ込み、不健全な好奇心の趣くまゝに、伏せ字をのみ氣にしながら讀むやうなことでは、西鶴の全貌はおろか、その片鱗をさへ正しく解釋することは出來まいと思ふ。世の初めて西鶴を讀む人の豫めの理會が、往々上の如くに誤られてゐはしまいかと思ふ杞憂から、敢てこの一言に及んだ次第である。

西鶴を代表作家とする浮世草子としては、その當時にも西村市郎右衛門その他の作家(作家不詳のも多し)の手になる各種のものが現はれ、西鶴歿後には西澤與志・都の錦などの諸作があり、更に江島其磧・安藤自笑等によつて、いはゆる「八文字屋本」が產出されて、元祿の小說壇を賑はしたのであるが、それらに對する解釋學上の概觀については、もはや特記するほどのこともない。要するに後のものは西鶴の模倣であつた。たゞ八文字屋本に於ては、西鶴の浮世草子の好色物を承けついだものが「三味線物」と呼ばれ、『傾城色三味線』『風流曲三味線』その他諸作にやゝ特色を見、その町人物は「氣質物」と轉じて、各種の人物氣質をわざと類型的に仕立てゝ描いてゐる。家庭的に取材した『浮世親仁形氣』『世間子息氣質』などや、又、職業的に取材した『手代氣質』とか『遊女容氣』とかいふものもある。この最後の例の如きは、好色物系統の「三味線物」と題材が混線してゐるわけである。この八文字屋本は、一般に一章の話が委しくなり、從つて長篇にならうとする傾向が見えるが、文章は平弱で、西鶴の着想・辭句をそのまゝ襲用した處などもある。すら〳〵として、讀みよくはなつてゐるが、西鶴のやうに張りきつた氣分がない。その行文の流動に俳諧的飛躍の無理がない。確か柳里恭であつたと思ふが、特に其磧の作なる八文字屋本をこの種近世文學の上乘なものと稱揚して居たが、それはその人の好みで仕方がない。きび〳〵として、讀後に强い印象を殘すやうな一種の調子は、その

内容・本質と共に、西鶴の方に勝れたものが存するといふのは、やはり動かされない定說であらう。

次に、假名草子や浮世草子と時代の背景を同じくして生れたものに**淨瑠璃文學**がある。淨瑠璃は固より人形芝居の詞章である故に、目に木偶の活劇を見、耳に語る人の肉聲と伴奏の三味線の音律とを聽くことによつて、始めて淨瑠璃といふものの全き理會が出來るのであるが、解釋學としては文獻の理會を主として考へらるべきである。故に敢て淨瑠璃文學と言つたわけであるが、文學としてその詞章を解するに當つても、忘れてならぬのは、語られるもの、聽くもの、見るものといふ、その獨得な成立的條件である。これにも金平本その他の古淨瑠璃と近松以後の淨瑠璃とでは内容にも語り風にも一概に論じ難いものがあり、近松以後のものにも時代物・世話物の別があるが、思想的に「何が語られてゐるか」と問へば、義理と人情とであると答へられる。殊に時代物では武士の義理を主とし人情を從とし、世話物では、義理に絡んで人情の美が發揮されてゐる。作者で言へば、近松は人情を、紀海音は義理を強調したとも言はれてゐる。例へば萬葉集に「ひたぶる心」、源氏物語に「物のあはれ」、中世文學に「幽玄」といふ如きものが特色として拾はれるやうに、淨瑠璃には儒教的道義にからまる人間愛慾の「悲」が鮮かな特色として現はれてゐる。それは浮世草子の場合に於けるが如く、現世謳歌の享樂的精神が募つてゐた士民の生活と、儒教主義によつて教化と政治とを常に實行しようとした幕府の方針とを併せ考へれば、まことに當然な時代の反映として首肯されるのである。詞章の形態又は調子より言へば、藤村博士の說の如く、劇的要素と抒情詩的性質とを兼ねた叙事詩と稱すべく、從つて又或部分は韻文、或部分は散文とも謂はれるので、謠曲の詞章などゝともに律語と說かれてもゐる。穗積以貫の「難波土産」（元文三年序）の發端に載せた說は、淨瑠璃一般の解釋學上からも熟讀する價値のあるもので、その內近松に關する說、

殊に近松自身の言葉は、含蓄の多い卓拔な藝術論として有名なものである。宮森麻太郎氏は、その著『近松とシェークスピヤ』に於て、例の「藝といふものは實と虚との皮膜の間にあるもの也云々」とある所謂「虚實皮膜」の論を以て、ゲーテの「藝術は自然と違へばこそ藝術と言ふのだ」といふ語と比較し、近松の言葉の方がゲーテの言より勝つてをるとし、「藝術形式の眞髓を穿つた古今東西の金言だ」とまで稱揚して居られる。近松はこの虚實皮膜論を主とし、淨瑠璃創作上の心理と用意とに關し、「文句」「字わり」「慰み」「憂」「義理」「あはれ」「書そらごと」などの用語によつて、讀者・聽者・觀客に教へてゐるところが多い。就中「淨るりは憂が肝要也……某が憂はみな義理を專らとす」と言つて、淨るりを「憂」即ち悲劇的なるものとし、「義理」と「憂」とが「藝」によつて「あはれ」を發揮する旨を說いてゐる。從來諸家のいはゆる「義理と人情との葛藤」はこの近松自身の言葉に由來すると見られるが、その「人情」といふは、特に「憂」であり、「あはれ」であらねばならぬ。

俳諧は小說・戲曲に比して特殊の形態を有し、內容から言つても、作者から言つても、最も庶民大衆の間に普及してゐて、これこそ眞に平民文學と稱することが出來るものである。近世文學は何れも等しく庶民文學で、堂上から引きおろされたものであるとは言ふものの、それにはなほ種々の制限・條件が伴つてゐたと見られる。「おれに附いて來い。何かと教へてやらう。面白い話も聽かせてやらう。」と作者が民衆を率ゐようとした所があるのは假名草子であつた。「人間の歡樂はこゝにあるのだ。世の中といふものは斯うしたものだ。」と酸いも甘いも嚙みわけた作者が、民衆の世界を民衆と共に語るといふ所があるのは浮世草子であつた。その同じ民衆の世界を人形の活動として見せ、音曲として聽かせ、會話として義理を說き人情を語つて、さん〴〵に民衆を泣かせ、喜ばせ、尤もだと思はせたのは淨瑠

璃であつた。以上何れも民衆と離れなかつた故に民衆文學と稱することが出來る。けれどもその作者は、固より或少數のものであつた。かくして作者として多くの民衆が參加してゐる文學は、古往今來未だ俳諧に及ぶものはない。俳諧こそは民衆自身が生んだ文學である。顧ふに平安朝の物語類に和歌が基調となつてゐると謂はれるやうに、近世文學の多くにはこの俳諧が基調となつてゐると謂はれる。そして俳諧の發生や本質、形態・趣味等の變遷については、俳諧史が說いてゐるが、自分は解釋學の立場から、こゝにはその「をかしみ」といふ俳諧の一特質を取つて、これが近世各種の文學の詞章の上に、またその內容・精神の上に、廣く、かつ久しく行きわたつてゐることを注意したい。「俳諧」といふ字義はもと「滑稽」であつて、「俳諧の連歌」が卽ち俳諧と解釋されたことは勿論であるが、俳諧趣味の「をかしみ」滑稽は、謂はゆる俳諧に止らず、すべて本格的・正式なものを、やつして、くづして、くだいて、また、もぢつて取りなす文學につきもので、やがてこれが近世文學に普遍的な特質となつてゐる。これは各種文學の作家が、もと俳諧師であつたり、少くとも俳諧の修養を經たものであつたりしたことが一つの原因であらう。例へば、野々口立圃・山岡元隣・中川喜雲等が、俳人でありながら假名草子の作者であり、浮世草子の西鶴のことは言はずもがな、歌舞伎脚本作家の富永平兵衞も、延寶中は西鶴や由平の仲間になつて談林の句を吐いてゐた（守隨憲治氏「江戸歌舞伎」）といふことであり、『棠（カラナシ）大門屋敷』などの作者錦文流、和文小說の作者建部綾足等も俳諧師であつた。近松も俳諧をやり、その淨瑠璃詞章にも俳諧的流動が指摘される。更に降つては、讀本の馬琴にも俳歷があり、洒落本の作家達は、俳諧の轉身たる川柳と握手してゐたのである。尤も國文學史を辿れば、「をかしみ」は日本文學の一特質たることを知るが、近世に至つては、その泰平無事な社會的情勢の裡に一層よくこの趣味は醸されて、「近世的」なるものの一色彩

となつたかと思はれる。この「をかしみ」滑稽にも、また色合の別があつて、たゞ放笑してすまされる「をかしみ」もあるが、放笑に涙の伴ふ「をかしみ」もある。それは、作者により時代により作柄によつて異なつてゐるが、今は唯おほまかに「をかしみ」といふに止めておく。たゞ近世文學の更に一つの特色と考へられてゐる「なぐさみ」の内容も、またこの「をかしみ」に多くのものを負うてゐる事を見のがしてはならない。なほ、俳諧には「さび」とか「閑寂」とか謂はれる趣味があつて、芭蕉が到達し得た正風俳諧の藝術味は、むしろさうしたものが大事な要素となつてゐるのである。これらも當時及びその後の俳諧以外の文學に浸潤して行つたと見られるが、その程度・範圍の深淺・廣狹から言へば、前述の「をかしみ」滑稽に及ぶべくもないと思ふ。

三　解釋の實習的手法と參考文獻

話がいつまでも抽象的に進んで行くのは、實は自分の本意ではない。以下には成るべく理論をぬきにして、實踐的な話に入り具體的に說いて行かうと思ふ。先づ再び上に言つた假名草子を例にとる。この解釋をどうしたらよいかといふ問題を考へることによつて、近世文學一般の解釋學的手法をも出來るだけ抽き出して見たいものである。

第一に顧みられるのは、水谷不倒氏著の『假名草子』(上下二册、大正八年九月刊)である。これは書史的研究であつて、繪入假名草子の板本標本集とも謂ふべく、表紙・本文・挿畫・刊記の工合などを實物大に模刻着色して原本の面影を示し、その一々に解題を附したものである。『昨日は今日の物語』以下『一休咄』まですべて三十餘種、それが刊行年代順に列べてあるので、殊にこの種古板本の概念を得るには便利である。但し、この中に『保元物語』『平治物語』『義

經記』等を入れられたのは、如何であらう。又、新潮社の『日本文學講座』の一・二卷の内にも、同氏の『假名草子研究』がある。その他に藤井乙男先生の『假名草子の作者』『鈴木正三』、『江戸初期の三教一致物語』『支那小說の飜譯』(以上、『江戸文學研究』所收)、『淺井了意』(江戸文學叢說)、石田元季氏の『如儡子』『鈴木正三』(江戸時代文學考說)、山口剛氏の『怪談集』の解題(『日本名著全集』所收)、潁原退藏氏の『假名草子』(前出、岩波講座)、『假名草子の三教一致的思想について』(『國語・國文』二卷十二號)、森銑三氏の『可笑記の著者如儡子は何人か』(『日本文學』二卷一號)、松本一郎氏の『假名草子の作者』(『展望』八年九月號)、北條秀雄氏の『淺井了意著書考』(『大谷學報』第十二卷第二號)、『淺井了意の生涯』(『國語・國文』第一卷第三號)等の諸論考がある。自分もこれらの悉くに目を通してゐるわけではないが、例へば假名草子作者としての如儡子・鈴木正三・淺井了意等について、以上の諸氏が、如何に彼等の生活斷片・個々の言動事實を蒐集・總合して、解釋學上いはゆる各作者の全精神構造を探り、如何に歷史的背景に照して各作者の特異性を見ようとせられたかは、これらの諸論考によつてわかるであらう(「一定の方法」を說いた節一九頁參照)。しかし、假名草子の本文について解釋學的研究を試みたものは、次にいふ潁原氏の選釋を外にしては未だ他にその例が見えないやうである。卽ち『國語・國文』誌上數回に亙り、『近世文學選釋』として『恨之介』(昭和六年十月、創刊號)、『尤草紙』(一卷二號)、『東海道名所記』(一卷三號)、『可笑記』(二卷六號)、『元の木阿彌物語』(二卷八號)、『たきつけ草・もえくひ・けしずみ』(二卷十一號)などが連載された。何れも假名草子として特色あるもので、潁原氏はこの各篇を一回讀みきりとして執筆され、それぞれについて、先づ文學史的に或は書史的に要領を得た紹介を試み、必要に應じてはその『梗概』を錄し、それから「本文」を掲げ、「語釋」を考へ、次に「通解」を記して「評」に及ぶ(尤も「通解」は『恨之介』以外には省

いてある）といふ順序を取つてゐられる。この順序手續は、今日の我が國文學の解釋學的方法としては最も普通なもので、形式上からは何等の新しい試みとは見られないが、この手續のもとに、先人の未だ手をつけなかつた假名草子を扱はれたそのことが、先づ近世解釋學上から考へて、内容上極めて有意義なことである。次には更に實習上から見て、例へば如何なる參考書によつてその「解釋」が研究されたか、又、時代的に社會的に如何なる着眼展望によつてその「評」が下されたかといふ如き點を探るならば、必ずやそこには近世文學の解釋に從ふ者の、方法的にも學ぶべきものが存するであらう。

奈良朝・平安朝の古典文學と異なつて、何にも註釋書がない作品を解釋しようとするには、どうしたらよいか。結局、問題はこゝに歸するのであるが、その答は、實は前章に述べた通り、既に古典學者が示してゐる。即ち、先づその作品と同時代の、或はその前後に現はれてゐる類書を見ることである。さうした類書は何によつて選むかとならば、文學史と年表的に出來た書目解題の類による外に仕方がない。

1　新群書類從　第七　書目（近世各種文學の書目や年表を集めたもの）
2　新修日本小說年表　朝倉無聲撰（小說の各種を分類して年表に組織したもの）
3　日本小說年表　（近代日本文學大系第廿五卷）
4　日本叢書目錄　濱野知三郎編（本書は、佐村八郎著の『増訂國書解題』にも添へてある）
5　國文學書目集覽　垣内松三・毛利昌共著
6　江戶時代小說・脚本浄瑠璃・隨筆飜刻物索引　尾崎久彌著

7 江戸時代初期 繪入本百種 月曜會編纂

8 江戸文學圖錄 京都帝國大學國文學會編

9 甘露堂文庫 稀觀本攻覽 尾崎久彌著

10 日本文學書目解題「上方・江戸時代」 潁原退藏著（岩波講座『日本文學』の內）

11 日本文學大辭典 藤村作編（三卷の內第二卷「て」の部まで既刊）

12 稀書複製會刊行 稀書解說 山田清作編（大正七年以來二箇年を一期として續刊され、目下第八期を刊行中である稀書についての解說）

13 近世文藝 名著標本集 石割松太郎解說（十二輯の內、第八輯まで既刊）

以上の內、7・9・10・12・13の外は、10に擧げた潁原氏の書目解說の凡例に示されたものに從つた。『新群書類從』の書目は、例へば野崎左文氏の『江戸狂歌書目』、阿誰軒の『俳諧書籍目錄』、大久保豐氏の『浮世草子目錄』、偐亭種彥の『好色本目錄』の如き、編者を異にした近世各種文學の書目や年表を集めたものである。故に本書目によつては如何に近世文學の賑かであるかが大觀される。『新修日本小說年表』は、範圍を小說を限つて時代は古代から近代に及び、その內容も組織的に整へられ、總索引もあつて非常に便利である。これを多少訂正增補し、別に、作者の小傳を加へたものが、3の『日本小說年表』である。『日本叢書目錄』は昭和二年の刊行で、それまでに公にされた各種の叢書の內容を一覽するに都合よいものであるが、自分はこれを繙くたびに、各書名から求められる總索引があつたら如何に重寶であらうかと思ふ。各叢書名の索引はあるが、今一歩進めて各作品が何の叢書に收められてゐるかが引かれるやうに

して貰ひたい。この希望をやゝ滿たしてくれるものが、6の尾崎氏の索引であるが、これは昭和二年までの飜刻本に限るのである。7・8・9・13の四種は、何れも同樣な企圖から生れたもので、近世各種文學(中には文學でない例も混じてゐる)の板本の一部を寫眞版にして示し、別にそれ〴〵の解說を添へたものである。各々特色はあるが、すべての點から『江戶文學圖錄』が最も纒つてゐる。板本類が日に失はれて行く今日、一部の書の全卷を稀書複製會本式にするか、水谷氏の『假名草子』式にするか、さうでなければ斯の如く圖錄・標本集的にして原本の面影を一般に知らせて貰ふことが必要である。12の『稀書解說』は、解說としては非常に委しく親切を極めたものであるが、その複製會本に限られてゐるので、やゝ一般向ではない。しかし特に近世文學を研めようとする者には、高價な原本の複製本と共に、この解說は感謝すべきものである。その書目解說として簡にして要を盡し、一々作品の收錄された全集・叢書の類を示し、またその作品に關する參考文獻まで揭げて、一般學徒に資する所多いのは穎原氏の『上方・江戶時代』書目である。但し「脚本」類は全く省いてある。尾崎氏の索引には解說はないが、「脚本」の部もあるので、それによつて例へば續帝國文庫の『脚本傑作集』、有朋堂文庫の『脚本集』や、高野・黑木兩氏校訂の『元祿歌舞伎傑作集』なども自由に檢索が出來る。因みに言ふが、江戶時代に板行された書籍目錄については、その主なるものが禿氏祐祥氏編の『書目集覽』に、原本のまゝを單式印刷にして收めてある。その解說によれば、旣に萬治年間に『新板書籍目錄』が刊行され、ついで

○寬文九年　新板書籍目錄一冊(十一行)

寬文十年　新板增補書籍目錄二冊(十一行)

延寶三年　新增書籍目錄三冊（九行）
天和元年　新撰書籍目錄大全三冊（十四行）
貞享二年　廣益書籍目錄三冊（十五行）
○元祿五年　廣益書籍目錄五冊　洛陽書林永田調兵衛・西村市郎右衛門・坂上勝兵衛・八尾市兵衛　重校訂
元祿九年　增益書籍目錄六冊　丸屋源兵衛（書名をイロハ別にし、各書の値段をも記す。正德五年版もあり）
○享保十四年　新撰書籍目錄四冊　皇都　作者文照軒柴稿　書坊永田調兵衛
○寶曆四年　新增書籍目錄三冊（作者・書坊、右に同じ。但し作者「文照軒」を「文昌軒」に作る）
○明和九年　大增書籍目錄三冊　作者博古堂南總　皇都書林武村新兵衛

などが、年を追うて新刊される書籍を拾つては、それ〴〵前書目を增補し內容分類を詳細にしつゝ逐次刊行されてゐる。右の內○印を附したものが、禿氏氏の『書目集覽』に收められたものである。これらは書目とは言ふものゝ、文照軒の言ふが如く「書林の幼童題號を知るの一助」として、書肆の店員、取引同志の間に公にされたもので、今日の書誌學的目的などを意識して作つたものでない故に、勿論分類その他に杜撰な點もあるが、またそれだけに當時の出版界の實際の狀況、出版物に對する讀書人の要求や評價などもありのまゝに示されてゐるとも見られるので、却て面白いものがある。大體が佛書を第一とし、儒書・神書・國史の類と次第して揭出し、文學・諸藝・娛樂の書を後まはしにし、その分類も勿論後に出たものほど細くなつてゐる。近世解釋學上から見ると、その文學以下の分類の目そのものに、後にいふが如くいろ〳〵意義があるやうに思ふ。といふのは、その分類された書目によつて、その當時の社會人の文

學・諸藝・作法等に關する教養・嗜好の傾向を察知することが出來るからである。

さて話は類書を讀むことに戻る。以上述べたやうな書目によつて類書を求める。類書の多いときは、書目の解題が批判的でない以上選擇に迷ふこともあるが、有名なものは文學史にも言及してあるので、とにかく文學史に相談するがよい。類書を外にしては何を讀むべきかといふに、その作品と最も關係が密接であると考へられる先進文藝を顧みることが必要である。これも今更言ふまでもないことであり、例へばその如何なるものが近世文學に最も密接に關係交渉があるかについても文學史が語つてゐる。今、假名草子については室町期のお伽草子や舞の本があげられるが、特に詞章そのものに卽していふ時は、いはゆる俗譯ものや、もぢりの材料とされた『源氏物語』や『枕草子』『伊勢物語』『古今集』も勿論あげねばならぬが、それよりも自分は特に『徒然草』と謠曲とをあげたいと思ふ。徒然草は枕草子と共に最も多く俗譯もの、もぢり文の材料になつてゐるが、自分が特にこゝに徒然草と謠曲とをあげたのは、假名草子に限らず、可なり一般的に各種の近世文學にわたつて、この二者の浸潤してゐる程度が、廣く深いと思ふ故である。石原正明などは『年々隨筆』の中に、「隨筆の中には、つれ〴〵草、いと幸ある書なり」と言つて、その世に持てはやされたさまを過分なことのやうに、やゝ非難めいた口吻で評して居るほどで、又當時からこれが註釋の多かつたことも有名である。それだけに徒然草は近世の文學に直接に間接に影響するところが多大であつた。從つて今日徒然草の本文によく熟してゐることが、近世文學解釋學上から言つてかなりの重要性を持つと思ふ。例へば、『可笑記』や『悔草』(正保四年、井上小左衛門)『爲愚痴物語』(寛文二年、曾我休自)のやうな、隨筆的なる執筆態度が、『徒然草』と似通つてゐるもの、『犬つれ〴〵』(承應二年)、『吉原失墜』(延寶二年)、『西鶴俗つれ〴〵』(元祿八年)、『新吉原常々草』(元祿二年)、

『吉原つれ〴〵草』（近世文藝叢書七に收む）、『新つれ〴〵草』『茶人つれ〴〵草』、宇治加賀掾の淨瑠璃『徒然草』（延寶九年―『近松全集』第一卷所收）、野郎評判記の『垣下徒然草』（寛文十一年）、滑稽文學全集に收めた『それ〳〵草』（享保四年、乙州）、『徒然睟が川』（天明三年、睟川子）、『つべこべ草』（天明六年、田宜仲宣）などの如く、外題或は内容の詞章までも徒然草をやつし、もぢつた各種の文學がある。この外に徒然草の一二の語句を踏まへて文章をあやなしてゐる箇處は、更にいろ〳〵の作品の中に見出されるであらうが、今、個々の例を擧げてゐる暇がない。かくて内容上・辭樣上、徒然草に精通してゐることが望ましいのである。

次には謠曲であるが、これを詞章とする能樂が、近世武士の式樂であつたことは言ふまでもなく、從いてその影響は庶民にも及び、學問・趣味の兩方面から見て、謠曲乃至能樂が生活に餘裕あるものの一つの教養資料となつてゐたことは、當時の文學から逆に推察し得る事實である。むしろ當時は謠曲を先進文藝などと考へずに、現在の修養學科の一つと考へてゐたと見られる。元祿に出版された『男重寶記』は、『女重寶記』と相並んで、當時の男女の教養に關する實情を窺ふに足るものである（この二書については後に再說する）が、「手ならひ仕やうの事」などと共に「謠うたひやうの事」に聲の藥の方」の如き一章を說いてゐる。正德に出た『諸人教訓』にも同樣の目次が見える。殊に小謠は、致富の道ばかりに沒頭して居たと思はれる町人の間にも行はれた（日本永代藏一ノ二）と見え、更に寺子屋教育のテキストとしてまで用ひられて、小謠を集めた本が挿畫など入れて幾種か出版されるに至つた（國文學誌報 昭和八年十月廿五日號、富田旦氏「小謠本と寺小屋」）ほどである。故に、謠曲を知らぬものに近世文學がわかるものかといふ事は固より當然である。例へば宗因や西鶴の俳諧に如何に謠曲の用語が驅使されてゐるか。三田村鳶魚翁等の『一代男』その他の輪

講錄に於て、特に山崎樂堂氏によつて如何にしば〲謠曲の文句の引用が指摘されてゐるか。近松の詞章が殊に謠曲に負ふ所多大であるのは周知の事である。溯つて假名草子には、例へば『竹齋物語』下卷に、「宇治賴政の謠の本を取出して」治療の法を說いてゐる。噺本の『私可多咄』卷一には、「江口」「大江山」「殺生石」「俊寛」「鵜飼」「卒塔婆小町」「隅田川」「兼平」「三井寺」「竹生島」等の謠曲から一文句づつ取合せて、滑稽を仕立てた一節がある。なほ俳諧には諸派論難の書中にも、『熊野』（延寶七年刊）や『俳諧賴政』の如きは、それ〲謠曲のもぢりであるといふ（頴原退藏氏著『俳諧史の研究』七〇―三頁）。要するに、謠曲が徒然草に比して一層廣く深く近世文學の諸方面に關係があることは、これら僅かにその一斑を示した例によつても明かである。そして解釋學上からは、これら徒然草にしても、謠曲にしても、一歩先にそれ〲の詞章に馴染んでゐることが必要である。乃ちその目で近世文學の作品を眺めると、或時は例のもぢりのをかしさを自然と覺え、或時はその作品の眞の獨創と然らざる部分とを見わけ得て、はじめて、その作者・作品の解釋と評價とを正當にすることが出來るのである。

以上類書及び先進文藝を閱讀すべきことを說いたが、或作品の解釋に當つて然かすることは、謂はゞ縱の眺めを主としたものである。即ち時代の前後殊に前を見通して、現在目前の作品の理會を助けようとしたものである。而もかくの如きは從來の文學史の研究法として違つた所がないと謂はれよう。これよりも更に解釋學的に必要なことは、**橫の眺め**である。その作品の制作された時代の社會的展望である。その作品の周圍に他の如何なる種類の文學があつたか。學問があつたか。美術があつたか。その時代の經濟生活は如何。法制は如何。これらを考へて見ることが、最も重要な仕事である。

近世文學の如何なる作品を捕へても、これをその制作の時代に即して横に眺めると、その側には必ず俳諧が視野に入つて來ることは、阿誰軒の『俳諧書籍目錄』や大野洒竹編の『俳諧年表』(『俳諧文庫』第二「芭蕉以前俳諧集」上所收)を一瞥しても明かである。前出元祿の『男重寶記』にも「連歌俳諧の仕やうの事」の一章を設け、「古流當流の差別、百韻の法の事、歌仙の法、四十四の法の事」などを說いてゐる。即ち俳諧も謠曲などと共に當時は一の修養科目であつたのである。俳諧趣味が近世各期に通じて最も廣汎に最も民衆的に各種の文學に浸潤してゐることについては、前章に一言した通りである。いはゆる掛詞・洒落・緣語の如き、語形の類似・語義の聯想上から「をかしみ」を持たせた辭樣は、殊に古俳諧から近世後期の狂歌川柳に通じて見られるが、さうした辭樣と俳諧用語即ち俳言、或は方言・俗語の類は、一般に近世文學の本文を忠實に講讀するに當つて、從來よりは更に重要視されねばならぬと思ふ。穎原氏の假名草子の選釋に引用された書の內、『俳諧類船集』(延寶四年、梅盛)、『鷹筑波』(寛永十五年、西武)、『唐人躍』(延寶五年)、『毛吹草』(正保二年、重頼)、『久留流』(慶安三年、西武)、『歌仙はいかい』(寫本「たきつけ」の附錄)等の俳書が見えるが、更に浮世草子・淨瑠璃文學の如き元祿文學、その脈を受けた江戸後期文學の解釋に、俳書に通し、俳言に精しいことが、如何に有力な助となるかは、もはや多く言ふ必要はなからうと思ふ。殊に俳諧作法書・歲時記の類は當時俳諧そのものの創作・興行に直接に必要な參考書として著されたものであるが、今日では他の俗語調の勝つた文學を讀むに當つても、これを座右に置くことが何よりの强味である。元來俳諧乃至俳句が、一句の短詩形の裡に含蓄のある語彙を用ひ、豐富な聯想の醱酵素を盛つたものであるので、その用語・修辭は他文學の詞章に比して非常に內容が充實してゐるのである。從つて作法書の類のみならず、句集の類にも出來るだけ目を通してゐることが、浮世草子などの解釋に

は殊に差當つて役に立つのである。又この事は、反對にも考へられて、俳諧の解釋に浮世草子その他の文學が常に裏打ちをする關係にあることも勿論である（新潮社版日本文學講座第十四卷拙稿『西鶴俳諧鑑賞』參照）。なほ俳書のうち、上に擧げた外に、野々口立圃の『はなひ草』（寛永十三年）、齋藤德元の『俳諧初學抄』（寛永十八年）、皆虚の『世話盡』（明暦二年）、松江重頼の『懷子』（萬治三年）や『乳母』、是誰の『俳諧初元結』（寛文元年）、梅盛の『便船集』（寛文八年）、貞木の『手松明』、中堀僖庵の『しをり萩』（元祿五年）、四時堂其諺の『滑稽雜談』（正德三年、國書刊行會第五期刊本）、鵜川麁文の『華實年浪草』（天明三年）、瀧澤馬琴の『俳諧歳時記』（享和三年）、これを靑藍の增補した『栞草』（嘉永四年、明治の活版本もあり）、並木五瓶の『俳諧通言』（文化四年自叙）などは、特に上に說いたやうな目的から見て參考となるべきものである。また、これらの近世語研究上の價値については、本講座の拙稿『近世の國語』を參照されたい（以上の俳書については、穎原氏の示教に負ふ所が多い）。更に、俳書の全般に亙る解說及び俳諧そのものの解釋に關しては、最近改造社版の『俳句講座』に於て、各專攻の學者が執筆されてゐる。又、俳書の本文としては、『俳諧叢書』『俳諧文庫』の類が幾通りも出てゐるが、最近では『俳書大系』（勝峯晋風編、大正十五年―）が、解題から人名・地名・全句の索引まで具へてあり便利である。俳文・連句の解釋の單行本としては、管見によれば荻原井泉水のもの、例へば『奧の細道新釋』、（春陽堂）、『奧の細道評論』（岩波書店）、『野ざらし紀行新釋』などの行き方に面白い所があり、又、幸田露伴氏の『冬の日抄』『春の日曠野抄』などに、いろいろ敎へられる所が多い。この兩者を强ひて比較すれば、井泉水氏は直覺的に大體論から入り、露伴氏は語句の解から入つて全體の情趣に味到されてゐるかに見える。尤も俳文と連句との差があるので、これを兩氏の解釋傾向とすることは出來まい。その井泉水氏の『奧の細道評論』に「俳句に於ては、解

釋といふ事が其儘一つの批評になる場合もある。一つの句に、或人は甲といふ解を下し、他の人は乙といふ解を下して、決しないやうな時に、必ずしも一つが是であり、他が非であるといふ譯ではない。夫は二人の俳句觀が相違する故に、其解釋が相違するからである。尤も一つの解釋が他の解釋より深いとか淺いとか云ふ事は云へる、それは其人の俳句的の境地が深いか淺いかを語るものである。たとへ、作者自身が出て來て、自分は斯ういふ氣持で作つたと云うた所で、其表現が其氣持を裏切つてゐるならば、作者本人の云ふ方が間違つてゐる。俳句はそこに表現されたものとして、鑑賞され批評されねばならない。そこに藝術の獨立性がある筈である。」（八―九頁）と序してゐるのは、俳句に限つたことではなく、藝術として見られる文學の各種に亙つて然りである。なほ、この井泉水氏の論には、また次の石山脩平氏の說が最も有力に裏書きしてゐるかと思ふ。即ち「對象的解釋を常道とし、作品の意味を作品自體の構造に卽して捉へる場合に、現實の作者の意識した意味とは別の意味が捉へられることもあり得べきである。プラトンが旣に指摘した如く、詩人は自ら詩の意味を知らず、讀者が却つてこれを知つてゐる場合が多い。而もその作品を忠實に讀み、一語一句をも等閑にせず、さきに擧げた解釋の階段を辿つて方法的に吟味した結果、そこに必然に浮んで來る意味を捉へて、それが現實の作者の意識しなかつた意味である場合には、その解釋は誤つてゐるのではなくて、却つて正しい解釋であり、何人が解釋してもそこに到達すべき客觀的なる、普遍妥當なる解釋である。ディルタイが、『解釋學の凱歌』（Triumph der Herme eutik）と叫んだのは、この事實を指したものと解せられる。」（『解釋學と國語教育』）といふのである。いはゆる「對象的解釋」とは「心理的解釋」に對するもので、作者の心理に立入らず、その作品を一種の有機體的に見る解釋のことである。さて、話が思はず解釋學の根本原理に立戻つたやうになつたが、實は俳

諸そのものの研究については、自分は一門外漢たるに過ぎない。殊に俳諧の解釋それ自體のことに言及するのはこの一節の目的でもないので、以上たゞ思ひついたまゝを記して、專門家の敎を乞ふに止める。

すべて縱と横との眺めを一度にすることは困難である。今は主として横の眺めを試みようとするのであるが、それにしても、自分としては固より近世前半期に限らねばならぬ。そこには又寛永時代と元祿時代との境界も立てられるが、今はそれをもおほまかに見ると、主なる文學としては、上述の如く假名草子・浮世草子・淨瑠璃・俳諧があつた。學問としては何があつたか。殊にこれらの解釋學上注意すべき學問は何々であつたか。先づ德川家康が奬勵したものは儒教であつたので、それが古來の佛教と共に、文學の方に反映してゐることは既述した通りである。或は神儒佛三教の思想を巧みに取入れたと見られる心學は特に注意せらるべきものであつたと思ふ。俳諧の芭蕉に漢學禪學の素養があり(『國文學踏査』第壹輯所收、岩田九郎氏の『芭蕉に及ぼせる漢文學の影響』參照)、淨瑠璃の近松に、たとひ孫引學問の謗はあつても佛典・漢籍・神書の學問があり、中古・近古の國文學への親炙の著しいものがあつたことは、その作品から何人も察知する所である。殊に近松の學識については、『近松語彙』の附錄や、その著者の一人たる樋口慶千代氏によつて特に精しい研究發表がある(早稻田文學、大正十五年十一月「近松研究號」參照)。浮世草子の西鶴の學識に至つては、その當時から問題にされ、梅蘭堂の『元祿太平記』(元祿十五年刊)に、散々にこきおろされてゐることは有名な話であるが、その說は必ずしも妥當でないにしても、西鶴には所謂學問としての學問が如何ほどあつたか。『日本永代藏』の開卷第一章に「人の人たるがゆゑに常の人にはあらず」とある句は、『老子』の「道可レ道、非二常道一。名可レ名、非二常名一」から來たのであると驚いてゐる人があつたが、この言ひまはしは、既に、謠曲の『草子洗小町』にも引かれ

てゐるので、その口調を眞似たと見る方が西鶴の解釋としては妥當である。また同じ章にある「銀德にて叶はざる事天が下に五つ有」の「五つ」を增壹阿含經の盡・滅・老・病・死とし、「今有二五事一最不レ可レ得」の句から來たとする說もあるが、それは御苦勞な話で（自分もさう敎へられて、一晩かゝつて增壹阿含經を片端から繰つたものだ）、成程、佛說から言つたものではあるが、實は例の「五輪」に過ぎないのであつた。西鶴はこれを「五つの借物」とよく言つてゐるが、やはりこれは『源平盛衰記』や『太平記』・謠曲などにも見える「五輪成身」說の俳諧化である。ともかく銀德に叶はぬ五つを阿含經に持つて行くのはまだよいとしても、これを儒敎の五倫五常の五に持つて行つて、滔々と西鶴論をやつてゐる人があるのは、全く見當ちがひであると思ふ。さて然らば西鶴には學問がなかつたかといふに、町人出身の俳人としての敎養は固より相當にあつたと思ふ。中古・近古の有名な國文學、當時に註解を施して刊行された各種の支那文學、遊仙窟・文選・唐詩選や、四書・唐宋八家や古文眞寶などは、どの程度にか讀んでゐたであらう。西鶴と和漢の古文學との交涉については、山口剛氏の『江戶文學研究』が最も克明を極めてゐる。しかし、源氏物語などにしても、同氏が一代男・二代男と比較研究してゐられるほどに、卽ちあれまでの交涉をつけるほどに、身を入れて細く讀んでゐたかどうかは疑はしいといふ見方に自分なども從ひたいと思ふ。また「孔子顏」「孔子臭い」「古文眞寶な」「古文聞き」などの語（これらは西鶴に限られた用語ではないが）を屢々用ひて、しかつめらしいといふ形容にやゝ嘲笑的な意味まで持たせてゐる所を見ると、この漢籍の方にもどれほど身を入れたかと疑ひたくなる。然るにも拘らず、西鶴を讀むのはむづかしいと謂はれてゐる。その何がむづかしいのであるかを考へる時、眞に西鶴の學問（もし學問と言つてよいならば）がわかると思ふ。彼の學問は必ずしも傳統的な國文學や漢文學ではなかつた。その生活した時

代と社會と個人とのありのまゝの知識が卽ち彼の學問であつたのである。故に浮世草子の創作家として、我が近世の小說界に新生面を開拓したといふ文學史的評論は、固より誤りではないが、さうした評論の對象たる彼の作品は、實にまた時代に媚びたものであるとも謂はれるのである。つまり、その具體的に描かれた時代のすべてが分らぬ故に西鶴はむづかしいのである。又、文章の俳諧的流動が難解であるといふが、それも當時の俳諧に熟してゐないためであらう。かくて古淨瑠璃・假名草子、或は芭蕉や近松に於ては、その作者の學問は必ずしも未だ讀者の學問ではなかつたが、西鶴を代表とする元祿の小說、その背景をなす所の、宗因に大成された談林俳諧に於ては、その作者の知識が大體讀者の知識であつた。文獻的にこれを具體的にいふと、文字ある町人が用ひた字書や敎訓書などは、同時に宗因や西鶴などの文學者も用ひたものであつたらう。そこで當時一般の學問敎養の資料として、如何なる出版物が提供せられてゐたかを窺ふことは、卽ちまた當時の學問を知り、文學解釋の參考書をも知る所以ともなると思ふ。

試みに前出『書目集覽』所收の書籍目錄によると、字書には『玉篇』『和玉篇』、『字彙』『和字彙』、『節用集』、『下學集』『名字盡』『奇字早鑑』（以上、寛文書籍目錄）等の外になほ幾種もあるが、以上が今日の吾々にも親まれてゐる書目である。そして殊に『節用集』の類が、室町中期より江戸時代を通じて最も通俗に用ひられたことは、字書史よりも證明されてゐる（上田萬年・橋本進吉著『古本節用集の研究』）。その實況を浮世草子の「猿源氏色芝居」（享保三年、九二軒鱗長作）卷二の二に、「尊氏に抱へられ、十石に三人扶持、軍の最中にも家業とて、卷紙と硯と節用集を放さず、萬金丹や血どめと同じく、身にそへて持ちありきしほどの丁寧もの」と叙してゐるのもおもしろい。この節用集は、元祿以後の書目に至ると、更に『合類節用集』『武家節用集』の如く「何々節用集」としていろ〳〵特色をつけ、書冊の樣式を

かへたものを多く掲げ、享保の目錄の如きは三十四種を擧げてゐる。當時の文學及び一般の通俗文獻に見える難解字を讀むには、やはり斯の如き當時の字書に依るべきで、もし今日便利に整へられた字典類にそれを求めるならば、單なる徒勞に終るに止らず、解釋學上むしろ邪道に導かれることすらある（藤井先生著『江戸文學叢説』二二五頁參照）。『三世相』や『萬年曆』或は『雜書』の類は、曆占書として擧げてあるが、今日から見ると一種の迷信辭書（變な言ひ方であるが）とも謂ふべきもので、その物に學問的の絶對價値はないにしても、當時の俗信が描かれてゐる文學を讀むには、また見逃してはならぬものである。その國語學史上から見てやゝ價値のあるものについては、拙稿「近世の國語」を參照されたいと思ふが、節用集の外に『世話字盡』や『萬用字盡』の如き、俗用字の參考書は少なくないけれども、當時の俗語を主としてあげた辭書といふべきものは一向に見當らない。俳書の内、或物を辭書と見れば格別であるが、その他に於ては『諺草』や『本朝俚諺』等の如く諺を集めて解したものに、僅かの俗語を附帶的にあげてゐるに過ぎない。（因みに右拙稿について、藤井先生から、俗語を説いた隨筆として入江昌喜の『幽遠隨筆』『久保之取蛇尾』（後編は未刊にて寫本）など忘れてならぬ由の示教を受けたので、ともに帝國圖書館所藏のものを一見に及んだが、今、その内容を紹介してゐる暇がないのを憾みとする）。箕田熹貞といふ人の著『志不可起』（享保の寫本。本書については『國語國文』昭和九年一月號の拙稿參照）は、確かに元祿俗語辭書として國語學史上からは注目すべきものと思ふが、首卷を缺いて居り、且つ何分寫本で普及的でない故に解釋學の側には合はさうもない。なほ特に故事を説いたものとしては、元祿の書目錄「故事」の部に多數あげてある。『蒙求』『説苑』は支那のものであるが、これらは我が近世文學にも可なり引用されてゐるではないかと思ふ。例へば『智惠鑑』や『理屈物語』の如き假名草子、或は淨瑠璃・俳文等の故

事にも屢々その資材を供給してゐると思はれる。『野語述説』（貞享元年、松井壺峯著）は日本のもので、松浦默著の『本朝世諺俗談』などと並稱されてをり、俗諺俗說の出處を說いてゐる。

以上の如き字書や俗諺・故事解說書の外に、書目にいはゆる「往來物并手本」の部に揭げたもの、例へば『初學文章』の如きものも、亦一顧の價値がないではない。今、自分の座右にある正保二年版の『初學文章』を一瞥しても教へられる所が一二に止らない。いろ／＼な手紙の書き方を始め、制札・法度・證文などの書式、それらの注意の外に、日常の禮儀作法、例へば使者奏者の口上から食事の仕方まで箇條的に說いてある。曾て近松の『持統天皇歌軍法』第一に「日比のお勤御手がら／＼、參を以てお悅び申さん」とある「參を以て」を異樣に思つてゐた（藤井先生の全集註にも「自身參上しての意か」と疑つてある）が、この『初學文章』には幾らも用ひてあり、いかにも「參上を以て」の略で「以レ面得ニ御意一度事候御内に御座候はば以レ參可レ申候」の如くいふを常としたことが知られる。又、賣券狀即ち物を賣渡したといふ證文に、何某殿へ「永代賣渡候云々」と書くのは、「永といふ事なければ御法の德政には取返す義もあるなり」と註してゐる。「永代藏」などいふ熟語も實はその邊から考へると甚だ面白い。この「永代」の用法は室町期から近世を通じて現代の土地賣買の證文にも用ひてゐる。病氣について「驗氣とはたとへば十の物四つ五つほどもよく成たる事をいふ、本復とは煩すきとよくなりたるをいふ也」とある。以上は文章に關する例であるが、この他、作法即ち「躾方」についても、かうした調子で敎へてゐる。元祿の書目には「躾方書」の部にこの『初學文章』を入れ、寶曆・明和の書目には「敎訓」の部をわけて、往來物とは別種の、例へば『敎草』（宮崎安貞）、『商人平生記』（難波吾平）、『實語敎訓松明』（寺田與右衞門）の如き類をあげてゐるが、さうしたものよりも、更に解釋學上に必要と思はれるのは、重寶記（調法記とも

書く）の類である。これは前記『初學文章』中の躾方に關する事項を一層充實させたやうなもので、既に『男重寶記』（水谷不倒氏の『假名草子』には、この書を苗村丈伯の著としてあるが、果して然るか）のことは屢々引用したが、その內容は、或事項に偏せず、よく一般士民の教養事項を網羅してゐると思はれるので、今、更めて目次の全貌を言ふならば、男子一代の總論並びに士農工商の事、天子の御事ならびに禁中の故實、公方並びに將軍の事、門跡並びに寺領の事、公家並びに家領の事、官位次第の事、武家名目の事、大名衆つかひ言葉の事（以上卷一）、手ならひ仕やうの事、詩の作りやう幷に平仄の圖、歌道並びに歌よみやうの事、連歌俳諧の仕やうの事、謠うたひやうの事（以上卷二）、茶湯たてやう喫やう幷に諸禮の事、立花の事ならびに圖、盤上の事・碁・將棊・双六（以上卷三）、弔狀の法式、祝言狀の法式、書狀筆だての法、獻立書やうの事、菓子の類（以上卷四）、唐人と物がたり仕やうの事、日本諸國の人ことばづかひ、同かたことなほし幷に五色ほめことば、當流しつけ方五十一ヶ條、大不成就日の事、いろはづぼうし（以上卷五）の如き諸項を、それぐ一章として說いてゐる。尤も以上は元祿十五年刊行の『新板增補男重寶記』（潁原退藏氏所藏）によつたのであるが、初版（刊行年次不詳）は、これほど多くの項目ではなかつたと見える。右卷五の最後の項は灸穴のことであるが、「大不成就日の事」は何の暦占の知識がない吾々には何のことかわからぬ。『女重寶記』（元祿五年）は、第一は「女中よろづたみしなみの卷」で、身の養生・各階級の風俗・諸藝・詞づかひ・化粧・衣類の沙汰など記し、第二は「祝言の卷」で日取・道具・膳部・盃事・食事などすべて婚儀に關する作法を說き、第三は「懷姙の卷」で、その諸注意から子女養育の事までを教へ、第四は改めて「諸藝の卷」とし、手習・歌道・琴・貝おほひ・貝かるた・香道のことから、萬づ染みぬきの事まで掲げ、第五は「女節用集・字づくし」となつてゐる。—高井伴寛の『增補日用女重寶記』（寫本五卷）は未

見―以上二書によつて、當時の男女のたしなみとして、その修養に努めた諸事項が大觀されるが、言葉に關することが可なり多いのに注意される。無論かくの如きは偶〻その著者たる人の言語教育についての特別な興味にもよるのであらうが、當時の國語そのものの研究上から、延いてはその國語を基礎とし出發點とする場合の解釋學上にも有りがたい資料となるのである。更に言葉以外の諸事項に至つては、殊に『男重寶記』に掲げた諸項の多くは、夫々獨立科目としてもそれに關する幾多の出版物が出てゐるので、この二書がまた當時における百科全書的の價値を有することを知るのである。例へば書目中に歌書・俳諧書・謠本・盤上書・茶湯書・立花書・料理書・女書の諸部にあげられた各書は、先づこの二書の諸章の説を概論とし、入門として讀むことが便宜とされるであらう。これについては、國書刊行會本の『雜藝叢書』(二冊)に收められた諸書なども見るべきであるが、なほ重寶記の類には、『家内重寶記』『晝夜調法記』・『人々長褒記』『聞書重寶記』『買物重寶記』『重寶記大全』『繪本重寶記』『好色重寶記』(以上は元祿・享保の書目に見える)『金持重寶記』『絹布重寶記』『田畑重寶記』(以上三書は通俗經濟文庫に所收)、『男女土產重寶記』『世話重寶記』『武家重寶記』『諸人重寶記』などがある。これらの内、自分の見たものは未だ三四種を出でず、今、傳本の所在をすら確かにしないものも多いので、一々の價値を考へることなどは固より出來ないが、唯〻かういふ俗書もすべて「その世を知る」には一助となるべきことを言ひたいのである。

さて「その世を知る」ための社會百科事典的の性質を有するものに圖彙・圖會の類がある。そのうち第一に特筆すべきものは『人倫訓蒙圖彙』(七卷)である。元祿三年刊で卷三に蒔繪師源三郎の名が見えるが、作者は明かでない。外題の頭に「所作入由來入」と記してあるやうに、公家・武家・僧侶から、美術工藝家・農工商業者・遊里・演藝・大道藝人の事

まで仔細に項目を立て一々その出來所作を圖說してゐる。即ち繪の力を借りて當時の各社會の人々の生活相を一目瞭然たらしめてゐる。尤も圖彙の類では是より先に中村惕齋の『訓蒙圖彙』(寬文六年自序)があり、山本格安がその著『和言黔驢編』書籍の部に、「訓蒙圖彙出デテ、上ニ武具・女用・人倫等ヲ冠ルモノ出ヅ」と言つてゐるやうに、實はこの惕齋の著が人倫訓蒙圖彙その他次に言ふ如き種々の訓蒙圖彙の出現を促したと見られる。即ち『武具訓蒙圖彙』(五卷、貞享元年、湯淺得之著)、『好色訓蒙圖彙』(三卷、貞享三年、無色軒三白居士著。本書は潁原氏の書目解說『上方・江戶時代』には浮世草子の部に入れてあるが、色道に關することを圖彙式に記したものである)『雜字訓蒙圖彙』(三冊、貞享四年。これは實は永井如瓶撰の『通言便蒙抄』の僞版と謂はれるもの。圖入で當時の俗語原・俗字を說いてゐる。)『女用訓蒙圖彙』(五卷、元祿元年。『女重寶記』の內容と同じやうなことの圖說)、『增補頭書訓蒙圖彙』(八卷、元祿八年。惕齋の『訓蒙圖彙』の增補。更に本書は寬政元年にも增補され十卷本として出てゐる)などがあり、なほ、後期に至つても、山東京傳の洒落本に寬政元年刊の『青樓和談新造圖彙』(名著標本集第七輯)や、式亭三馬の『戲場訓蒙圖彙』(八卷、享和三年)、『四季訓蒙圖彙』(狂歌寄波第八卷所收)なども管見に及んだものである。何れも繪畫の爲に多くの、紙幅を割き、或物は解說を附けたりにして、寧ろ繪本といふに近いものもあるが、とにかくこれらに依つて、當時の各社會相に對する吾々の眼先が明かにされることは爭はれない。なほ嚴重な意味では文獻と謂はれないであらうが、更に人の姿、世の姿、その生きたさながらを見せて吳れるものに、風俗圖繪の類がある。例へば『日本名著全集』江戶文藝之部第三十に收められた『和國諸職繪盡』や『和國百女』『大和耕作繪抄』の如きは、前記『人倫訓蒙圖彙』と前後して公にされたもので、內容上からも彼此相影響する所あつたと見られる。その詞書は、未だ解說といふまでに至つてゐな

いけれども、それ〴〵繪と對照して讀むときに、興味津々たる裡に、今日の吾人を當時の社會に誘ひ入れる。解釋學上、この種の風俗圖繪集（地理に關しては名所圖會の類が各地について出てゐる）が、更に重要視さるべきことを自分は痛切に感じてゐる。寺島良安著の『和漢三才圖會』（百〇五卷、正德二年自序）は、その詳細な解說に學術的の內容があり、これに挿畫が作つてゐるので、その百科事典的價値に於て、前記數者と自ら選を異にする大著である。板本も多く傳存してゐるし、明治三十九年に活字版に縮刷されたものも容易く手に入るので、本書も今少し利用さるべきである。なほ後期に降つての百科事典的なものに、挿繪はないが喜多村信節の『嬉遊笑覽』があり、多少の挿繪も見えるものに山岡俊明著の『類聚名物考』や喜田川季莊の遺著『守貞漫稿』一名『類聚近世風俗志』（上下二卷）などがある。地理・物產に關しては『國花萬葉記』（元祿十年菊本賀保）『雍州府志』（貞享元年、黑川道祐）などがある。又『萬寶全書』なども一寸重寶である。單に近世俗語の辭書としては『俚言集覽』（撰者未詳）を忘れることが出來ない。

以上近世前期の通俗學問の話から、字書・敎科的書類・百科事典的なる圖彙・圖會等のことに及んで來たが、この上、圖彙・圖會・繪づくしの類に立入つて考へることは、卽ち美術史或は繪畫史の域に入ることになる。殊に浮世繪と近世文學及びその解釋とは密接な關係があることを知るが、今自分はそれを委しく說くまでの準備がない。唯、その作品の挿畫が、テキスト以上に物を言つてゐること、また、その作品とは別な繪本或は別な書の挿畫が、思はぬ處でその作品の中の事項を解釋してゐることに注意したい。例へば一代男開卷一章の人物「名古や山三」については、當時「人のもてはやすによりて其品を集めて繪にして板行」したといふ名古や山三郎繪づくし『婲男なさけの遊女』（貞享二年刊、師宣畫）を眺めると、作者がその人物を選んだ意圖が一層はつきりするやうである。三田村氏編の輪講には『舞

曲扇林』の山三が挿入されてゐるがそれもよからう。また『織留』五の二「さらしかゝ」（晒喚）は、享保十五年刊の『繪本御伽品鏡』にその姿を見せてゐる。横井也有の『案山子辭』にある木兎が小鳥に笑はれる話は、天和二年刊の繪づくし『千代の友鶴』を見るとその事情がはつきりして來る。又、置手拭・綿帽子・ほうろく頭巾のやうな被りもの、辻君・立君・すあひの如き人物、砧・苧をうむ・綿うちのやうな所作など、今日普通には目撃するを得ないが、上來記す如き繪本・挿畫によつて、吾々はこれを藝術的繪畫として鑑賞しつゝ、かた〴〵解釋學上の知識として學ぶことが出來る。勿論これらの事項は、『我衣』（曳尾庵著）や、『筠庭雜考』（喜多村信節著）、『骨董集』（山東京傳）、『用捨箱』（柳亭種彦）の如き、後の學者の隨筆・編著によつて、知識としてのみならば研究できるが、時代と環境との背景として、之をより直覺的に味得する爲には、迂遠のやうでも藝術的價値ある第一資料によるがよい。さて、その繪本の選擇であるが、座右の稀書複製會本によつて例をいふと、『宮城野』（延寶三年、俳諧繪本）『團扇繪盡』（天和四年、師宣）『しだれ柳』（元祿十五年、大森善淸）『繪本玉かつら』（享保廿一年西川祐信）の如きがある。なほ前記の日本名著文庫の『風俗圖繪集』のものは、その悉くが藝術的に立派なものであると思ふ。

次に、法制經濟に關する講說は、美術繪畫よりも更に自分の手に負へないことであるが、唯この方面にも及ぶ限り留意しなければ、文學も本當には解釋できないことを痛感してゐる。それは必ずしも西鶴の町人物の解釋に、當時の經濟思想及び機構の理會が必要だといふのみではなく、淨瑠璃でも脚本でも、降つては川柳でも、殊に江戸時代の士民の生活が直寫されてゐる文學ならば、何にでも金の問題、お觸・法度に關する事柄（これについては『德川禁令考』が名高い）が入つて來るのである。固より金のことは町人を描いた文學に最も多く現はれるが、「金の世の中」、「金

が敵」といふやうなことは、何も町人に限つて通用する諺ではない。幕府の法令・官制や各藩の掟などについても、階級制度のきちんとしてゐた當時の社會の實情を知らうとするには、必要だけはこれを心得てゐないと、屢〻わからぬことに引つかゝる。武家物に於ける敵討の話にしても、當然の敵ならば、いつでもどこでも、誰でも敵討が出來るものと思つて讀むと、如何に當時でもさう簡單には行かない掟なのでまごつく。

「算用の事は誰にても知らぬ人はなけれども、よく知りたる人もなし」とは或古算書にある言葉だといふが、江戸時代の金の勘定の話になると、もう「金」の字からして無造作に使ふわけに行かない。貨幣と言へば無難である。その貨幣は金と銀と錢とである。上方は銀本位で江戸は金本位であつた。上方の人には、今でも現金と言はないでげんぎん（現銀）といふ者がある。給金も給銀といふ。銀は秤目で匁または目・分と呼ばれ、錢は圓形で中央に方孔があり、一文二文または一錢二錢と計算され、金は兩とか歩とか呼ばれる場合が多かつた。元よりこれは文學に現はれてゐる貨幣の勘定の極めて大體の話である。これら貨幣の各種類、その名稱、相互の換算法、その他一般經濟に關しては專門の書について概念を得る必要がある。遠藤佐々喜氏の『再吟味を要する江戸時代貨幣研究の基本問題』（『經濟史研究』三號昭和五）には、從來の貨幣研究の主要文獻が批判されてゐると見られるが、その數例をあげると、

1　金銀圖錄　近藤守重著（文化七年序。貨幣を色刷にて示す）

2　大日本貨幣史　大藏省　吉田賢輔著（明治九―十六年、同じく挿畫あり）

3　日本貨幣史圖錄　塚本豐次郎著（寫眞を示して實物研究に資す）

（附、『金座考』鈴木俊三郎著）

4　日本貨幣史　瀧本誠一著（春秋文庫本あり）

5　舊幕府理財會要　大藏省（『日本經濟叢書』所收のものは、德川理財會要と改む）

6　德川時代の文學に見えたる私法　中田薫著（本書卷末の引用書目は、淨瑠璃・小說・脚本・實話・川柳と分類され、如何にそれらと法制經濟との交渉があるかを一覽せしめてゐる）

7　日本財政經濟史料　大藏省（索引あり、文學書に於ける經濟に關する事項の檢索に便である）

の如きがある。これらも遠藤氏によれば、中田博士の著は別として、何れも再吟味を要する點があると言ふ。故に右の數部の書の揭出については、同氏に責任なく全く自分のさかしらである。これだけでも大部なものがあり、一々目を通すことは專門家でない以上必要もあるまいが、參考として書名を心得てゐることは、別段苦にもならぬ必要事であらう。なほ、この外に

大阪市史　大阪市參事會編（幸田成友氏が主任として從事されたもの）

日本經濟史研究　幸田成友著（論文集であるが、挿繪もあり索引もあり、門外漢でも取りつき易く、利用し易い。）

近世の經濟思想　本庄榮次郎著（特に近世諸學者の經濟思想についての論稿を收む）

日本社會經濟編年史　吉田英雄著（前記『日本財政經濟史料索引』の變形とも見られる）

日本商業史　横井時冬著（改造文庫本あり）

又『日本經濟叢書』の內、例へば『草茅危言』（中井竹山著）、『町人考見錄』（三井高房著）『政談』（荻生徂徠著）の如き、『通俗經濟文庫』の內、例へば『人鏡論』『萬金產業袋』（三宅也來著）の如き、『德川商業叢書』の內、例へば『大阪商業習慣

錄』（遠藤芳樹著）の如きがある。これらも、固より管見によつての例示に過ぎない。この外にも尙右の叢書中には書名だけ見ても、いろ〳〵面白さうなものがある。又、遠藤氏の『舊貨幣と新貨幣との換算法に就て』（平沼淑郎博士古稀祝賀會記念社會經濟史論集昭和八年）の一篇は、前記同氏の論文と相待つて吾々の蒙を啓くことが多大である。

「江戸爲替」「十分一銀」「帳切銀」「樽代」「分散」などいふ如き語彙の理會から、當時の經濟的思想及び機構の解釋に至るまで、以上の如き諸文獻への顧慮を缺くときは、甚だしい過誤に陷るであらう。實はかく申す自分自身も、さうした過誤に屢〻陷つたことを耻しく思ふ。例へば『胸算用』や『日本永代藏』に見えた經濟思想を以て、直ちに西鶴獨得の經濟思想と斷ずるのは過誤である。殊に永代藏巻三の一の「煎じやう常とはかはる問藥」を以て彼が創始した致富道かの如く論ずる從來の文學批評は當らない。これらの點に就いて、自分は曾て眞山青果氏から、『人鏡論』その他の思想を顧みるべきことを敎へられたことを感謝してゐる。要するに當時の經濟思想を背景として眺めれば、何も西鶴の思想は驚くに足りないのである。彼は唯これを文學的に描寫することを創めたからこそ偉いのである。

最後に花街と芝居とに關する知識が、近世全期に亙る各種文學の解釋に極めて必要であることは言ふまでもない。殊に遊里遊女を背景題材とした文學は近世文學の大部分をしめてゐるとも謂はれよう。謂はゆる軟文學でなくとも、何等かの意味と程度とに於て、この方面のことに關係交渉を持つてゐるものが頗る多量である。閑寂枯淡な芭蕉の如きにも「一つ家に遊女もねたり萩と月」の吟があり、勸善懲惡でやかましい馬琴にすらも、洒落本の作ありといふは噓にしても、『廿日余四十兩盡用而（ツカヒハテシテ）二分狂言』の如き黄表紙があり、三勝半七の情話を思はせぶりな『三七全傳南柯夢』の如き作がある。浮世草子が遊女・野郎の評判記から發展したと說かれてゐることは、更めて記すに及ばぬ故に、今は花街に關

する二三の文學・文獻について言及するに止める。先づ新潮社版『日本文學講座』五卷に收めた石川巖氏の論考『元祿以前の花街文學』が、近世初期のものを知るには好い參考となる。唯そのテキストは見るに億劫なものがある。『江戸時代文藝資料』に『諸分店颪』（原名「難波鉦」）『吉原鑑』の類、稀書複製會本に『剥野老』『野郎蟲』『野郎大佛師』『笠張草』『難野郎古たゝみ』『古今四場居百人一首』（以上、野郎評判記）『寝物語』『難波物語』『朱雀遠目鏡』『朱雀信夫摺』『傾城評判記』（以上、遊女・遊里の評判案内書）などが出てゐるが、これらだけでもその本文を一讀してかゝると、西鶴などの用語や辭樣にも、妥當な批評と解釋が與へられるやうになる。なほ花街の風俗・習慣・作法・地理的案内を知るには、畠山箕山の『色道大鏡』（續燕石十種第二冊）、『好色由來揃』『吉原大全』『島原大和暦』『みをつくし』（以上、近世文藝叢書第十冊）、『洞房語園』（珍書刊行會叢書第一）などの類を見るべきである。

芝居即ち歌舞伎に關しては、伊原靑々園氏の『日本演劇史』・『近世日本演劇史』、飯塚友一郎氏の『歌舞伎概論』、最近では小宮豐隆氏や守隨憲治氏などの歌舞伎研究の成績が段々發表されてゐるし、簡單ながら改造社版「日本文學講座」第十卷の『演劇戲曲篇』には、斯界の二十八家が、各方面からそれ〴〵別箇な題目で執筆されてゐる。江戸時代のものでは、『聲曲類纂』（齋藤月岑著）の如きがあり、『歌舞伎叢書』や『新群書類從』演劇の部三冊にも、いろ〳〵の研究資料が集めてある。今、これら新舊の文獻を解釋學的參考書として眺めれば、そこにもこゝにも吾々の注意を惹くものが存するが、自分にはその一々によつて實習談を講ずべく、時間と紙幅とが許されてゐない。

結論

要するに、解釋學が新に求めるところは、或作品に對して字句詞章の訓詁に凝滞することなく、これを文學史的に發生的に眺め、社會學的もしくは世相史風俗史的に觀察し、法制經濟史的に考究して、その作者の言はんとし、描寫せんとした意圖を、對象物を、その作者以上に明かに徹底的に理會しようといふにある。殊にその作者作品の環境を研め盡して、その作者作品をはつきりとした浮彫のやうにして眺めようとする爲には、今後更に、例へば麻生磯次氏の『近世生活と國文學』や『上方江戸文學を産める社會的環境』（岩波講座『日本文學』）、三田村鳶魚翁の『江戸生活のうらおもて』、山口剛氏の『江戸文學と都市生活』、尾崎久彌氏の『江戸文學と遊里生活』（新潮社版『日本文學講座』）などに於て示されたやうな考察が必要とされる。併しながら、これらの考察は、決して個々の文學及び參考資料を外にして能くすることではない。こゝに於て例の循環論にまた逢着するわけであるが、一篇の作品にしてもとかくその字句詞章の解釋を粗にして來た弊が、むしろ今日の小學校の國語教育から大學の卒業論文の文學資料の讀み方にまで及んでゐるではあるまいかと思ふ。しかし又最近では詞章研究がやゝ顧みられて來たと思はれもするが、果して如何であらうか。萬葉集の用字法研究や平安朝文學その他の本文校勘・異本考査が一方に行はれると、他方にはその知的研究の偏重を難じ、文學鑑賞の直覺的なるべきを唱へる人もあるが、それは一應も二應も尤もな話である。否、寧ろ純然たる科學でさへ、根本は主觀・直覺に訴へて受取られるものから出發してゐる。たゞその直覺を正當ならしめる爲にこそ基礎研究も必要である。もし通俗に墮した各個人の直覺主義のみに賴つてゐるならば、文學解釋の學は發達しないと思ふ。而も自分は今までの講説の結論として、再び近世古典學者の所説によつて次の數條を繰返す者である。

（一）先づその作品の本文を忠實に讀め。直覺的に。語學的に。本文批評（テキストクリチーク）的に。

豫めの理會を得る爲にその讀むべきを說いて來た文學史的評論などは、實は作品にもよることであるが、却て然るべからぬ成心を作ることにもなる場合があるので、理想から言へば、作品を讀んだ後にしたがよいのである。

(二)その作品のみでわからなければ、類書を出來るだけ多く讀め。

(三)同時代の他の種の文學作品、それから文學書ならぬ出版物、殊に法制・經濟に關する文獻をも參考せよ。

(四)繪畫・圖會・圖錄の類を探れ。

もし、環境を知り、時代を察し、人に親しまんが爲に、その作品の本文を後にして、それらの參考書を先にするが如きは、徒然草にいはゆる「說教師になる子」の愚を學ぶものである。說教師にならう爲には、經文をこそ第一に學ぶべきである。一作品を解釋するにはその本文に先づ縋るべきである。しかし兼好法師は、每に物の兩面を敎へてゐる。「すこしの事にも先達はあらまほしきことなり」といふのも確かに一面の眞理である。自分はこの拙稿が、もし山に迷ふ人に何かの手がかりにならばと願ふのみである。先達の役を仕るなどは、もとより自分には大それたことである。

附言　この終末に、近世文學に關する今日の諸家の研究論文・著述等で、未だ言及しなかつたもの、また、江戶時代の著作で、『新群書類從』『燕石十種』『溫知叢書』『近世文藝叢書』『德川文藝類聚』等から參考となるべき書の分類的集錄など添へて拙稿の不備を補ひたい考へであつたが、今それを果し得ない事情にあるのが遺憾である。但、土田杏村氏の『文學と感情』は、氏の「解釋學的試み」として特筆さるべき好著である。その取材は近世に及んでゐないが、富士谷御杖の解釋學說の、眞淵や宣長以上に出てゐる所以を論考された章の如きは、拙稿とも關聯があり最も傾聽すべきである。

昭和九年三月五日印刷
昭和九年三月十日發行

國語科學講座
（第十回配本）

東京市神田區錦町一丁目十番地
編輯兼發行者　株式會社　明治書院
代表者　三樹退三

東京市神田區三崎町二丁目一番地
印刷者　細谷祐三

發行所　東京市神田錦町一丁目　株式會社　明治書院

國語科學講座

—X—

國語解釋學

近世解釋學

飛田隆

株式會社
明治書院

國語科學講座

— X —

國語解釋學

近世解釋學

飛田隆

株式會社
明治書院

目次

近世解釋學

飛田隆

一 對象と方法

一 對象 解釋學は、ディルタイに從へば、「文書としての紀念物の解釋の技術學」*であつた。さうしてそれは、解釋の技術の規則を基礎づけるために生れたものであると同時に、理會の分析から普遍妥當的な解釋の可能性を規定することによつて、全然一般的な問題の解決に肉迫するものであつた。近世解釋學は、かゝる一般的なる研究から離れて、具體的なる「近世文學解釋」の學としてあらうとする。

* ディルタイ著池島重信氏譯「解釋學の成立」(岩波哲學論叢)八頁。

一般的なる解釋學は、普遍妥當的な解釋の可能性を規定せんとしてゐるのであるが、近世文學の解釋において、その中に横たはる問題は、單一なる作品の解釋の技術、又は普遍妥當的な解釋の可能性の問題を超越してゐる。勿論、近世文學の解釋は、これらの問題をも問題として含みもつてゐるのであるが、それらの問題の外に、近世文學の解釋は、單一なる作品の解釋の複數ではないと云ふことが顧みられなければならない。近世文學の研究は、近世の個々の

文學作品の研究の單なる總和ではなくて、一つの聯關の研究でなければならない。この點において、近世文學解釋の問題は、單なる解釋學の問題ではなく、特殊なる「近世文學解釋學」の問題としてわれわれの前にあらはれて來る。

けれども、近世文學の解釋は、一つの聯關的なる研究であるにもかゝはらず、部分と全體との相互決定による深究に依存せずには果されない。卽ちこの研究は、個々の作品の研究と聯關的なる展開の研究との相互依存によつてのみなされる。この點において、解釋の可能性の問題は、あらゆる精神科學におけると同じやうに、この問題の中に入つて來る。一つの聯關の認識が、個々の作品の理會からはじまるものであるとすれば、それは、たゞ中に入つてくるのみではなく根柢に入つてくるのである。

近世文學解釋の根柢に、一般的なる解釋學が參與してゐるとすれば、「近世文學解釋」の學であるべき「近世解釋學」は、個々の作品における解釋の可能性及び技術の問題の中に、その研究對象を求めることは出來ない。從つてその對象は、聯關としての近世文學に關してあるのでなければならない。しかるに、聯關の認識は、個々の作品の解釋操作に先だたれるものであるから、近世解釋學は、一般的なる解釋學に先だたれてあることになる。

故に近世解釋學は、あらゆる精神科學と同じやうに、一般的なる解釋學を先だたせて、特殊なる近世文學を解釋する技術を研究對象とする。卽ち、近世解釋學は、近世文學解釋の技術學である。

二　方法　この學の要請してゐる技術の究明は、技術の根據の問題から出發して、技術の規定に至る問題を含んでゐる。近世解釋學の仕事は、近世文學解釋の實踐にあるのではなく、この實踐に對する規範を研究するにある。故にかゝる學は、その課題として、第一に技術の根據の研究をなし、第二に技術の規定をなさなければならぬ。

第一、技術の根據の研究。一つの文學作品の解釋は、二つの可能性を前提としてゐる。一つは、歷史的認識の可能性であり、他は、解釋の可能性である。故に解釋學は、文書としての紀念物の解釋の技術を研究する際に、その紀念物の認識の可能を前提としてゐる。過去のものを認識することは可能であるといふことが、前提として横たへられてゐる。われわれは、われわれの研究において、その根柢に、解釋學の參與することをみとめてゐる。故に、われわれの研究において、根源的なる點において、歷史の認識の可能性は旣に前提せられてゐる。技術の根據の研究のためには、この前提せられてゐる問題は、嚴密なる批判を經なければならないのであるが、しかし、われわれの問題と、この問題との間には、更に解釋の可能性の問題がある。われわれは、これらの二つの問題への思索は、今はさけなければならない。さうして、歷史認識の可能性の問題を歷史哲學に、解釋の可能性の問題を解釋學にゆだねて、われわれは、それらの可能性を前提して、進まなければならぬ。それにしても、それらの問題の後によこたはる問題は、全く新しき問題であり、複雜なる問題である。

第二、技術の規定。第一の研究によつて明かにせられる根據の上に技術を展開させるのである。この事は、技術の根據の研究で明かにせられる技術的に不可缺なるものを、近世文學の作品並びに近世の諸事象からぬき出して、第一の研究の示す所に從つて圖表的に記述するのである。こゝに得られる圖表は、技術の根據の研究の結果として生れるものであり、技術が實踐に連結する連結點となるもの、云ひかへれば、理論と實踐との交渉の場所となるのである。

このやうにして研究を進めようとするのであるが、こゝで明かにしなければならないのは、近世解釋學と云ふ言葉に於ける近世の意義である。こゝに近世といふのは、紀元二二六三年から二五八五年に至る期間を指してゐるので、

普通にいはれる江戸時代、明治大正時代はこの期間に包含せられてゐるのである（垣内松三先生著「国文學系統表」参照）。さうしてしかも、この小論において扱はうとするのは、既に本書の上卷の中で扱はれた部分を除去し、更に、大正時代を除外したる紀元二五二七年より二五七二年に至る四十五年間の文學である。

二 技術の根據

一 文學作品のある場所 近世文學解釋の技術を研究する爲には、第一に、近世文學が一つの存在として如何なる場所にあるかと云ふ事を明かにしなければならない。この事は、かゝる技術の研究を進展させる根源的の力である。近世文學のある場所を知る事は、近世解釋學への思索を展開せしめるだけでなく、かゝる思索の發動の根據である。

近世文學のある場所が問題となるとき、われわれは、近世文學が一つの聯關的なる存在であつたことを思ひ出さなくてはならない。この聯關は、文學作品の聯關であるといふことで横の限界を、二五二七より二五七二年までといふ時間的制限によつて縦の限界をもつてゐる所の聯關である。而して、この聯關そのものは、詳しく云へばかゝる時間的制限内にある文學作品の個々のものの關係としてあらはれてゐるものである。故に、この聯關そのもののある場所は、個々の文學作品によつて決定されてゐる。即ち、聯關と個とは勿論別であるけれども、それらの存在の場所について語るときには、文學の聯關を文學の作品によつて保持せしめることは出來る。今、こゝでは、單一なる文學作品のある場所の考察から、文學的聯關のある場所の考察を導き出して行きたいと考へる。

文學作品は、生の表現の固定せられたものであるといはれる。われわれが、もしこのことを認めなければならぬと

すると、その故に、われわれは、文學作品の背後に、生の表現の作用を考へなければならない。もしさうであるとすれば、文學作品の背後に「生」の存在が許容されることは不思議なことではない。「生」の存在は「人間」の存在である。近世の一つの文學作品の背後には、それを表現したところの近世の「人間」があつたのである。

「人間」の存在は中間的であるといはれてゐる。このことは、人間存在の場所を規定する最もよき言葉である。人間存在は、時間的に無限の過去を後にもち、無限の未來を前に望んでゐる。人間存在は、空間的に無限のひろがりを自己のすべての方向にもつてゐる。然し、これらにまして、人間存在は、調和といふ點について考へるときに中間的であることが注意されなければならない。この意味は、人間存在は最も高き調和とともに最も低き調和をも、持つことが出來ないものであるといふことである。すぐれたる思索者は、かゝる中間性を以て、人間存在の運動の原因とみなした（山内得立博士著「存在の現象形態」参照）。これらのことを以て考へて見ると、人間存在は、知ることの出來ない遠い昔から、限りない未來に流れてゐる時間の一つの場所に立つて、限りなき空間の一點を占めつゝ、その精神の生活において、悪と聖との間をさまよひつづけてゐるところのものであることがわかる。最も不完全な世界と最も完全な世界との間を、調和を求めるが故に、缺けたるものを補はうとするが故に、漂つてゐるものであることがわかる。

更にわれわれは、人間存在が時間的に中間的であると云ふことから、人間存在の限界について考へることを忘れてはならない。われわれは、われわれの現存在を限界として、過去のことを考へることが出來る。さうしてそこにも、一つの限界がある。人間存在は、時間の一點において、自己の生存を、内省によつては勿論のこと、他の如何なる助けをかりても否定しなければならぬことを知る。人間は、そこにおいて生れたのである。この生誕のことは、やがて

それと對立してゐる死を思はせる。生誕と死との考へは、われわれの思索を、生理學的なるものを除去したる觀念論の中に止まらせない。身體的なるものは、また人間存在の重要なる成員である。

人間の運動は、調和を求めるためのさまよひであるといつた。しかし、われわれは、このさまよひと身體性とを結びつけて考へることを怠ることは出來ない。人間のさまよひは、多く見られる如くさま〴〵である。そこには、個性的なるものがみられる。この特殊なるさまよひと身體的なるものとを結びつける處に、われわれは遺傳を負うて立つ人間存在の生誕を思はなければならぬ。而して、かゝる人間のさまよひに、更に一つの規定をあたへるものとして、環境が考へられる。遺傳と環境とを常に背負つて、人間は、自己の力により、又、他の助成をまちつゝ、死の方向に運動しつゞけてゆくものである。

即ち、生は、かくの如きあり方に於いて、かくの如き場所に存在してゐる。したがつて、生の表現の作用のある場所もこれ以外ではない。その表現の固定されたものが、文學作品であるとするとき、文學作品のある場所もこれ以外ではなく、その産出は、人間存在の運動によるものであつた。

近世といふ一時期においては、一個の人間存在の運動も、長くつゞけられるのであるから、その期間には、同一の人間の手になる異れる作品があらはれてゐることもある。即ち、運動の過程における生表現の固定化の度數が多くあつたこともある。更にこの時期においては、人間の運動しうる一つの世界の中に、多くの人間存在が運動をつゞけたのであつた。その結果として、異る人による異る作品が殘されてゐる。今、それらの各作品を、一つの聯關として、近世文學の名のもとに見るとき、それは、人間群の運動——それは、個別的ではあるけれども時代の思潮にかなり傾

向的に流されてゐる――の相關的なるものといふことが出來る。從つて、個々の作品に保持されつゝ存在するこの一つの聯關の存在の場所は明かとなる。さまよへる人間群の生の表現の固定化の間から、人間群の相互關聯の中からは見出されない或は氣づかれない關係をあらはしつゝ、新しく生れ出た聯關ではあるけれども、それは、人間群の運動の歷史的展開を客觀化する最も確實な世界であると考へられる。

一言にして云へば、近世文學は、近世人間群の言表の統一的客觀化である。

二　精神と社會　近世文學のある場所に就ての思索は、近世文學がその位置にあるが故に有する所の社會との關係の問題を必然的に導く。それは、上代の社會、中世の社會を歷史的展開の上に負うて立つ近世社會との關係である。

われわれはさきに、文學聯關のある場所を明かにするために、單一の文學作品のある場所について考察した。そのことが、單一と單一との關係が聯關を形づくる意味から單一は聯關を保持するものであり同時に聯關の位置をも規定するものであるとの理由によつてゆるされるのであるならば、近世文學と近世社會との關係は、單一なる近世文學作品と近世社會との關係に移調せられうるであらう。而して單一なる文學作品が、生の表現の固定化であることが事實であるなら、この關係は、表現の主體と社會との關係となる。即ち、それは、近世の單一なる人間存在、又は人間群の存在と近世社會との關係になる。これは、共同制作であるか否かの問題を顧慮してゐるのであるが、共同制作の問題においても、この人間存在と社會との關係の問題は、社會に對してある關係に立つ二人以上の人間の共同制作となる故を以て、共同制作の問題以前に存在してゐるから、今われわれは、この考察を單一なる人間と社會との關係に限定することが出來る。かくの如く單純化せられた關係から、近世文學解釋の技術を規定するために、精神と社會との

關係の仕方を明かにして見たいと考へる。このことについて、筆者は、さきに小著「文學研究に於ける血型學の地位」の中で次の如く述べた。

現存在は、働くことによつて在ると云ひ得るものであり、その作用の遂行において存在するものである。然しながら、現存在は、それ自體、我々によつて對象化せられないものであり、常に無の中に引き入れられて居るものであるから、現存在が働くことにおいてあるといふときに我々の意味せしめるのは、現存在の働きのみは、我々によつて對象化せられるものであるといふことである。我々は對象としての存在を認識しうる。しかし、それと同時には現存在は認識の對象たり得ない。我々は對象についての思惟それ自らの批判に入りうる。然しながら、それと同時には、現存在は、われわれによつて把握せられない。現存在は、かくしてその在り方においては非存在であるが、それの働きは、それのあり方においては常に存在である。我々は、こゝに於て、次のことを云ふことが出來る。即ち現存在は、ケーラーの云ふ意味での自我であつて、*それは常に對象化されるところから後退し、いつもあとに取りのこされる所のもので、ノエシス的なる自我である。ノエシス的我である。これに反して、働きとしての作用は、現存在の働きではあるけれども、それは、我々において對象せられるものであるが故に、ノエシス的我ではない。しかも、これは、我の働きでないとは云へないのであつて、この意味から、われわれは、これをノエマ的なる自我、ノエマ的我と呼ぶことが出來る。

* Wolfgang köhler ; Gestalt Psychology. (British Edition 1930)

そこで、我々は、ノエマ的我の一つとして、對象に就いての思惟をとらう。思惟作用は、あくまで現存在の働きと

して在ることは認められなければならない。然しながら、その働きが働きをなしてゐる時は、その働きは、更に我々自らの思惟の對象となる。AがAであるときに、AはBであると判斷すれば、その判斷に於て一つの矛盾を我々はもち、かく判斷する思惟作用は、直ちに不調和の氣分の中に、調和へもちきたさうとする思惟作用の對象となる。

　思惟作用が一つの働きとして、ノエマ的我において在るものである時、我々は思惟作用におけるロゴスの位置を考へて見よう。ロゴスは明瞭に言葉と云へるものであるか否かは問題であつて、所謂言葉以前のものであり、發展して言葉となりうるものであるとも云へるであらう。事實我々の判斷において、一つの判斷をなす時、決してそれを所謂我々の明瞭な言葉に出すことはしない。寧ろ、言葉と名づけることの出來ぬ或るものによつて、肯定も否定も出來るのである。極端に云へば、一つの狀態的な調和不調和の感をいだかせるものに過ぎないのである。然しながら、かくの如きものが、我々の言表の根源であることは否定することが出來ない。我々は、かかる一つの存在に、ロゴスなる名を與へることが出來るであらう。ロゴスは思惟作用をして可能ならしめる一つのものであり、寧ろ思惟作用の本質的なる部分をなすものがロゴスであると云ひ得る。カント的なる意味においては、直觀は悟性に對して、Einbildungskraft による結びつけを持たなければ概念となることが出來ないから、直觀と悟性との結合をわれわれが判斷と呼ぶとすれば、一つの表現はむしろ Einbildungskraft に直接根源をもたなくてはならず、現存在のノエマ的我における一つの働きとして、ノエシス的我に關係づけられて居るものでなければならない。何となればカント的意味において、表現が概念なくしてなりたゝぬとするなら、如何なる概念も、判斷をそのうちに持つからである。

　かくして、ロゴスは、ノエシス的我の一つの働きであつて、それは、ノエマ的我においてあるものである。その力

源を非存在としての現存在にもち、存在としてノエマ的我においてあるものである。

ロゴスを中心として、更にこれを表現にまで發展せしめて見よう。我々が普通表現とよぶ所のものは、ロゴスに關係づけて考へる限りにおいて、何等かの身體的なるものを通らなければならないもののやうである。一つの表現は、ロゴス的なるものの發展の頂點として身體的なるものを通して表現となり得るのである。われわれが素朴なる立場において、他人の表現として見ることも、一度身體的なるものを通しての表現である。このことは何を物語るのであらうか。われわれはこゝに、ノエシス的我は、それ自らを表現するのに、身體的なるものと密接なる關係をもつことを知る。このことに關して田邊元博士は次の如く言はれてゐる（理想第二十七號參照）。

『生の哲學』に特有なる力の對抗關係に於ける生内容の力學觀が、連結的なる消長の動性を明にするに止まり、力能としての存在者の自立的存在を了解せしめないことは最も重要なる其立場の缺點と考へられるものであるが、其由來を尋ねると、我が我を我に於て働かせるといふ、身體の活動に現れる我の行爲者としての存在が、それ自身の性格に於て認められて居ないのに歸することが發見せられるであらう。ディルタイが斯かる力學觀の創始的代表者と認めたフイヒテの知識學が、働くものなき純粹なる働きとしての純粹事行を其體系の基礎に置くのも、身體に於て限定せられたるノエマ的我を絶對的なるノエシス的我が働かせるといふ原始的辯證法を無視する抽象的立場に立つことを示す。それが觀念論者構成に終止する所以である。我の定立は單に純粹活動の知的直觀に於て成立するのではない。それは始めから身體的に限定せられたる我を、無限定にして眞に無限なる絶對的の我が我に於て働かせるといふ辯證法的統一の自覺に於て成立するのである。即ち我は單に働くことに於て在るのでなく、同時に在ることに於て働くのである。此相反する矛盾の媒介が身體である。身體は決してフイヒテの意味に於ける非

我として對象化し盡されるものではない。ノエマ的なる身體は他の對象と同樣に非我に屬すると考へられるけれども、それは一つの物體 Körper であつて、身體 Leib でないともいはれる。眞の身體の身體たる所以卽ち身體性は、對象化し得ざるノエシス的の身體に於て始めて成立する。ノエマ的なる身體も此根柢に由つてのみ他の物體と區別せられるのである。勿論全自然もノエシス的には身體の性格に於て了解せられなければならぬとも考へられるであらう。併しそれは身體のノエシス的性格を對象的物體の存在と區別しなければならぬといふ必要を打消すものでないことは明かである。是れ我の身體といはれるものが第一次的に身體性に於て存在するのだからである。然るに我の身體は一方に於て我を我として存在せしめる限定の根據であると共に、他方に於て我が其の限定を超えて無限の絕對的全體に歸入する媒介となるものである。行爲とは此後の歸入の動性を謂ふのであつて、それは必然に前の限定根據としての身體を働かせて絕對的全體の要求する合目的的方向へ變化を起すことを意味する。この我の限定の根據にして同時に無限の我への還元的發展の媒介であるといふ矛盾の統一が身體性なのである。我は斯かる辯證法的統一の對立契機としての個體であると同時にその對立者たる全體としての存在性を有し、單に力の消長ならぬ力源としての對立的存在者として自覺せられる。その存在者としての限定は身體性に由來するものである。若し身體性を排除するならば、力學的存在の主體は消滅して、對立する個體と全體とは存在者たることを失はなければならぬ。『生の哲學』が前述の如きロマンティクの連續觀に陷りて個體と全體との斷絕的對立存在を了解することが出來ないのは、此身體性を無視する結果に外ならない。生の外化としての表現に缺くべからざる契機として他者の存在が認められても、此他者が身體の性格に於て生の實現手段であると同時に、生を限定する根據、全體的生の否定原理であることが辯證法的に了解せられるのでなければ、個性的生の獨立存在は成立しない。『生の哲學』の實存的辯證法を缺くのは身體性の閑却に由來すると考へられる。

我々は、全體を、一つの生の可能的なる領域と見ることが出來る。それを、我々は、特に、「人間」とよぶことも出

來る。個體はそれの現實的形態であると見られる。可能的領域と現實的領域との區別は、身體性においてなされると考ふべきであらう。血族の、そして家族の、民族の哲學的意味も、身體性によつて明かにせられる。かくして、我々は、現存在における身體性をみとめることによつて、「汝」の定立の根據を得たのである。

　而して、我々は、かく見て來た結果として、社會に對して一つの見方をなすことが出來るであらう。卽ち、身體性を限定者として成立する個體が、可能的領域としての「生」に向つて、云ひかへれば「人間」に向つて、ある存在のしかたに於いて存在しようとしてゐる所の、合目的的なる變化の――運動の、辨證法的相互制約においてある姿が、社會なのである。或は血族の、或は家族の、或は民族の、そして人類の個體が可能的形態への變化において、相互制約的に關聯を形造つて居るときに、その形造られたるものが一つの社會なのである。社會と個人との關係は、可能的領域と個體との關係において、そしてそれらの結合において觀察されうるであらう(文學研究における血型學の地位)。

　右の叙述から結論し得ることは、表現作用の主體は、身體性を媒介として、社會と辨證法的相互制約においてある事である。故に、表現作用の主體が、自己の生を外化し固定せしめた文學作品は、その成立において社會に對して密接なる關係を有する。卽ち、個人と社會との辨證法的相互制約の過程の一點としてある事になる。從つて、近世文學作品は、近世における個人と近世社會との辨證法的相互制約の過程の一部を固定したものと云ふことができる。

三　諸個人の共時性の關係　われわれは前章において、個人と社會とは相互制約的存在であることをいつた。もしこのことがさうであるとすれば、生表現の主體としての個人の「生」の世界における運動の契機を問題にするには、どうしても社會を問題にしなければならぬ。これについての思索を展開せしめて見よう。

われわれはさきに、存在が存在としてあることの出來るのは、それがわれわれにあらはれて居る限りにおいてであることをいつた（「文學研究に於ける血型學の地位」參照）。社會が一つの存在として、われわれによつて語られるときに、それは如何なる存在であらうかと云ふ問題において、われわれは一つの結論に達した。卽ち、社會は、われわれによつて對象化せられる限りにおいて一つの存在ではあるけれども、それは個體を超越したところのものであつて、現存在は、身體性を媒介とすることによつて、行爲を通じてはじめてそれと交渉しうるものであつた（同前參照）。

こゝにわれわれは超越と云つたのであるが、社會が個體に對して、個體を超越するといふとき、それは如何なる意味をもつのであらうか。社會は、個體がそれの思惟においてつくり出すものではなく、一つのあたへられたるものである。そのことは存在において云はれるのと同樣である。しかし、存在に對して現存在がそれを超越するといふときは、現存在は全く存在とその領域を異にして、共通なる存在領域をもつことが出來ないのである。けれども、社會が個體を超越するといふことは、その存在領域が全然別であるのではなく、個體は社會の自然的成員であるのである。故に、この場合の超越は、あるものと共通なる領域を有するのであるが更にそれを超えて存在するといふ意味でなければならない。卽ち、「社會は諸々の個人意識を超越すると共に、個人意識に內在的である。*」

* デュルケーム著平山高次氏譯「道德的事實の決定」（岩波哲學論叢）三九頁。

かくして、個人と社會との關係は、個人が社會を形成して居ると云ふ如く見えるけれども、さうして、社會は「あらゆる個人的力の結合より成果せるもの」である如く見えるけれども、むしろ、個人が社會の自然的成員であると云はなければならないのである。*なぜなら、個體としての人間を社會から切りはなして考へることは全く不可能である

が故に、單位的たる個體の構成せるもの」が社會であるとは云ひ得ないからである。

＊　デュルケーム著平山高次氏譯「道德的事實の決定」三九頁參照。

もしさうであるとすれば、われわれの次の問題は、個人の變化と社會の變化との關係が如何樣にしてあるかと云ふことである。個人の變化とは、現存在の時間における存在形態についてである――それは勿論、それの働きにおいて云はれることではあるが。社會の變化、それは、一つの關聯としての社會の時間における存在樣式についてである。それはある意味において力學的關聯でもあるであらう。そして、それは一つの方向的又は傾向的なるものとしてわれわれによつて把握せられるものである。社會は、それにおいてある個體に於いて、「として」あらはれると同時に、個體間の關係としてわれわれにあらはれてくる。それに於いてある――成員としてある個體の力の結合せるものが社會であるにしても、社會は、現實的なる存在を通してのみ、われわれに認識されることが出來るのである。

然しながら、以上から次の如く結論することは出來ない。卽ち、社會は、個體を、何らかのしかたにおいて、通してのみ把握せられるものであるから、社會の變化を研究することは、個體の變化の研究と異るところがなく、社會の變化の研究のかはりに個體の變化の研究をなせば充分であると。社會が個體に內在的であると云ふいみを、社會それ自らが、全體として我々においてあり、社會それ自らが、我々であると云ふ意味にとつたときは、それは云ひ得るであらう。けれども社會それ自らは、個體を超越するものである。さうして、個體と共有する領域をもちながら、それを超えて在る領域をもつのであるときに、個體は社會それ自らではありえない。社會は、個體が社會の自然的成員である限りにおいて個體に內在的ではあるけれども、社會が個體を超越する限りにおいて、あくまでも、超えて在る

ものである。さうして、汝の定立の可能をわれわれはさきに論じたが（「文學研究に於ける血型學の地位」參照）、定立された如き汝としての個體の現存在がもつ態度の關係が社會であるのである。その關聯と關係なしには個體はあり能はぬのであるけれども、それは、ある時は、むしろ個體をあとに殘して變化する。そこにおいては、中心的なる關聯からひきはなされようとする位置において個體はそれ自らの位置を發見するのである。しかしながら、社會關聯の中心的なるもの、それにもまして先行的なるものから、離れてあると云ふことは、決して、社會から個體が超越してあることではない。社會は個體を超越するけれども、個體は社會を超越することが出來ない。かくして、社會の變化は、個體の變化に關係をもつものではあるが、一個體の變化において社會の變化のすべてを見ることは出來ない。

さうして、われわれに云へる事は、個體を社會の自然的成員において見、さうして、その個體の態度の變化を考へる時、少くとも Actual な事態として、その個體に表れた所のものを我々は把捉する事が出來るといふ事である。

個體は、社會の自然的成員としてある限り、社會關聯の中心的なるものと何らかの關係において立つ。卽ち、少くとも、これにおいて在るか、それの否定において在るかの關係をもつのである。われわれは、個體として、社會關聯そのものを內在的にもつのではなく、社會關聯に超越せられつゝ、それに關係するのである。然しながら、調和を求める人間は、それの自覺において、社會關聯の中心的なるものを內在せしめて立つ。中心的なるもの、それは、われわれに命令的權威であるものである。それは、われわれに迫るものである。われわれはそれを肯定と否定との對立の姿で見る。さうして、そこにわれわれの自由を凝視する。社會關聯の中心的なるものは、個體の變化における依存されるものとしての現前の事態の成員である。對してわれわれが自由ならんとする所のものなのである。中心的なるも

の、それは、時代の思潮とも名づけられうるであらう。それは、一つの關聯として我々に迫り來るものであつた。
かくしてわれわれは、個體を通して社會關聯そのものをつかむことは出來ないが、自覺的に調和に突進する個體を通して、無自覺なる個體においてよりも一層明瞭に、社會關聯の中心的なるものにふれることが出來る。しかも、社會關聯の中心的なるものは、かゝる自覺的個體にふれられることによつて、その樣式を變化してゆくのである。
個體は、現前の事態によつてその態度を變化せしめつゝ、可能的なる領域における運動をつゞけてゆくものであつた。さうして、社會關聯の中心的なるものは、かゝる自覺的調和探求者によつて變化してゆくものであつた。しかも社會關聯の中心的なるものは、社會變化の中心をなすものである。
個人の變化を依存せしめる現前の事態の中に、社會關聯の中心的なるものがあるのであり、さうして社會は、個人の變化の關聯的なるものに依存して變化してゆくものであると云ひうる。
こゝに、近世文學の研究は、個人變化の依存する現前の事態の考察を含まなくてはならぬ。現前の事態のうち、特に、一つの文學作品の生產者に對して、直接的な制約又は影響をもつものは、共時的生存者の生活である。近世文學の研究は、その問題の一つを、思潮の傾向におくことによつて、われわれにとつて意義ある歷史的の研究となり、文學新生の現象の研究ともなりうるものである。こゝに、近世における共時的なる相互制約の考察と、その姿の傾向とが問題とされる理由がある。いま、文學史上における實例として、共時的相互制約傾向を示せる圖表をあげよう。これは、恩師垣內松三先生が、かつて文學史の演習において示された圖表を摸倣せるものの一部である。

著名作家在世年間

紀元二三〇〇
二三五〇
二四〇〇
二四五〇
二五〇〇
二五五〇
二五九〇
石
左衛門
年山
六
雪
角
自笑
海音
鬼貫
來滿
貞柳
鳩巣
徂徠
出雲
在
京山
梅室
馬琴
四世川柳
鴬鳳
景樹
種彥
高尙
山陽
良寛
一九
雅望
南北
一茶
南畝
三馬
京傳
塙保己一
春海
秋成
千蔭
久老
橘洲
蘆庵
宣長
川柳
蓼太
也有
蕪村
千代
眞淵
源内
成章
言道
曙覽
廣道
蓮月
知紀
默阿彌
敦子
外山正一
一葉
子規
樗牛
紅葉
直文
二葉亭
東圃
啄木
上田敏
漱石
鷗外
桂月
鳴雪
芳賀矢一
赤彥
蘆花
小山内薫
龍之助
花袋
（大槻文彥）
菊池
有三
白秋
茂吉
盧子
藤村
信綱
晩翠
露伴
蘇峯
逍遙

この圖表を熟視することによつて、文學史における「傾向」の概念が明瞭に意識される。從つて、時期區分の根據の反省がこゝに深まつてくる。垣内先生は「文學新生の研究」の中でこれらのことに關して、次の如く述べられてゐる。

その不合理なる無意識的又は意識的無力から脱して國文學史の史的展開の研究を整序するためには、時代區分の基礎概念を明かにすることに依つて、或は却つて文化史的・藝術史研究との新なる交渉が再吟味される必要を生ずるのではないかと考へる。そしてその問題の解明に當つて先づ注意を要することは、一はそれ等が技藝的にその顯現の上に於ける異質的條件のあることを明瞭にすることゝ、又一つは一世代を前・中・後期として時間的に區分する習慣を反省して、一世代層の空間的領域の中に漂ふ同時的微妙な一單位として、文學史展開の中に世代層を認めることによりて、世代層の中に於ける創造的個性を中核とする文學史展開の機構を明かにすることであるかと考へる。かくして一世代層の中心的定位に立つ創造的個性と、次の一世代層の中心的定位に立つ創造的個性とを貫く連續性を辿ることに依りて、時代成層の裡に常に新しきものが生きかへり生きかへりする道程を明かにすることができるのであらう（垣内松三先生著「文學新生の研究」一五五頁―一五六頁）。

四　文學精神の展開

文學精神とは、文學作品における原現象をさす。近世における文學作品は、それらのもつ精神に關して、歴史的に、さうして、共時的に、如何樣にあるのであらうか。

近世といふ一つの限られたる時間内にある文學作品が、相互的に獨立し、生産された時を異にして、しかも近世においてそこにあたへられるとき、われわれは、それを何らかの仕方で學的思惟の對象としなければならない。このことについて、われわれは、それを一つの聯關的なるものと見てきたのである。しかし、たゞ單に、聯關的なるものであるといふことだけでは、相互の關係は明かにせられたものとはいへない。これを、より明かにする道が更に追求せ

られなければならぬ。

そのことの第一の問として、文學作品は共時的に他と關係をもつかと云ふことであり、第二の問は、史的に聯關をもつかといふことである。第一の問に對する解答は、既にわれわれは、前章において述べた。第二の問に對する答がこゝに殘されてゐるのである。

この問は、文學作品は、それより以前に生産されたる作品に對して關係があるかといふことであり、更に云へば、それより以前に生産された文學作品の精神に關係があるかといふことになる。このことは、文學精神の問題になり、作品の原現象がおいてあつたところの人間の問題になるのであつて、この關係は、もしありとすれば、作品を通してのみでなく、人間活動一般を通してであることが考へられる。たゞ、文學作品の原現象の比較對比は、それらの作品の形態的分類の作業となることは出來ても、史的聯關の究明としては獨斷的であることになる。そこからは、一つの文學作品の生誕の理由、或は、それの歷史の上における眞の位置はわからぬものとなる。故に、この問題は、人間活動一般を通して究明せられなければならない。

かくの如くして、文學作品の時間的相互關係を人間活動一般の上にうつして考へて見るとき、生表現の固定化せられたるものとしての文學作品の史的相互關係は、表現せられたる「生」のある場所である人間の史的相互關係に移調せられる。

われわれは、こゝに、人間新生の概念を想起する必要がある。人間は、自己の根本性格として、運動性をもつてゐる。それは、人間の存在の仕方に根據をもつてゐるものであつた(山內得立博士著「存在の現象形態」參照)。いひかへれば

人間は、人間の動きうる一つの世界において、靜止し盡すことが出來ないものであつた。そこに人間新生の現象があるのであつて、自覺を中心として、一つの態度から、他の態度へうつりゆくのである。文學が、人間精神の所產であるとすれば、かくの如き人間の產出したる文學は、また新生をもつものでなければならぬ。人間が新生において、史的展開をつゞけるものとするならば、文學も亦同じ現象をもつ筈である。

さうであるとすれば、文學作品の史的相互關係は、文學新生の現象のもとに考察されることになるのであるから、從つて、人間新生が何に依存して、如何やうにあるものであるかを明かにすることによつて、われわれの中心的なる問に解答することが出來ることになる。われわれは、新生の依存するものについて考へて見よう。

可能的なる領域としての「生」における人間の運動の方向は「調和」に向へる方向である。人間が自己の不調和にたへかねて一つの運動をなすことは、自己回復の運動である。ある場合には、人間への直視にまでなり行くであらう。かくしてそれは、人間回復の運動でもありうる。

現存在が、態度決定をなすときに依存する所の、現前（actual）の事態とは何であらうか。それについて直ちに云へることは、現存在はノエマ的我に働きかけることにおいて、それについて語られるものであり、現存在は身體性を媒介として社會との交涉をもつものであり、しかも社會は、われわれから超越してあるもので、現前の事態は、社會或は自然的存在が、現存在との關係において、體制的過程として力學的に分凝することであると云ふことである。かかる場合に、現前の事態は、われわれの現存在が、それにあらはれるものと關係してゐるその總體の場を示すのであつて、現存在との關係において、自然的 Milieu にあつて、社會的なるものに對するときにあるのである。所謂自

然的なる環境も、遺傳的なる特質も、さうして社會的なる環境も、すべて現存在との關係のすがたにおいて、現前の事態において在るのである。もし、新生が、かゝるものに依存して、その力源を人間の存在の仕方からくる根本性格において見らるものであるとすれば、次に問はれることは、その新生的展開は如何にあるかといふことである。

共時的なる關係は、われわれがさきに見た如くに、相互制約的である。時間的に、史的に見た場合には、新生現象を中心として展開する。新生は、あるものに對しての新生である。あるものは、多く、新生現象をもつものより以前にあつたところの事象である。新生においては、それは、前思想であるといへる。前思想から去つて、新しき思想に調和を求めようとするのである。その進み方は、一時代における主潮と、それに對立する思潮との上に立つものでなければならぬ。一言にして云へば辨證法的展開をなすのである。

人間の思想生活の展開が辨證法以外でありえないとするとき、文學精神の展開は同じやうな展開をなすものであると云はなければならない。

横の關係において相互制約的に、縱の關係において辨證法的に展開する人間の思想は、ある時には、横の關係を密接に保ち、同一の方向に向ひつゝ、縱の關係を展開させることが考へられる。卽ち共時的精神の同一傾向化の現象である。かゝる時に生產される文學作品は、明かに、傾向的なるものでなければならない。この時は、文學の主義(イズム)の生れ出るときであり、文學の主潮が極めて明瞭に看取されるときである。

かくてわれわれは、近世の文學を問題にするにあたつて、文學精神の展開の點から考察することを忘れてはならないことを知る。

三　技術の規定

一　近世文學圖表

作品	生年	歿年	社會事象	外國文學
【明治元年】（三五二八・一八六八）				
種彦　白縫物語 魯文　假名讀八犬傳 諭吉　訓蒙窮理圖解	美妙 透谷 蘆花 魯庵 麗水	靜軒 曙覽 言道	中外新聞出づ 江湖新聞出づ 藻鹽草發刊 太政官日誌創刊	ゴオリキイ（露）生る ピサレフ（露）生る ロスタン（佛）生る
			五ケ條の御誓文發布 江戸を東京と改稱 明治と改元 東京奠都	
【明治二年】（三五二九・一八六九）				
諭吉　世界國盡 諭吉　西洋事情第二篇	眉山 水蔭 桂月 青々 千亦 雨江 月郊 孤蝶		新聞紙印行條令公布 出版條令制定 宮中御歌會復興せらる	トルストイ（露）「戰爭と平和」を完成す アアサア・シモンズ（英）生る ラマルチイヌ（佛）死す サント・ブウブ（佛）死す フロオベル（佛）の「感情教育」出づ イブセン（瑞）の「青年結社」出づ
			府縣に小學校設置 版籍奉還 昌平學校を大學校と改む	
【明治三年】（三五三〇・一八七〇）				
魯文　西洋道中膝栗毛第一篇	乙羽 小波		歌御會始復興	クウプリン（露）生る 小デュウマ（佛）死す
			中學校開設 徵兵規則頒布	

作品	作家	新聞・雑誌	事項	外國
弘之　眞政大意 正直譯　西國立志編	臨風			ジュウル・ゴンクウル(佛)死す ディッケンス(英)死す ゾラ(佛)「ルウゴン・マッカアル小説叢」を公にし始む
【明治四年】(二五三一・一八七一)				
魯文　安愚樂鍋 慶賀　釋迦八相倭文庫	樗牛 抱月 獨步 晩翠 古白 花袋 秋聲 文雄	日刊横濱毎日新聞發刊 聖書の飜譯・出版	留學女生五名米國に渡る 東京大阪間郵便設置 廢藩置縣 散髪廢刀許可 岩倉具視等歐米派遣	アンドレエエフ(露)生る スキンバアン(英)の「日の出前の歌」出づ シング(英)生る
【明治五年】(二五三二・一八七二)				
魯文　胡瓜遣 諭吉　學問のすゝめ初編 諭吉　童蒙教草 諭吉　かたわ娘	藤村 一葉 綺堂 碧梧桐 信綱 洒竹	東京日日新聞發刊 郵便報知新聞發刊 正直同人社創設	女學校設置 東京に圖書館開設 學制頒布 太陽暦採用 横濱に最初のキリスト教會堂が建つ	ニイチェ(獨)の「悲劇の出生」出づ グリルパルツェル(獨)死す ゴオチェ(佛)死す ブランデス(丁)「十九世紀文學の主潮」を公にし始む
【明治六年】(二五三三・一八七三)				
貞頼　横文字百人一首 温譯　通俗伊蘇普物語	泡鳴 梁川 知紀	東京假名書新聞發刊	東京外國語學校設置せらる	マンツォニ(伊)死す リットン(英)死す

作品	作家		文化事項	社會事項	海外
諭吉 文字の教へ 諭吉 暗誦十詞 祐一 文明開化	鐵幹 鏡花 四方太		明六社設立	徴兵令公布 征韓論破れ隆盛等辭職	トルストイ(露)「アンナ・カレニナ」の稿を起す
【明治七年】(二五三四・一八七四)					
魯文 讃美歌 爲治 佐賀電信錄 誠一 開化問答 柳北 東京新繁昌記 柳北 柳橋新誌第二編 柳北 京猫一斑	虚子 髀若 小劍 天來 敏 猪之吉 霞村 花外		歌御會始に國民一般の詠進許可 明六雜誌創刊 朝野新聞發刊 讀賣新聞發刊 *狂詩・ローマ字論・開化文學隆盛	民選議院設立の建議起る 佐賀の亂 臺灣征伐	ホフマンスタアル(墺)生る ベアリング(英)生る チェスタアトン(英)生る
【明治八年】(二五三五・一八七五)					
春輔 復古夢物語 春輔 近世櫻田紀聞 秀樹譯 桑夜物語 弘之 國體新論	風葉 米次郎 躬治 紫紅 鼠骨	蓮月	洋々社談發刊 新島襄京都に同志社を起す 平假名繪入新聞發刊 假名讀新聞發刊 明六雜誌廢刊	大阪會議 *民選議院開設の議論多し	トルストイ(露)の「アンナ・カレニナ」出づ ドストイエフスキイ(露)の「青年」出づ アンデルセン(丁)死す コロオ(佛・畫家)死す
【明治九年】(二五三六・一八七六)					
橋東世子編 明治歌集 春輔 春雨文庫	有明 秋江		東京新誌創刊 同人社文學雜誌創	熊本バンド成る (キリスト教弘布	ジオルジ・サンド(佛)死す ツルゲエネフ(露)の「處女地」出づ

年	作品	生	歿	文壇事項	一般事項	外國文學
	香雪　金之助の話（綴入新聞）	天溪 柴舟 赤彥 薫園 水穗		刊	結社） 熊本・萩の亂 美術學校設立	
【明治十年】（二五三七・一八七七）	舊譯聖書詩篇 山田謙益編　明治現存三十六歌撰 仙果　鹿兒島戰記 仙果　櫻田實記 孝平譯　楊牙兒奇談（花月新誌） 卯吉　日本開化小史 服部德譯　民約論	泣菫 吉藏 瓊音 空穗 清白		花月新紙創刊 團々珍聞・頴才新誌創刊 ＊西南役を主題とする小說續出す	西南の役 大學校を東京大學と改稱	ゾラ（佛）「ルウゴン・マッカアル小說叢書の中「酒屋」出で名聲あがる ドオデエ（佛）の「ジャック」出づ イブセン（那）の「社會の柱」出づ ビョルンソン（那）の「國王」出づ トルストイ（露）此年より宗教的に傾く
【明治十一年】（二五三八・一八七八）	大久保忠保編　開化新題歌集初編 彥作　鳥追お松海上新話 勘造　夜嵐阿衣花廼仇夢 忠之助　八十日間世界一週 諭吉　通俗民權論	武郎 靑果 晶子 龜雄 夜雨 冬彥 東洋城	磐溪 爲山	新富座開場 ＊この頃より毒婦小說多し	大久保利通暗殺 ＊自由民權論唱導さる	ツルゲエネフ（露）歸國してトルストイ其他と交遊を新にす アルツィバアセフ（露）生る ブライヤント（米）生る
【明治十二年】（二五三九・一八七九）						

魯文　高橋於傳夜叉譚 起泉　島田一郎梅雨日記 春松譯　哲烈禍福譚 默阿彌　霜夜鐘十字辻筮 （歌舞伎新報） 大麓　修辭及華文 純一郎譯　花柳春話（飜譯小說の最初）	白鳥 節 荷風 橙里 登美子 日斗 亞浪	由清	大阪朝日新聞發刊 歌舞伎新報創刊	學士會院設立 教育令公布 國會開設建白	イプセン(那)の「人形の家」出づ ストリンドベルヒ(瑞)の「赤い室」出づ （瑞典における最初の自然主義作品） メレディス(英)の「エゴイスト」出づ
【明治十三年】（二五四〇・一八八〇）					
容盛編　類題明治新和歌集 弘綱編　明治開化歌集 忠保編　開化新題歌集第二篇 欽堂　情海波瀾 起泉　澤村田之助曙草紙 逍遙譯　春風情話 勤譯　龍動鬼談	白村 梅溪	芳樹 井玉 季知	東京大學第一回卒業生を出す 六合雜誌創刊	集會條令公布 板垣退助自由黨組織	フロオベル(佛)死す エリオット(英)死す モオパスサン(佛)の「脂肪の塊」出づ ゾラ(佛)の「實驗小說論」出づ 「ルウゴン・マッカアル小說叢書」の中の「ナナ」出づ（ゾラ） ドストイエフスキイ(露)の「カラマーゾフ兄弟」出づ
【明治十四年】（二五四一・一八八一）					
小學唱歌集第一集 弘綱編　開化新題和歌梯 默阿彌　天衣紛上野初花 默阿彌　島衛月白浪 兆民　政理叢談	草平 薰 葉舟 乙字 純 英子	式部 忠秋	東洋自由新聞發刊 東洋學藝雜誌發刊	國會開設の大詔渙發せらる 自由黨結黨	アナトオル・フランス(佛)の「シルヴェスト・ボナアルの罪」出づ イプセン(那)の「幽靈」出づ ドストイエフスキイ(露)死す ヂスレリイ(英)死す カアライル(英)死す

【明治十五年】（三五四二・一八八二）

作品	生	歿	文化	社會	海外
正一・良吉・哲次郎 新體詩鈔 節編 新體詩歌 忠之助譯 虚無黨退治奇談 夢柳譯 自由之凱歌 百衞譯 西洋血潮小暴風 フェノロサ 美術眞説 弘之 人權新説 兆民 民約譯解	未明 三重吉 長江 生馬 青峯 茂吉 順 比露思	千浪 松根	時事新報發刊 自由新聞發刊 第一回繪畫共進會開催せらる	改進黨組織 板垣退助遭難 東洋社會黨組織 東京專門學校創立 福島事件	ニイチェ(獨)の「歡びの智惠」出づ ダアキン(英)死す アウエルバッハ(獨)死す トルストイ(露)の「我が懺悔」出づ ロセッチ(英)死す エマアスン(米)死す ロングフェロオ(米)死す

【明治十六年】（三五四三・一八八三）

作品	生	歿	文化	社會	海外
平井天滿編 東京大家十四家集 龍溪 經國美談 南翠 千代田刄傷（開化新聞） 紫瀾 汗血千里駒 應賀 明良二葉草 勤譯 人肉質入裁判 兆民譯 維氏美學 辰猪 天賦人權論 逍遙譯 自由太刀餘波鋭鋒	直哉 雨雀 御風 光太郎 八千代 臼川 甲之 滉 東明 蕭々 夕暮	具視	*この頃より政治小說さかんなり 官報發刊	板垣退助歸朝	ワグネル(獨)死す マネエ(佛)死す ツルゲエネフ(露)死す モオパスサン(佛)の「女の一生」出づ スティブンソン(英)の「寶島」「新アラビア夜話」出づ ビョルンソン(那)の「手套」出づ

【明治十七年】（三五四四・一八八四）

忠保編 開化新題歌集第三編
香水 世路日記
誠一譯 春窓綺話
鳴鶴 文明東漸史
直彥譯 春鶯囀
圓朝 牡丹燈籠

井泉水
星湖
幕島
豐隆
仲
胡夷

仙果
柳北
容盛

角藤常憲壯士芝居を初む
かなのくわい創立
「都」の前身「今日新聞」創刊

加波山事件
自由黨解黨
京城の變

ホイズマンス（佛）の「ア・ルブウル」出づ
イプセン（那）の「鴨」出づ

【明治十八年】（二五四五・一八八五）

半月 十二の石塚
豐島有常編 明治現存三十六歌撰
胤平 東京大家十四家集評論
御巫清直 東京大家十四家集評論再辨
種彥 黑白染分轡
逍遙 當世書生氣質
柴四郎 佳人の奇遇
逍遙譯 慨世士傳
夢柳譯 鬼啾々
茂吉・屑夫譯 繫思談
默阿彌 水天宮利生深川
逍遙 小說神髓上卷
長雄 文學論

實篤
白秋
杢太郎
牧水
哀果
秀雄
萬里
介春

種彥

ローマ字會起る
硯友社結成
女學雜誌創刊
都新聞社設立
雪嶺等政敎社を結ぶ

內閣設置

ユウゴオ（佛）死す
モオパスサン（佛）の「ベル・アミ」出づ
ニイチエ（獨）の「ツァラトウストラ」出づ
ハウプトマン（獨）の「日の出前」出づ
トルストイ（露）の「我が宗敎」出づ

【明治十九年】（二五四六・一八八六）

美妙編　新體詞選
逍遙　妹と背鏡
逍遙　京わらんべ
逍遙　内地雜居未來の夢
篁村　當世商人氣質
鐵腸　雪中梅
誠一　二十三年國會未來記
渡邊治譯　政海の情波
正一　演劇改良論私考
謙澄　演劇改良意見（時事新報その他）
謙澄　日本文章論
美妙　風琴調一節
蘇峰　將來の日本

潤一郎
利玄
啄木
勇
明子
彌生子
嘉香
千樫
葭子

反省雜誌發刊
大八洲學會雜誌創刊
演劇改良會設立
やまと新聞發刊
東洋學會雜誌創刊
*演劇改良論起る

帝國大學令發布
明治學院創立

ニイチェ（獨）の「善惡の彼岸」出づ
イプセン（那）の「ロスメルス・ホルム」出づ
トルストイ（露）の「闇の力」出づ
オストロフスキイ（露）死す

【明治二十年】（二五四七・一八八七）

義象・由之　國學和歌改良論
高世　歌學新論
八千穗　國學和歌改良不可論
鐵腸　花間鶯
天円　屑屋の籠
南翠　新粧の佳人
四迷　浮雲
圓朝　月謠荻江一節
圓朝　薔薇
蘇峰　近來流行の政治小説

幹彦
有三
善藏
良平
瀧太郎

直助

*和歌改良論起る
蘇峰の平民主義一世を風靡す
國民之友創刊
哲學雜誌創刊
以良都女創刊
出版月評創刊

鹿鳴館假裝舞踏會
學位令公布
音樂學校開設
保安條令公布

ズウデルマン（獨）の「フラウ・ゾルゲ」出づ
マラルメ（佛）の「全集」出づ
ストリンドベルク（瑞）の「父親」出づ

を評す
谷口政徳　演劇史
茂樹　日本道徳論
蘇峰　新日本の青年

【明治二十一年】（二五四八・一八八八）

直文　孝女白菊の歌
　新撰さんびか
建樹　明治唱歌
甕臣　言文一致歌（東洋學會雜誌）
弘綱　長歌改良論（筆の花）
思軒　和歌を論ず（國民之友）
南翠　綠簑談
花圃　藪の鶯
美妙　夏木立
櫻癡　もしや草紙
謙澄譯　谷間の姫百合
四迷譯　あひびき（國民之友）
四迷譯　めぐりあひ（都の花）
涙香譯　人耶鬼耶
默阿彌　大杯觴酒戰强者
默阿彌　月梅薫朧夜
蘇峰　インスピイレエショ

弴　善郎　湖太郎　元麿　柳虹　次郎　民藏　篤二郎　莫哀　阿佐緒

芳崖　辰猪　行誡　禮嚴

＊このころ文學雜誌多く出づ
＊國粹主義運動漸く盛となる
政教社結成・日本人創刊
我樂多文庫創刊
宮中御歌所設置
めざまし新聞東京朝日と改稱
都の花創刊
少年園創刊
小說萃錦創刊
大阪每日新聞發刊
大和錦創刊

弘之・鱗祥等初めて博士號を受く
美術學校設立
高島炭礦事件

イプセン（那）の「海の夫人」出づ
ニイチェ（獨）の「權力意志」及び「この人を見よ」出づ
ブランデス（丁）の「露西亞印象記」出づ
ガルシン（露）死す
キップリング（英）の「プレエン・テェルス」及び「三兵士」出づ

ン(國民之友) 雪嶺　薩長の前途を占ふ(日本) 建樹　いさり火 默阿彌　盲長屋梅加賀鳶 默阿彌　四千雨小判梅葉 學海・寶岑　文覺上人勸進帳				

【明治二十二年】(二五四九・一八八九)

作品	人	訃	文壇事項	社會事項	海外事項
清風　新體詩批評(國民之友) 鷗外・直文 通泰・瓚次郎 君子譯　}　於母影(國民之友) 胤平　長歌改良論辨駁(筆の花) 由之　和歌及新體詩を論ず(東洋學會雜誌) 美妙　胡蝶(國民之友) 逍遙　細君(國民之友) 嵯峨のや　初戀(都の花) 紅葉　色懺悔 露伴　一刹那(文庫) 篁村　むら竹 嵯峨のや　野末の菊(都の花) 美妙　いちご姫(都の花)	犀星 幸次郎 萬太郎 健 露風 寛 眞澄 英一 朽葉 憲吉	祐命	＊活歴物全盛 新小說創刊 新聞「日本」發刊 我樂多文庫を文庫と改題 新著百種刊行 歌舞伎座落成 しがらみ草紙創刊 小文學創刊 國華創刊 大和錦廢刊 演藝協會設立せらる	※條約改正反對の聲喧し 憲法發布 森有禮刺さる 帝室博物館開設 大隈重信傷けらる 東京專門學校文學科創立せらる	ハウプトマン(獨)の「日の出前」上場、獨逸劇壇に一新紀元を劃す ズウデルマン(獨)の「猫橋」出づ ホルツ及びシュラアフ(獨)合作の「父ハムレット」出づ メエテルリンク(白)の「マレイヌ姫」出づ トルストイ(露)の「クロイツェル・ソナタ」出づ ダヌンツィオ(伊)の「快樂兒」出づ シュレエ(英)死す ベザネクトソン(瑞)死す ブラウニング(英)死す マシウ・アアノルド(英)死す

作品	生	歿	文壇	社會	外國
嵯峨のや　[illegible](國民之友) 露伴　風流佛 柳浪　殘菊 思軒譯　探偵ユーベル(國民之友) 思軒譯　[illegible]使者(國民之友) 半峰　美辭學 綠雨　小說八宗(讀賣新聞) 鷗外　演劇改良論者の偏見に驚く(しがらみ草紙) 鷗外　今の諸家の小說論を讀みて(しがらみ草紙) 鷗外　再び劇を論じて世の評家に答ふ(しがらみ草紙) 露伴　露團々(都の花) 四迷　浮雲續編(都の花) 眉山　黄菊白菊					
【明治二十三年】(二五五〇・一八九〇)					
美妙　醉沈香(國民之友) 美妙　日本韻文論(國民之友) 操山　詩歌論一班(日本評論)	與志雄 耿之助 碎花 省吾 惣之助	冬道 讓	日本の文華創刊(一月)同廢刊(十二月) 國民新聞發刊 日本文學全書刊行	衆議院議員選擧施行 國學院創立 教育勅語發布 帝國議會召集	アナトオル・フランス(佛)の「タイス」出づ メエテルリンク(白)の「盲目」出づ ハウプトマン(獨)の「平和祭」出づ ズウデルマン(獨)の「名譽」出づ

【明治二十四年】（二五五一・一八九一）

弘綱撰　千代田歌集第一・二編
露伴　緣外緣（日本之文華）
鷗外　舞姬（國民之友）
紅葉　新色懺悔（讀賣新聞）
紅葉　おぼろ舟（讀賣新聞）
龍溪　浮城物語
露伴　葉末集
湖處子　歸省
紅葉　伽羅枕（讀賣新聞）
露伴　一口劍（國民之友）
鷗外　うたかたの記（しがらみ草紙）
綠雨　犬蓼
鷗外　うもれ木（しがらみ草紙）
綠雨　初學小說心得（讀賣新聞）
綠雨　小說評註問答（讀賣新聞）
鷗外　外山正一氏の畫論を駁す（しがらみ草紙）
參次・鎌三郎　日本文學史
逍遙　小說三派（讀賣新聞）

白葉
邦子

江戸紫創刊
日本歌學全書刊行
聚芳十種刊行
＊時事政治小說漸く跡を絕つ

シェンキイウィッチ（波）の「火と劍」出づ
フォンタアネ（獨）死す
ゴットフリイド・ケルレル（瑞）死す
ヘルマンバアル（墺）維也納に來りて象徵主義を宣傳す

梅花　新體梅花詩集
透谷　蓬萊曲
鷗外　美妙齋主人が韻文論（しがらみ草紙）
美妙　青年唱歌集
秋香　新體歌がたり
直文　新撰歌典
水蔭　花守（都の花）
小波　こがね丸（少年文學）
鷗外　文づかひ
露伴　風流艶魔傳（しがらみ草紙）
浪六　三日月
抱一庵　闇中政治家
綠雨　かくれんぼ
露伴　いさなとり（國會）
紅葉　二人女房（都の花）
露伴　風流佛（國民之友）
露伴　新葉末集
露伴　五重塔（國會）
綠雨　油地獄
紅葉　夏小袖（讀賣新聞）
露伴　血紅星（自由新聞）
露伴　辻淨瑠璃（國會）
鷗外譯　水沫集
櫻癡　春日局
操山　悲哀の快感（國民之

正雄
浩二
和郎
文明
藻風

弘綱
敬字
三溪
弘之
梅花
實美

文學世界創刊
なにはがた創刊
史海創刊
川上音次郎新劇
板垣退助を演ず
葦分船創刊
千紫萬紅創刊
早稻田文學創刊
＊此頃文學評論盛なり

板垣退助等自由黨脱退
露國皇太子大津事件
衆議院解散

ハウプトマン（獨）の「淋しき人々」出づ
ズウデルマン（獨）の「ソドム」の最後出づ
ハアディ（英）の「テス」出づ
ゴンチャロフ（露）死す

友）
逍遙　春のや漫筆
鷗外　逍遙子の詩評語（しがらみ草紙）
逍遙　沒理想論（早稻田文學）
鷗外　早稻田文學の沒理想（しがらみ草紙）
雪嶺　眞善美日本人
雪嶺　僞醜惡日本人
櫻癡　幕府衰亡論（國民之友）

【明治二十五年】（二五五二・一八九二）

操山　詩歌論（青年文學）
信綱　歌の栞
操山　香川景樹翁の歌論（國民之友）
紅葉　三人妻（讀賣新聞）
露伴　二日ものがたり（國會）
きみ子譯　浴泉記（しがらみ草紙）
鷗外譯　即興詩人（しがらみ草紙）
魯庵譯　罪と罰
魯庵　文學一斑

八十
春月
春夫
龍之介
成吉
大學
陽吉

歌學創刊
歌林創刊
明治の歌創刊
子規新聞「日本」に俳句を初む
萬朝報發刊
小櫻緘創刊
＊探偵小說流行の兆あり
＊井上哲次郎と高橋五郎等との間に宗教・教育衝突の論

衆議院總選擧

モオパスサン（佛）發狂す
ハウプトマン（獨）の「シレシヤの織匠」出づ
イプセン（那）の「建築師」出づ
ゴオリキイ（露）の處女作出づ
エチガライ（西）の「マリアナ」及び「ドンヂャンの子」出づ
ダヌンツィオ（伊）の「犠牲」出づ
オスカア・ワイルド（英）の「サロメ」出づ
テニスン（英）死す
ホイットマン（米）死す
ルナン（佛）死す

雪嶺　我觀小景

【明治二十六年】（二五五三・一八九三）

半月　天地初發（國民之友）
操山　國詩の形式に就いて（早稻田文學）
湖處子　湖處子詩集
胤平　歌學會歌範評論
胤平　大八洲學會詠歌添正論
子規　獺祭書屋俳話（前年新聞日本に連載せしもの）
子規　芭蕉雜談（新聞日本）
露伴　さゝ舟・風流微塵藏第一（國會）
眉山　賤機（讀賣新聞）
紅葉　心の闇（讀賣新聞）
操山　讀我觀小景（六合雜誌）
透谷　人生に相渉るとは何の謂ぞ（文學界）
透谷　內部生命論（文學界）
逍遙　吾國の史劇（早稻田文學）
蘇峰　靜思餘錄
逍遙　小羊漫言

正夫
宗治
愼
次郎

默阿彌

＊愛山・透谷の間に文學の本質に關する論爭あり
＊史傳・歷史小說の流行
＊歌壇・俳壇革新の聲起る
文學界創刊
三籟創刊
直文淺香社成立
都の花廢刊
二六新報發刊

モオパスサン（佛）自殺す
ゾラ（佛）「ルウゴン・マッカアル小說叢書」を完了す
テエヌ（佛）死す
フランス（佛）の（紅百合）出づ
ハウプトマン（獨）の「ハンネレの昇天」出づ
ズウデルマン（獨）の「故鄕」出づ
ストリンドベルク（瑞）の「痴人の懺悔」出づ
イブセン（那）の「皇帝とガラリヤ人」出づ
シュニッツレル（墺）の「アナトオル」出づ
ショオ（英）の「ワオオレン夫人の職業」出づ

三叉　マコウレー
湖處子　ウオルズウオルス
伊作　ゲーテ
蘇峰　吉田松陰

【明治二十七年】（二五五四・一八九四）

建樹譯　歐米名家詩集
雨江譯　湖上の美人
信綱編　明治歌集
桀　くちなしの花
鐵幹　亡國の音（二六新報）
弦齋　櫻の御所（都新聞）
樗牛　瀧口入道（讀賣新聞）
學海　吉野拾遺名歌譽
逍遙　桐一葉（早稻田文學）
魯庵　文學者となる法
透谷　エマルソン
透谷集
信綱編　征塵歌集
紅葉　心の闇

政二郎
茂索

魯文
透谷
幹文

小日本發刊
東京文學創刊
しがらみ草紙廢刊
酒竹筑波會成立
＊ケーベル博士大學にて哲學を講義

日清開戰

ル・コンド・リイル（佛）死す
マラルメ（佛）英國のオックスフォード大學及びケンブリッヂ大學に於て「文字と音樂」なる講演を爲す
ダンヌンツィオ（伊）の「死の勝利」出づ
メエテルリンク（白）の「タンタジイルの死」出づ
ヴェデキンド（獨）の「春のめざめ」出づ
シュニッツレル（墺）の「死」出づ
イブセン（那）の「小さきアイヨルフ」出づ
キップリング（英）の「ジャングル・ブック」出づ
スティブンソン（英）死す
ウオルタア・ペエタア死す

【明治二十八年】（二五五五・一八九五）

雨江　深山の美人（帝國文學）
正一　可兒大尉（帝國文學）

清矩
穀
新二

帝國文學創刊
太陽創刊
文藝倶樂部創刊

日清媾和
遼東還付

小デュウマ（佛）死す
モンテエヌ（佛）死す
ホイズマンス（佛）の「途上」出づ

羽衣　小夜砧（帝國文學）
正一・秋香
萬年・正臣　新體詩歌集
樗牛　我邦將來の詩形と外山博士の新體詩（帝國文學）
抱月　新體詩の形について（早稲田文學）
子規　俳諧大要（新聞日本）
大淵淺編　討清歌集
建樹　山したみづ
一葉　たけくらべ（文學界）
紅葉　不言不語（讀賣新聞）
露伴　新浦島（國會）
眉山　大盃（文藝俱樂部）
眉山　書記官（太陽）
柳浪　變目傳（讀賣新聞）
宙外　ありのすさび（早稲田文學）
鏡花　夜行巡査（文藝俱樂部）
美妙　阿千代（文藝俱樂部）
天外　改良若殿（讀賣新聞）
柳浪　黑蜴蜓（文藝俱樂部）
鏡花　外科室（文藝俱樂部）
綠雨　門三味線（讀賣新聞）
小波　すみれ日記（國民之友）

青年文創刊
小説百家選廢刊
少年園文庫と改題
竹冷秋聲會設立
＊觀念小説・悲慘小説多し
＊閨秀小説振ふ
＊子規の日本派盛なり
＊この年より文學雜誌叢出

ゴオリキイ（露）の「チェルカッシュ」出づ
メエテルリンク（白）の「貧者の寶」出づ
オスカア・ワイルド（英）男色事件によりて獄に繋がる

眉山 うらおもて（國民之友）
一葉 にごり江（文藝俱樂部）
水蔭 女房殺し（文藝俱樂部）
眉山 暗潮（讀賣新聞）
一葉 十三夜（文藝俱樂部）
眉山 松風

【明治二十九年】（二五五六・一八九六）

巽軒 比沼山の歌（帝國文學）
鐵幹 東西南北
藤村 一葉舟（文學界）
雨江・桂月・羽衣 花紅葉
紅葉 多情多恨（讀賣新聞）
一葉 たけくらべ（文藝俱樂部）
柳浪 今戸心中（文藝俱樂部）
柳浪 信濃屋（[illegible]まくら）
柳浪 河内屋（新小說）
風葉 寢白粉（文藝俱樂部）
宙外 闇のうつゝ（新小說）
鏡花 照葉狂言（讀賣新聞）
思軒譯 十五少年（少年世界）

一葉
賤子
鐵腸

めさまし草創刊
新小說復刊
新聲創刊
世界之日本創刊
大和琴創刊
いさゝ川創刊
俳諧秋の聲創刊
江湖文學創刊
＊世界主義提唱

音樂學校第一回演奏會

エドモン・ゴンクウル（英）死す
ヹルレエヌ（佛）死す
プレボオ（佛）の「情人の告白」出づ
メエテルリンク（白）の「アグラヹヌとセリセツト」出づ
ダンヌンツィオ（伊）の「巖上の處女」出づ
ハウプトマン（獨）の「沈鐘」出づ
シェンキウィッチ（波）の「何處へ行く」出づ
ミレエ（英）死す

界）
四迷譯　片戀
逍遙　牧の方（早稻田文學）
逍遙　桐一葉
樗牛　情劇は果して夢幻劇なるか（太陽）
逍遙　文學その折々
鷗外　月ぐさ

【明治三十年】（二五五七・一八九七）

鐵幹　天地玄黃
信綱　少年歌話
謙澄　國歌新論
無名氏　代々の面影（第一集）
嵯峨のや・獨步・花袋・國男・玉茗・湖處子　抒情詩
新詩會編　うの花
晩翠　破鐘の響（帝國文學）
天遊・天來　松蟲鈴蟲
鑑三譯　愛吟
藤村　若菜集
建樹　雲月花
謙澄　國家新論（讀賣新聞紙上における鐵幹との論爭をまとめたる

義三郎
古實

思軒
周

＊ホトトギス創刊
新著月刊創刊
新作文庫創刊
日本主義創刊
明治小説文庫創刊
俳諧文庫刊行
＊日本主義隆盛
＊社會主義思潮發生
＊新詩境確立

金本位制施行
古社寺保存法公布
京都帝國大學開設
社會問題研究會結成

ドオデエ（佛）死す
ヴェデキンド（獨）の「地震」上演さる。作者自ら其劇主人公に扮す
ロスタン（佛）の「シラノ・ド・ベルジュラック」出づ
イプセン（諾）の「ボルクマン」出づ
オスカア・ワイルド（英）の「獄中記」出づ

もの）
子規　俳人蕪村（新聞日本）
泥牛　新派俳家句集
紅葉　金色夜叉（讀賣新聞）
　一葉全集
獨歩　源おぢ（文藝倶樂部）
眉山　絃聲（文藝倶樂部）
柳浪　畜生腹（太陽）
賤子譯　小公子
四迷譯　うき草
鷗外・喜美子譯　かげ草
櫻癡　春雨傘（新小說）
逍遙　沓手鳥孤城落月（新小說）
樗牛　我邦現今の文藝界に於ける批評家の本務（太陽）
樗牛　明治の小說（太陽）
樗牛　春のや主人の「牧の方」を評す（太陽）
樗牛　日本主義（太陽）

【明治三十一年】（二五五八・一八九八）

大月隆編　山高水長
藤村　一葉舟
桂月　黄菊白菊
藤村　夏草

文學界廢刊
心の花創刊
猪之吉いかづち會結成

ドレフュ事件に對し、ゾラ（佛）大膽なる公開狀を掲げて政府を攻撃す
ホイズマンス（佛）の「ラ・カセドラル」出づ

子規　歌よみに與ふる書（新聞日本）
碧梧桐・三川・東洋城　新俳句
露伴　二日物語（文藝倶樂部）
魯庵　暮の廿八日（新著月刊）
鏡花　笈摺草紙（文藝倶樂部）
風葉　戀ながし（讀賣新聞）
鏡花　通夜物語（大阪毎日新聞）
蘆花　不如歸（國民新聞）
四迷譯　親ごゝろ（文藝倶樂部）
樗牛　ワルトホイツトマン（太陽）

國民之友廢刊
ホトトギス東京より發刊
社會主義研究會創立
早稻田文學廢刊
＊倫理研究熱勃興
＊社會小說出づ

メエテルリンク（白）の「智慧と運命」出づ
ハウプトマン（獨）の「馭者ヘンシェル」出づ
トルストイ（露）の「復活」出づ
ロオデンバッハ（白）死す

【明治三十二年】（二五五九・一八九九）

晩翠　天地有情
泣菫　暮笛集
建樹　深山櫻
羽衣　新撰詠歌法
貞利　和歌境の革新に就いて（讀賣新聞）

良吉

貞利わかな會設立
反省雜誌中央公論と改題
根岸短歌會成立
＊東京新詩社創立
＊家庭小說流行

高等女學校令私立學校令發布せらる

ゾラ（佛）「四福音書」の中の「多産」を公にす
イプセン（那）の「蘇生の日」出づ

緑雨　おぼろ夜（文藝倶樂部）
魯庵　落紅（太陽）
天外　蛇いちご
風葉　竈下地
幽芳　己が罪（大阪毎日新聞）
鏡花　湯島詣
魯庵　朝茶の子（新小說）
鷗外　審美綱領
樗牛　時代管見
樗牛　時代の文學と大文學（太陽）
高橋茂三郎編　月の桂
花袋　ふるさと
樗牛　時代精神論

＊寫生文出づ

【明治三十三年】（二五六〇・一九〇〇）

醉茗編　詩美闡讃
月郊　花清集
月の桂の〔や・春塘〕　朝嵐夕雨
鏡花　高野聖（新小說）
蘆花　思ひ出の記（國民新聞）
天外　はつ姿（二六新報）
矢一　國文學史十講

清　風
敦　子
正　一
圓　朝
操　山
武　郷

太平洋創刊
歌舞伎創刊
明星創刊
小天地創刊
＊子規鐵幹論爭
＊田園小說

北淸事變
政友會成立

ゾラ（佛）「四福音書」の中の「眞理」を公にす
プレボオ（佛）の「强き處女」出づ
メエテルリンク（白）の「蜂の生活」出づ
トルストイ（露）の「復活」出づ
チエホフ（露）の「鷗」出づ
ニイチエ（獨）死す
オスカア・ワイルド（英）死す
ラスキン（英）死す

樗牛　土井晩翠に與へて當今の文壇を論ずる書（太陽）
鷗外　審美新說
桂月　文學小觀
抱月・宙外・青々園　風雲集
實　バイロン
佳澄　シエレー

【明治三十四年】（二五六一・一九〇一）

醉茗　無弦弓
鐵幹　鐵幹子
鐵幹　むらさき
晩翠　晩鐘
雨江　暗香疎影
泡鳴　露じも
臥城　小百合集
藤村　落梅集
鐵幹編　片袖第一集
泣菫　ゆく春
柴舟譯　ハイネの詩
鐵幹編　片袖第二集
薫園　かたわれ月
躬治　迦具土
晶子　みだれ髪
黒瞳子　新派和歌評論

諭吉
乙羽
兆民

新文藝創刊
精神界創刊
女學世界創刊
白虹創刊
俳聲創刊
＊ニイチエ主義盛
＊浪漫主義盛
＊文壇廓清論起る
＊滿之の精神主義
青年思想界風靡

社會民主黨組織
星亨殺さる

ダンヌンツィオ（伊）の「フランセスカ・ダ・リミニ」上演せらる

子規選　春夏秋冬
獨歩　武藏野
鏡花　註文帳（新小說）
風葉　さめたる女（新小說）
春雨　無花果（大阪毎日新聞）
眉山　ふところ日記
春葉　錦木（新小說）
天外　はやり唄
月郊譯　イブセンの社會劇
敏譯　みなつくし
樗牛　文明批評家としての文學者（太陽）
樗牛　姉崎嘲風に與ふる書（太陽）
逍遙　英文學史
樗牛　美的生活論
敏　文藝論集
敏　詩聖ダンテ
敏　最近海外文學
兆民　一年有半
智學・宗門の維新
信綱編　竹柏園集（第一編）
月の桂のや　曙集
紫苑會編　くさぶえ
總南子　名殘
國府犀東　花柘榴

阪井久良伎　へなづち集
大日本歌清會　文境照魔鏡
下田歌子　新題詠歌捷徑

【明治三十五年】（一五六二・一九〇二）

有名　草わかば
夜雨　夕月
半月　半月集
鐵幹　うもれ木
鷗外　玉匣両浦島
薫園・宗舟　叙景詩
みづほのや　つゆ草
鐵幹　新派和歌大要
日本新詩學會編　新派和歌辭典
子規　獺祭書屋俳句帖抄
蘆花　黒潮（國民新聞）
風葉　涼炎（新小說）
花袋　重右衛門の最後
荷風　地獄の花
風葉　沼の女（新小說）
秋聲　春光（文藝界）
柳浪　雨（新小說）
藤村　舊主人（新小說）
鏡花　起誓文（新小說）
獨歩　酒中日記（文藝界）
鷗外譯　即興詩人

樗牛
子規
茂樹
採菊

龍土會創集
文藝界創刊
藝文創刊
萬年艸創刊
＊宗教熱、哲學熱起る

日英同盟
東京專門學校早稻田大學と改稱

ゾラ（佛）死す
ハウプトマン（獨）の「哀れなるハインリッヒ」出づ
フレンセン（獨）の「イエルン・ウウル」出づ
メェテルリンク（白）の「モンナ・ヷンナ」出づ
アンドレエエフ（露）の「霧」及び「深淵」出づ

涙香　噫無情（萬朝報）
鷗外　審美極致論
抱月　新美辭學
鷹太郎　文界の大魔王
梁川　宗教的眞理の性質（早稲田學報）
樗牛　日蓮上人とは如何なる人ぞ（太陽）
文雄　新社會
信綱　竹柏園集（第二編）
淡煙漁史　淡煙一抹
濤涯　おぼろ舟
北村佳逸　殘月
阪井久良伎　文壇笑魔鏡

【明治三十六年】（二五六三・一九〇三）

白星　日本國歌
有明　獨絃哀歌
花外　社會主義詩集
鷗外　長曾我部信親
紫紅　日蓮上人
信綱　思草
印東昌綱「佐々木信綱」　磯馴松
白江　落穗集
信綱　國歌評釋
月郊　春雪集

紅葉
直文
滿之
團十郎
菊五郎
歌子

不如帰新派劇に演ぜらる
左千夫馬酔木創刊
薫園白菊會成立
白百合創刊
平民新聞發刊
卯杖創刊
＊青年の懐疑的傾向濃厚
＊新劇運動はじまる

スネス（伊）死す
ギッシング（英）死す
ホイッスラア（米）死す
ショオ（英）の「人と超人」出づ

鳳平　新自詩歌評論
春葉　泊り客（新小説）
天外　魔風戀風（讀賣新聞）
鏡花　舞の袖（新小説）
綠雨　みだれ箱
露伴　天うつ浪（讀賣新聞）
子規・四方太　寫生文集
鏡花　白羽箭（文藝俱樂部）
鏡花　風流線（國民新聞）
抱一庵譯　聖人歟盜人歟
秋濤譯　椿姬
紅葉　鐘樓守
月郊　大鹽平八郎
月郊　江戶城明渡
無書子　デカダン論（帝國文學）
秋水　社會主義神髓
鷹太郎譯　プラトン全集
淚香　天人論

＊譯詩流行

【明治三十七年】（二五六四・一九〇四）

晶子　小扇
晶子・鐵幹　毒草
子規選　竹の里人撰歌
久保よりえ編　瑠璃草
柴舟　銀鈴
大月隆　征露の歌

永機
綠雨
抱一庵
八雲
左團次
愚庵

＊自然主義の聲漸く喧し
時代思潮創刊
桐一葉上演
新潮創刊
七人創刊

平民新聞紙上に非戰論掲載
日露開戰（二月）
孫文亡命し來る（十二月）

チエホフ（露）の「櫻の園」出づ
チエホフ（露）死す
ヨオカイ（匈）死す

子規　竹の里歌
千亦　二人づれ
服部躬治　あまびこ（第一集）
浮浪庵主人編　花月集
敏　鷺の歌（明星）
白星　七つ星
花外　花外詩集
天壇　詩人蒲原有明を論ず（帝國文學）
露伴　出廬（讀賣新聞）
藤村　藤村詩集
逍遙　新曲浦島
操山　大西博士全集第七巻
泡鳴　夕潮
萩之家遺稿
眞一郎編　竹之里人撰歌
虚子　連句論（ホトトギス）
樗牛全集
逍遙　新樂劇論
花袋　露骨なる描寫（太陽）

柴舟車前草社創立

【明治三十八年】（二五六五・一九〇五）

登美子・雅子・晶子　戀ごろも
みづほのや
山百合　山上湖上

鼎軒
寧齋

象徴詩興る
牧の方上演
新古文林創刊
空穂十日會設立

奉天の役
日本海の海戰
ポーツマス媾和條約

ハウプトマン（獨）の「エルガ」出づ
クウプリン（露）の「決闘」出づ
アンドレエフ（露）の「赤き笑」出づ
スクラアム（那）死す

空穂　まひる野
御風　睡蓮
清水橋村
正富汪洋　夏ひさし
躬治編　あまびこ（第二集）
露風　夏姫
金井莊陽　梅東百詩
薫園編　凌霄花
長江　小羊
白命　白命遺稿
朴念戸編　へなぶり
[illegible]村　實ざくら集（初編）
獨步編　征露軍人吟詠集
林外　夏花少女
啄木　あこがれ
泣菫　二十五弦
泡鳴　悲戀悲歌
泣菫　白玉姫
醉茗　塔影
醉茗編　青海波
柴舟　金帆
有明　春鳥集
蕪　小野のわかれ
敏譯　海潮音
夜雨　花守
逍遙　新曲かぐや姫
薫園　小詩國

日比谷公園國民大會・警察署燒打事件

漱石 我輩は猫である（ホトトギス）
漱石 倫敦塔（帝國文學）
嵯峨のや 巨漢（新小說）
風葉 青春（讀賣新聞）
獨步 獨步集
露伴 土偶木偶（新聞日本）
漱石 薤露行（中央公論）
魯庵 復活（新聞日本）
梁川 見神の實驗（新人）
孤村 神經質の文學（帝國文學）
梁川 梁川文集
天溪 文藝觀
梁川 病間錄
天溪 表象主義の文學
作太郎 國文學全史・平安朝編

【明治三十九年】（二五六六・一九〇六）

花外 ゆく雲
無涯 すひかつら
葉舟 あららぎ
素琴 日本民謠概論（帝國文學）
泣菫 白羊宮
清白 孔雀船

櫻癡
資之

藝苑創刊
早稻田文學再刊
文藝協會設立
文章世界創刊
趣味創刊
常磐會設立
佐保鹿創刊

イブセン（那）死す
キイランド（那）死す
フォガッツアロ（伊）の「聖者」出づ
トルストイ（露）の「シエクスピア論」出づ
ガルスワアシイ（英）の「銀の匣」出づ

敏　象徴詩釋義（藝苑）
晩翠　東海遊子吟
米次郎編　あやめ草
林外　花妻
夜雨　花守日記
鐵幹等　白羊宮合評
泣菫　葛城の神（早稻田文學）
米次郎編　豐旗雲
白羊　さゝぶえ
晶子　舞姫
薫園　伶人
晶子　夢の華
霞村　池塘集
碧梧桐編　續春夏秋冬
夕星會編　白すみれ
朴山人編　へなぶり（第二輯）
直文　萩之家歌集
信綱　あけぼの
空穗・葉舟　明暗
麗陽　月桂集
信綱編　玉川集
汪洋　小鼓
紫玉　紫玉
甫　木精

文藝協會第一回公演
夕暮白日社創立
＊プラグマティズム紹介さる
＊民謠研究熱起る

錦江　錦江俳韻
石川正作編　明治新體詩集（第一集）
森田義郎　短歌小梯
無鳴　作法詳解新派和歌獨習
鏡花　海異記（新小說）
左千夫　野菊の墓（ホトヽギス）
藤村　破戒
獨步　運命
天外　コブシ（讀賣新聞）
漱石　坊ちやん
眉山　觀音岩
三重吉　千鳥（ホトヽギス）
漱石　漾虚集
漱石　草枕（新小說）
四迷　其面影（東京朝日新聞）
逍遙　常闇（早稻田文學）
月郊　櫻時雨（新小說）
抱月　囚はれたる文藝（早稻田文學）
泡鳴　神秘的半獸主義
抱月　ルキ王家の夢のあと（早稻田文學）
準太郎　明治文學史
淺次郎　進化と人生

【明治四十年】（二五六七・一九〇七）

胡蝶　湖畔の悲歌
夜雨　二十八宿
作太郎　新體詩論（帝國文學）
林外編　日本民謠全集
雨情　朝花夜花
愛華　管絃
鷗外　うた日記
甲之　消なば消ぬがに
泡鳴　新體詩の作法
萬里　わかき日
薫園　わがおもひ
柴舟　靜夜
秋香　秋香集
夕暮　哀樂第一
碧梧桐　三千里
漱石　鶉籠
鏡花　婦系圖（やまと新聞）
三重吉　山彦（ホトヽギス）
白鳥　塵埃（趣味）
秋聲　焔（國民新聞）
虛子　風流懺法（ホトヽギス）
三重吉　千代紙
青花　南小泉村（新潮）
獨步　濤聲

梁川
[illegible]南
西崖
美静

向日葵創刊
日本人を日本及日本人と改題
第二次平民新聞發刊
觀潮樓歌會創始
白百合廢刊
西園寺公文士招待（雨聲會）
新思潮創刊
文藝協會第二回演藝會に、土井春曙「ハムレット」を演ず
早稻田詩社起る
*「文章世界」・早稻田文學に自然主義論多し
*自由・口語詩勃興の氣運動く
*新傾向俳句風靡

文部省主催美術展覽會第一回開催

ユイスマンス（佛）歿す
メエテルリンク（白）「青い鳥」出づ
シュニッツレル（墺）の「廣野の道」出づ

漱石　虞美人草（東京朝日新聞）
鏡花　無憂樹
春葉　春葉集
未明　愁人
花袋　蒲團（新小說）
白鳥　紅塵
青花　第一人者（中央公論）
四迷　平凡（東京朝日新聞）
秋聲　凋落（讀賣新聞）
風葉　戀ざめ（新聞日本）
未明　綠髮
青花　青花集
　思軒全集
敏　文藝講話
信策　藝術と人生
泡鳴　新體詩史（新思潮）
天溪　論理的遊戲を排す（太陽）
梁川　回光錄
晶子　黑髮
抱花　磯草
十月會同人　白露集
櫻巷　名家模範新派歌集
奇璨　玉ぶち
無鳴　新派和歌評釋
正綱　無弦

【明治四十一年】（二五六八・一九〇八）

有明　有明集
御風　有明集を讀む（早稲田文學）
泡鳴　閻の在盤
御風　御風詩集
天塘　獨逸の抒情詩に於ける印象的自然主義（早稲田文學）
抱月　口語詩問題（早稲田文學）
晶子　常夏
牧水　海の聲
東洋城編　新春夏秋冬
乙字　俳句界の新傾向（アカネ）
碧梧桐　新傾向大要
夕暮　哀樂
華坡　殘照
信綱　玉琴
晶子　白光
露滴　金盃
水衣　朝きよめ
空穂　新派短歌評釋
渚園　新題歌集
白泉　面影
白鳥　何處へ（早稲田文學）

獨歩
眉山
春汀
誠一
粲
雀志

＊世紀末的頽廢思潮漲る
馬酔木廢刊
アカネ創刊
わか竹創刊
白日社再興
都會詩社結成
アラヽギ創刊
明星廢刊

森鷗外臨時假名遣調査委員會に於て新假名遣案に反對す
戊申詔書下る

サルドオ（那）死す
ヨナス・リイ（那）死す
アルチバアセフ（露）の「サアニン」出づ、サアニズムの呼聲高し

花袋　一兵卒（早稲田文學）
獨歩　竹の木戸（中央公論）
獨歩　二老人（文章世界）
虚子　鶏頭
鏡花　草迷宮
花袋　生（讀賣新聞）
藤村　春（東京朝日新聞）
青果　家鴨飼（早稲田文學）
鏡花　沼夫人（新小説）
荷風　あめりか物語
秋聲　出産（東京朝日新聞）
獨歩　獨歩集第二
漱石　三四郎（東京朝日新聞）
白鳥　二家族（早稲田文學）
魯庵　復活前編
逍遙　お夏物狂ひ（早稲田文學）
漱石　鶏頭序
抱月　文藝上の自然主義（早稲田文學）
天溪　現實暴露の悲哀（太陽）
天溪　所謂餘裕派小説の價値（太陽）
抱月　自然主義の價値（早稲田文學）
天溪　無解決と解決（太陽）

天溪　自然主義
王堂　我國に於ける自然主義を論ず（明星）
宙外　非自然主義
泡鳴　新自然主義
矢一　日本國民性十講

【明治四十二年】（二五六九・一九〇九）

白秋　邪宗門
建樹　野菊
露風　廢園
晶子　佐保姫
紫舟　永日
碧梧桐編　日本俳句鈔
照る　いづみ（第三卷）
かけ會同人　カケ
千亦　利根川
蘆村　あゝ青春
薫園　和歌辭典
草平　煤煙（東京朝日新聞）
泡鳴　耽溺（新小說）
荷風　ふらんす物語
葉舟　森（讀賣新聞）
白鳥　白鳥集
漱石　それから（東京朝日新聞）
鷗外　ヰタ・セクスアリス

四迷
學海
登美子

スバル創刊
牧水創作創刊
自由詩社成る
創作休刊
尾上庭園創刊
自由劇場起る、第一回公演「ボルクマン」
文藝革新會組織
＊耽美享樂派文學行はる
＊新劇運動盛となる
＊歌壇に自然主義傾向盛

伊藤博文ハルピンにて射殺さる

エヅアル・ロード（佛）死す
ブリュンチエール（佛）死す
ヴイホルスタム（瑞）死す
シング（英）死す
スヰンバアン（英）死す
メレディス（英）死す
クウプリン（露）の「ヤアマ」出づ
ソログウブ（露）の「かくれんぼ」出づ

（スバル）
眉山全集
薰　大川端、讀賣新聞）
白鳥　落日（讀賣新聞）
花袋　妻（新聞日本）
藤村　芽生（中央公論）
鏡花　白鷺（東京朝日新聞）
花袋　田舍教師
荷風　冷笑（東京朝日新聞）
荷風　すみだ風（新小説）
蘆花　寄生木
鷗外　プラムウラ（スバル）
鷗外　一幕物
逍遙　ハムレット
漱石　文學評論
抱月　近代文藝の研究
抱月　懷疑と告白（早稻田文學）

【明治四十三年】（二五七〇・一九一〇）

霞村　草山の詩
醉茗　霧
寬　梛の葉
柳虹　路傍の花
露風　寂しき曙
牧水　獨り歌へる
夕暮　收穫

秋香
作太郎
美妙
楠緒子
潮山
幹夫

*新理想文學起らんとす
創作再刊
白樺創刊
三田文學創刊
新思潮再刊
劇と詩創刊

日韓合併
幸徳秋水大逆事件

トルストイ（露）死す
ビョルンソン（那）死す

技術の規定

薫園　醒めたる歌
寛　相聞
元　驕樂
牧水　別離
Aikwa　Nakiwarai
寛編　禮嚴法師歌集
　冬道翁歌集
勇　酒ほがひ
孝子　鷄冠木
柴舟　短歌滅亡私論（創作）
稲里　朝夕
啄木　一握の砂
白泉　耽樂
江南文三
晶子　} 花
さはらび　このはな集
艷子　采風
桃崖　感象
灌園　光
夢二　花の卷
羽根田文明　新題詠歌詞林
鏡花　歌行燈（新小説）
藤村　家（讀賣新聞）
敏　渦卷（國民新聞）
鷗外　青年（スバル）
花袋　緣（毎日電報）
青果　盲魚（中央公論）
漱石　門（東京朝日新聞）

文藝委員會設置

秋江　別れた妻に送る手紙（早稲田文學）
節　土（東京朝日新聞）
泡鳴　放浪
秋聲　足跡（讀賣新聞）
白鳥　微光（中央公論）
鏡花　三味線堀（三田文學）
潤一郎　刺青（新思潮）
二葉亭全集
獨歩全集
抱月　人形の家（早稲田文學）
鷗外　續一幕物
春雨　牧師の家（東京朝日新聞）
潤一郎　象（新思潮）
勇　河内屋與兵衛（新思潮）
抱月　文藝思潮を描ける文學（早稲田文學）
泡鳴　悲哀の哲理（文章世界）
文藝史（太陽臨時增刊）
敏　思想問題
抱月　自己と分裂生活（早稲田文學）
信綱　日本歌學史

正治譯　意志と現識としての世界

【明治四十四年】（三五七一・一九一一）

夕暮　春のゆめ
白秋　思ひ出
東明　夜の舞踏
晶子　春泥集
牧水　路上
福島四郎編　大和田建樹歌集
薫園　山河
井泉水　俳境最近の傾向を論ず（層雲）
新井洸太郎編　佐藤秀信歌集
百田楓花　愛の鳥
春潮　落暉
夢二　櫻さく國（白風の卷）
薫園　文話歌話
八波共月　草花
泡鳴　斷橋（毎日電報）
泡鳴　發展（大阪新報）
潤一郎　少年（スバル）
白鳥　泥人形（早稻田文學）
荷風　紅茶のあと（三田文學）

槐南
建樹
團藏
音次郎

＊新しき女性現る
＊人道主義文學おこる
詩歌創刊
層雲創刊
新思潮復刊
車前草創刊
青鞜創刊
創作休刊
朱欒創刊
文藝協會組織を改め帝劇に「人形の家」を上演す

＊南北朝正閏論大いに行はる
幸德秋水等死刑

フォガッツァロ（伊）死す
ハウプトマン（獨）の「鼠」出づ

秋聲　黴（東京朝日新聞）
鷗外　雁（スバル）
白鳥　毒（國民新聞）
實篤　お目出度き人
潤一郎　信西（スバル）
綺堂　修禪寺物語（文藝倶樂部）
杢太郎　和泉屋染物店（スバル）
鷗外　妄想（三田文學）

【明治四十五年】（三五七二・一九一二）

挽歌　習作
葵村　夜の葉
白秋・露風　忽忘草
楓花　夜
元　南方の花
晶子　青海波
哀果　黄昏に
空穗　空穗歌集
正風　歌ものがたり
啄木　悲しき玩具
夕暮　陰影
牧水　死か藝術か
勇　水莊記
信綱　新月
乙字　芭蕉の境涯（人世と

文藝委員會坪内逍遙に賞牌賞金を贈る
車前草休刊
自然創刊
モザイク創刊
文藝協會「故郷」上演禁止さる
＊自然主義漸く行きつまり新理想主義・新浪漫主義など之に代らんとす

米價騰貴・細民窮乏
明治天皇崩御
大正改元
乃木大將殉死

ストリンドベルグ（瑞）死す
ガルスワアジイ（英）の「鳩」出づ

表現）

漱石　彼岸過ぎ迄（東京朝日新聞）
潤一郎　悪魔（中央公論）
三重吉　返らぬ日
未明　魯鈍な猫（讀賣新聞）
未明　物云はぬ顔
未明　少年の笛
荷風　新橋夜話
實篤　世間知らず
漱石　行人
鷗外譯　みれん
白村　近代文學十講
紫舟　日記の端より
斗雲會同人　新樹
潮風　五々の春
牧水　牧水歌話

參考書

1 垣内松三先生著　國文學年表
2 垣内松三先生著　國文學系統表
3 久松潜一氏著　明治文學序說
4 岩城準太郎氏著　明治大正の國文學
5 高須芳次郎氏著　日本現代文學十二講
6 生田長江氏等著　近代文藝十二講
7 東京堂編　現代短歌書展覽會目錄
8 三省堂編輯所編纂　最新世界年表
9 永井一孝氏述　國文學發達史
10 宮島新三郎氏著　明治文學十二講

右にあげた圖表は、技術の根據に關する思索を考慮してつくられた最も素朴な圖表である。ケーラーは「ゲシタルト心理學」の中で、その思索を進めるために、强く直接經驗から出發すべきことを語つてゐるが、あらゆる思索の場合に、この事は正當であると云へるであらう。われわれが出發するために現に存して居るものは、直接經驗の世界である。學問とは、この直接經驗の世界を、反省し批判し、附加し削除してゆくことに外ならぬ。この意味に於て、近世解釋學の出發點となるものは、最も單純な圖表でなくてはならない。技術の根據の思索を內に持つた限りに於て、第一步的なるものでなければならない。われわれは解釋の實踐において、最後までこれを補正してゆけるのである。さうして、さうする事が、學問的なのである。

二　技術の規定

さてわれわれの硏究の對象は、近世文學の解釋の技術である。今、われわれに與へられて居るものは、その技術の根據となるべき思索と、その思索を考慮してつくられた一つの圖表である。この二つのものを根抵として、われわれの技術を規定しようとするのである。

こゝで、第一にわれわれが注意しなければならないのは、近世文學の解釋は、今も尙多く見られるやうに、近世文學の作品を除外したる場所においてなされることが、學問的であり得ないと云ふことである。近世文學の解釋は、われわれが近世文學の作品に打ち當つて、われわれの有する解釋技術によつて、苦心して解釋してゆく時にのみ學問的であり得る。

以上の見解に基づいて、われわれは、われわれの技術的段階を大別して五つとすることが出來る。

第一、個々の文學作品の原現象の把捉。文學作品の原現象の把捉は、國語解釋學の示す所に從つてなされるべきで

ある。このことに關する技術は、信頼するに足る進歩を示してゐる(形象理論に關する諸文獻參照)。把捉せられたる原現象は、本質的に個性的であり、特殊的である。然し、文學作品における原現象の特殊と云ふことを嚴密に分析して考へて見れば、その作品は、ある事に就いて語られてゐるものなのであるから、就いて語られたものが特殊であるよりも、そのものに就いて考へる所の考へ方が特殊であるといふこととなる。あるものに就いての考へ方と云ふことは、云ひかへて見れば、その作品が生れ出でた必然的理由の展開である。卽ち、考へ方とは、問題とするその仕方をいふのである。故に、そこには、特殊的なる考へ方が對してある所の「問題」がある筈である。

第二、文學作品が、就いて問題としてゐる所のものを、個性的な考へ方から分離する。勿論、この場合、問題とされてゐるものの認識は、概括的なるものであつてはならない。嚴密なる分析を經て、單位的なるものとなつて居なくてはならない。

第三、分離されたる「問題」の中の、共通なるものを保有する作品を連結して、共通保有線を描く。この場合、この線は、作品の制作年月が同じである時につくられる直線とは別であつて、むしろ、年月を無視することによつて、曲線となる。こゝに見られる幾つかの曲線の並列は、文學の新生の實存を示すものである。

第四、共通保有並列線の中に於ける同一樣式の作品を連結する。この線は、共通保有並列線と交錯する。こゝに樣式史が生れるのであるが、かゝる連結線を可能とする根源的なるものは、人間の自覺新生であつて、ケーラーのいふ actual な事態が、これをあらしめてゐるのである。こゝに、近世解釋學が獨自的に考慮される理由がある。

第五、共通保有並列線と樣式史線との交點において、文學作品を定着せしめる。こゝに於て、それ〴〵の作品が眞

に存してゐる所の位置が明かになり、それらの各〻が自然的成員となつてゐる一つの近世文學と云ふ關聯が、「として」あらはれることによつて、認識される。(又、かくすることによつて、はじめて文學作品の眞の理會は可能である。)

近世文學解釋の技術は、以上の五つに示されたのであるが、この勞作が連結する所のものは、われわれの精神の內部における人間生存の在り方を知らんとする欲求である。

——(一九三四)

昭和九年十二月二十五日印刷
昭和九年十二月三十一日發行
國語科學講座（第十一回配本）

東京市神田區錦町一丁目十番地
編輯兼發行者 株式會社 明治書院
代表者 三樹退三

東京市神田區三崎町二丁目一番地
印刷者 株式會社明章印刷所
代表者 細谷鈷三

發行所 東京市神田錦町一丁目 株式會社 明治書院